

九州横断自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

—41—

朝倉郡杷木町所在大谷遺跡の調査  
甘木市所在柿原遺跡群の調査Ⅵ  
(L地区)

1996

福岡県教育委員会

# 九州横断自動車道関係

## 埋蔵文化財調査報告

—41—

朝倉郡杷木町所在大谷遺跡の調査  
甘木市所在柿原遺跡群の調査Ⅵ  
(L地区)

## 序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公園から委託を受けて、昭和54年度から実施してきた九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

九州横断自動車道の小郡・日田間は平成2年3月に開通していますが、今回の報告書は、昭和62年度に行った朝倉郡杷木町所在の大谷遺跡と、昭和54・59・60年度に行った甘木市所在の柿原遺跡群についてのもので、柿原遺跡群では6冊目にあたります。

調査に際しましては、地元の方々をはじめ、関係各位のご協力をいただき、多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

本書が、文化財愛護思想の普及と、生涯学習や学術研究に役立てば幸甚です。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

## 例 言

1. 本書は、昭和54・59～62年度に福岡県教育委員会が、日本道路公団から委託を受けて、九州横断自動車道建設と建設に伴う土取りのために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した、大谷遺跡と柿原遺跡群の6冊目の報告書であり、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の41冊目にあたる。
2. 本書の執筆は、小池史哲・伊崎俊秋・小田和利が分担した。
3. 掲載の写真のうち、遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物の写真は九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸一が撮影した。また柿原遺跡の航空写真は新原正典が撮影し、大谷遺跡の気球写真はフォトおおつかに撮影委託した。
4. 遺構の実測は調査担当者と武田光正・高田一弘が実施し、遺物の実測には担当者の他に高瀬照美・岡泰子が従事した。なお、図面の浄書には木下修・豊福弥生・塩足里美・原カヨ子の協力を得た。
5. 出土遺物の整理にあたっては岩瀬正信、金属器類の保存処理には九州歴史資料館の横田義章の協力を得た。
6. 挿図で使用する方位は座標北に統一した。
7. 本書の編集は小池史哲が担当した。

# 本文目次

I 調査の経過 .....	1
II 遺跡の位置と環境 .....	9
III 大谷遺跡の調査 .....	13
1. はじめに .....	13
2. 古墳と古墳時代以降の遺構と遺物 .....	15
3. 縄文時代の遺構と遺物 .....	26
4. おわりに .....	38
IV 柿原遺跡群の調査VI .....	41
1. はじめに .....	41
2. L北古墳群 .....	42
3. L3・4調査区の生活遺構 .....	52
4. L南古墳群 .....	71
5. おわりに .....	76

# 図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1-1	大谷遺跡遠景（西南から）	13
-2	遺跡遠景（南から）	13
-3	遺跡遠景（南から気球写真）	13
2-1	大谷1号墳全景（北西から）	15
-2	1号墳全景（南から）	15
-3	1号墳全景（南上方から）	15
3-1	大谷1号墳石室・内腰列石（南から）	15
-2	1号墳石室・内腰列石（南から）<天井石除去後>	15
4-1	大谷1号墳石室玄門（南から）	15
-2	1号墳玄室内（南から）	15
5-1	大谷1号墳全景（北側背後から）	15
-2	1号墳石室（玄門を望む）	15
-3	1号墳内腰列石（西から）	15
6-1	大谷2号墳遠景（南東から）	21
-2	2号墳周溝東側土層（西から）	21
-3	2号墳全景（南から）	21
7-1	大谷2号墳石室全景（南から）	24
-2	2号墳石室近景（南から）	24
-3	2号墳石室東側壁と玄門（西から）	24
8-1	大谷遺跡西尾根の東斜面全景（北西から）	26
-2	SX1～4（北西から）	28
-3	SX1～4（北東から）	28
9-1	大谷5号土坑（南から）	30
-2	6号土坑（南から）	30
-3	7号土坑（北から）	30
10-1	大谷8号土坑（北から）	30
-2	9号土坑（南から）	30

図 版 10-3	10号土坑 (北東から) .....	33
11-1	大谷11号土坑 (北から) .....	33
-2	出土土製品・鉄製品・石器・古銭 .....	36
12	大谷遺跡出土土器・石器類 .....	36
13-1	柿原遺跡群航空写真 .....	41
-2	柿原遺跡群L地区航空写真 .....	41
14-1	柿原L北1・2号墳全景 (南から) .....	42
-2	L北1号墳全景 (南から) .....	43
-3	L北1号墳石室 (南から) .....	43
15-1	柿原L北2号墳全景 (南から) .....	44
-2	L北2号墳全景 (西から) .....	44
16-1	柿原L北2号墳石室 (南から) .....	48
-2	L北2号墳右側前面区画 (南から) .....	48
17-1	柿原L北2号墳玄室敷石状況 .....	48
-2	L北2号墳後道敷石状況 .....	48
-3	L北2号墳玄室遺物出土状況 .....	48
18-1	柿原L2~4調査区全景 (北北東から) .....	52
-2	L3調査区 (北北東から) .....	52
-3	L3調査区調査風景 .....	52
19-1	柿原L3調査区2号住居跡 (東から) .....	54
-2	2号住居跡カマド (北から) .....	54
-3	完掘後の2号住居跡 (東から) .....	54
20-1	柿原L4調査区全景 (北から) .....	64
-2	L4調査区住居跡 (東から) .....	64
-3	L4調査区住居跡 (南から) .....	64
21-1	柿原L4調査区住居跡カマド (北から) .....	64
-2	住居跡カマド (東から) .....	64
-3	住居跡屋内土坑 (東から) .....	64
-4	住居跡製鉄炉跡 (北から) .....	66
22-1	柿原L南1・2号墳 (東から) .....	71
-2	L南1号墳石室 (南から) .....	73
-3	L南1号墳石室基部と周溝 (南から) .....	71
23-1	柿原L南2号墳 (南から) .....	74

図版 23-2	L南2号墳石室(南から)	74
-3	L南2号墳石室基底部(南から)	74
24	柿原L3調査区1・2号住居跡出土土器	53
25	柿原L3調査区2号住居跡・1号土坑出土土器	56
26	柿原L3調査区土坑・包含層出土土器	61
27	柿原L4調査区住居跡出土土器	66
28	柿原L4調査区住居跡等出土土器, L北2号墳出土金属器類	51
29	柿原L3調査区出土製品, L4調査区出土石器・鉄製品・鉄滓類	58

## 挿 図 目 次

第 1 図	九州横断自動車道路線図(1/842000)	2
第 2 図	大谷遺跡周辺の地形と遺跡の分布(1/50000)	10
第 3 図	柿原遺跡群周辺の地形と遺跡の分布(1/50000)	11
第 4 図	大谷遺跡位置図(1/2000)	13
第 5 図	大谷1号墳地形測量図(1/200)	14
第 6 図	大谷1号墳遺構図(1/200)	16
第 7 図	大谷1号墳墳丘土層図(1/80)	折込み
第 8 図	大谷1号墳内蔵列石実測図(1/60)	17
第 9 図	大谷1号墳石室実測図(1/60)	18
第 10 図	大谷1号墳前面障群実測図(1/60)	19
第 11 図	大谷2号墳地形測量図(1/200)	20
第 12 図	大谷2号墳遺構図(1/200)	21
第 13 図	大谷2号墳墳丘土層図(1/60)	22
第 14 図	大谷1号墳石室実測図(1/60)	23
第 15 図	大谷1・2号墳出土土器実測図(1/3)	25
第 16 図	大谷2号墳出土遺物実測図(1/2)	25
第 17 図	大谷遺跡西南部遺構配置図(1/200)	折込み
第 18 図	大谷SK2・4・9出土土器実測図(1/3)	26
第 19 図	大谷SX1~4実測図(1/60)	27
第 20 図	大谷遺跡土坑実測図1(1/40)	29

第 21 図	大谷遺跡土坑実測図 2 (1/40)	31
第 22 図	大谷遺跡土坑等出土土器実測図 1 (1/3)	32
第 23 図	大谷遺跡土坑等出土土器実測図 2 (1/3)	34
第 24 図	大谷遺跡土坑等出土土器実測図 3 (1/3)	35
第 25 図	大谷遺跡出土石器実測図 1 (1/2)	36
第 26 図	大谷遺跡出土石器実測図 2 (1/3)	37
第 27 図	柿原 L 地区地形図 (1/1500)	40
第 28 図	柿原 L 北 1・2 号墳丘陵地山整形面測量図 (1/200)	42
第 29 図	柿原 L 北 1 号墳石室実測図 (1/60)	43
第 30 図	柿原 L 北 2 号墳丘陵断面実測図 (1/60)	45
第 31 図	柿原 L 北 2 号墳丘陵列石・石室閉塞状況実測図 (1/60)	46
第 32 図	柿原 L 北 2 号墳石室実測図 (1/60)	47
第 33 図	柿原 L 北 2 号墳石室内散石・遺物出土状況実測図 (1/30)	50
第 34 図	柿原 L 北 2 号墳出土金属器実測図 (1/2・実大)	51
第 35 図	柿原 L 3 調査区遺構配置図 (1/300)	52
第 36 図	柿原 L 3-1 号住居跡実測図 (1/60)	53
第 37 図	柿原 L 3-1 号住居跡出土土器実測図 (1/3)	53
第 38 図	柿原 L 3-2 号住居跡実測図 (1/60)	55
第 39 図	柿原 L 3-2 号住居跡カマド実測図 (1/30)	56
第 40 図	柿原 L 3-2 号住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	57
第 41 図	柿原 L 3-2 号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	58
第 42 図	柿原 L 3-1 出土土製品実測図 (1/2)	58
第 43 図	柿原 L 3-1 号土坑実測図 (1/60)	58
第 44 図	柿原 L 3-1 号土坑出土土器実測図 (1/3)	60
第 45 図	柿原 L 3-1 号包含層出土土器実測図 (1/3)	62
第 46 図	柿原 L 4 調査区遺構配置図 (1/300)	63
第 47 図	柿原 L 4-1 住居跡実測図 (1/60)	63
第 48 図	柿原 L 4-1 住居跡カマド実測図 (1/30)	64
第 49 図	柿原 L 4-1 住居跡屋内土坑実測図 (1/30)	64
第 50 図	柿原 L 4-1 住居跡内遺物出土状況と鍛冶炉実測図 (1/30)	65
第 51 図	柿原 L 4-1 住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	67
第 52 図	柿原 L 4-1 住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	68
第 53 図	柿原 L 4-1 住居跡出土鉄器実測図 (1/2)	70

第 54 図	柿原 L 4 - 2 号円形土坑実測図 (1/30)	70
第 55 図	柿原 L 4 - 出土石器実測図 (実大)	71
第 56 図	柿原 L 南古墳群遺構配置図 (1/600)	72
第 57 図	柿原 L 南 1・2 号墳地形図 (1/200)	73
第 58 図	柿原 L 南 1 号墳石室実測図 (1/60)	74
第 59 図	柿原 L 南 2 号墳石室実測図 (1/60)	75

## 表 目 次

表 1	九州横断自動車道関係遺跡一覧表	折込み
表 2	柿原遺跡群調査工程表	3

## 付 図

付図 1	大谷遺跡地形測量・遺構配置図 (1/400)
付図 2	柿原遺跡群地形図と石室形態別の古墳分布 (1/2000)

## I 調査の経過

### 柿原遺跡の調査経過

九州横断自動車道のルート決定は昭和51年のことであったが、福岡県内での施工延長距離は31.5kmあって、大半が盛土施工されることから採土場の確保が必要で、その候補地として甘木市柿原と朝倉郡朝倉町山田の採土場が有力視されていた。しかしながら、用地取得の問題もあって、山田採土場は昭和52年度にほぼ確定したものの、柿原採土場が最終的に決定されたのは昭和55年度になってからであった。

福岡県教育委員会では、文化財の分布調査を実施して路線内および柿原・山田採土場用地に多くの埋蔵文化財が存在することから、日本道路公団と文化財の保存とやむなく破壊される文化財の発掘調査にかかわる協議を進めてきた。そして、用地取得後に調査に着手したのでは時間的な制約から調査側のスケジュール調整が難航する恐れもあることから、用地買収交渉が未了の状況ではあったが、甘木工事事務所と協議を進めながら、昭和54年度から九州横断自動車道関係の埋蔵文化財調査を開始することとなった。このことから、柿原採土場用地についても、用地交渉が進行している部分を中心に、踏査をはじめとした現地での詳細な調査に着手することになったのである。

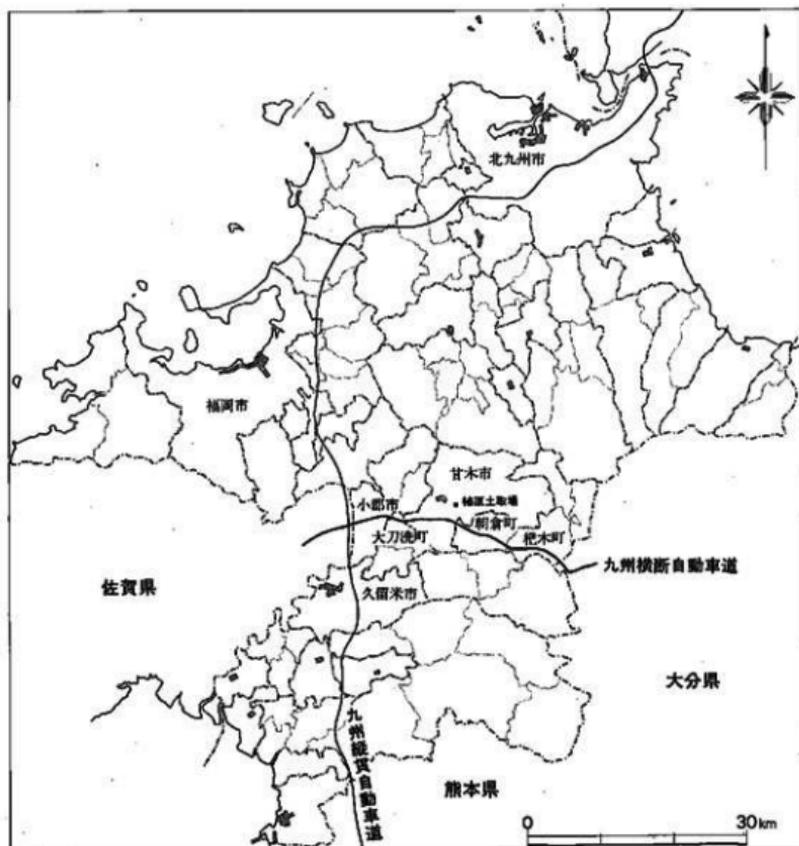
柿原採土場用地内は、安見ヶ城山山塊の山麓部にあつて、八つ手のように幾つもの尾根が延びて谷が刻まれる地形であったが、候補地内の尾根で分けて便宜上東側からABCの順に呼称することにしたが、最終的に採土場になった部分はD～I地区とL地区となった。

昭和54年度は、現地踏査で古墳の墳丘が確認された、L地区南西斜面を地形測量した。この地区での地形測量は、昭和55年度も4月26日から再開されて7月24日まで継続実施された。なお昭和55年度後半にはD地区の一部とI地区の地形測量が実施されたが、L地区全体の地形測量には及ばなかった。

昭和56年度以降は用地取得が進み、56年度後半から発掘調査が実施されることになったが、伐採・伐採材持ち出しと発破を伴う採土のため各種安全面を考慮しての作業であった。また作業進入路などの付帯施設と、搬出先の工程の関係もあり、文化財側で調査スケジュールを立てるというよりは、公団工事事務所側の工程でスケジュールが左右される状況でもあった。そしてL地区は昭和59年度になって調査にとりかかることになった。

柿原遺跡群では、昭和58年度末からE・F地区の調査に入ったが、この地区の尾根線にはほ

とんど古墳は発見されていなかったが、表土を除去するに従って、開墾時に覆い被せられた古墳が斜面から次々と姿を現し、斜面裾からは弥生時代の墓地在り発見されるなど、当初予想されていたよりも遺構密度が高いことが明らかであった。一方工事側は、G・H地区での広い面積で採土作業を進めていたが、岩盤にぶつかったために発破を繰り返しながらも進捗が遅れ気味となり、採土場所を周辺に求めることが多くなり、未調査のL地区も夏頃から土取りしたい旨公団側からの要望があった。このためE・F地区の調査と併行して、L地区の調査を開始する



第1図 九州横断自動車道路線図(1/842000)

表1 九州横断自動車道関係道群一覧表

地点	道群名	所在地	内容	面積	区 間											備 考	備考欄			
					54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1			H2		
1	小郡北河邊部	小郡市大字小郡	弥生遺跡、歴史跡	71,200					5,000									完了	1區	
2	神代遺跡部		弥生・古墳期布地	18,400								330	6,000					完了	7區	
3	大和井邊部	大和井	弥生・古墳	5,400														完了	15區	
4			大塚井邊部	9,200								3,500	3,000					完了	15區	
5	井上遺跡部	井上	弥生・中世集落	8,800								4,500	3,700					完了	10・38區	
6	藤原宮遺跡部	藤原町	弥生・古墳期布地(暫定)	32,000								500	7,300	10,100				完了	13・16區	
7		今狭	弥生期布地	7,200										200	100			完了	道群なし	
8	直道遺跡部	大刀狭町大字山原	古代道遺跡	4,000								3,600						完了	38區	
9	神代遺跡部		先土器・弥生・古墳・近世墓	19,800									100	6,700				完了	26區	
10	十三里遺跡部	甲斐本郷	古墳集落	34,400						700								完了	26區	
11	立野・吉原遺跡部	甘木市大字下野	古墳・奈良集落・墓池	33,800						13,800	13,500	10,000	3,000					完了	3・5・8・14・17區	
12	小石川川西水原	上原	中世	48,000								8,100						完了	道群なし	
13	東条島	上原馬田		56,000	200													完了	1區	
14	上ノ原遺跡部	上原	弥生・古墳集落	18,400	200													完了	1區	
15	西原・下原遺跡部	ツ水原水		54,800	3,800													完了	1・2・3區	
16	藤原遺跡部	藤永	縄文・弥生・古墳集落	7,800								1,400	5,400					完了	11區	
17	口ノ原遺跡部	牛迫	古墳期石	100									100					完了	31區	
18			敷布地	7,500									300					完了	道群なし	
19-A	塚ノ上遺跡部		古墳集落	30,000								700	8,200					完了	9區	
19-B	石原遺跡部	新倉町大字石原	古墳集落・奈良集落	20,000										8,400				完了	38區	
19-C	石原久保遺跡部		古墳集落	39,000										6,100				完了	26區	
20	中道遺跡部	大庭	縄文・弥生・奈良集落	15,400								300	11,400					完了	38區	
21-A	西原寺遺跡部		奈良集落・中世											8,400				完了	道群なし	
21-B	藤原遺跡部		敷布地	46,900						800				2,300				完了	36區	
21-C	大塚久保遺跡部		弥生集落・奈良集落											9,650				完了	38區	
21-D			弥生集落・墓池・古墳集落										300	12,300				完了	18・27・33區	
22-A	池原之上遺跡部	入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400									300	4,800				完了	22區	
22-C	坂原遺跡部		弥生・中世集落・墓池	5,000														完了	28區	
23	庄野遺跡部		弥生集落・古墳	2,600										2,600				完了	32區	
24	才田遺跡部		古墳・奈良・中世集落	5,400										1,050	6,650			完了	32區	
25	東才田遺跡部			4,000										1,300	4,400			完了	道群なし	
26		須川	敷布地	1,600														完了	道群なし	
27	長島遺跡部		縄文・弥生・古墳・奈良集落	16,000											500	16,000		完了	34區	
28	中野見遺跡部		縄文・歴史集落	2,400											200	458			完了	道群なし
29-A	原の集落部	兼野	縄文・弥生集落・墓池	16,800											600			完了	5,240・2,100	
29-B	砂丘古墳部		古墳方墳形古墳	4,000														完了	4,680	
30	藤原遺跡部	兼野・山田	縄文・弥生集落	4,000														完了	6,530	
31	山ノ神遺跡部	山田	縄文	2,000														完了	1,980	
32			敷布地	2,400											300			完了	2,400	
33	長田遺跡部		縄文・弥生・古墳集落	2,000														完了	5,500・2,000	
34	長尾遺跡部		縄文・古墳	3,600														完了	980・15,400	
35-A	上ノ原遺跡部		弥生・古墳集落	2,600														完了	880・3,900	
35-B	高塚山遺跡部		古墳集落	3,000														完了	2,400	
36	神代遺跡部		古墳敷布地	3,000														完了	3,980	
37	大塚遺跡部		奈良・平安・大塚集落・墓池	2,600														完了	5,410・9,900	
38	外之原遺跡部		弥生・中世・縄文石塔	125														完了	5,150・12,600	
39-A	松木沢遺跡部	松木町大字志原	弥生・古墳・中世集落	22,000														完了	320・3,400	
39-B	中野見遺跡部			11,000														完了	11,000	
40	志原集落部		中世・敷布地	3,500														完了	300・7,700	
41	志原集落部			18,000														完了	300・8,400	
42	紅葉遺跡部		中世・宇一古墳	8,000														完了	300・9,700	
43	大倉遺跡部	新市	古墳期	12,000														完了	500・7,960	
44		久喜宮	古墳期	1,800														完了	400・150	
45	菅原遺跡部			2,400														完了	400・3,710	
46	夕月・天國遺跡部	吉賀		1,800														完了	300・3,210	
47	上原遺跡部	兼野	弥生・古墳・中世敷布地	4,000														完了	3,200	
48	原田遺跡部		縄文・弥生・中世集落・墓池	1,800														完了	6,880	
49		特田	敷布地	3,200														道群なし	140	
50				2,400														道群なし	220	
51	植田遺跡部		縄文集落	3,200														道群なし	6,500	
52-A	小塚原遺跡部																	完了	1,000・1,250	
52-B	二十台遺跡部			2,900														完了	1,550	
53	神内遺跡部	龍野	中世	3,600														完了	5,700	
54	上野原遺跡部		弥生・中世	1,800														完了	2,700	
55			敷布地	1,600														完了	100	
56				2,400														完了	800	
57	林田遺跡部	甘木市大字林田	古墳期・縄文・弥生集落	200,000														完了	900・8,300・15,000・18,000・4,000	
58	山田古墳群	新倉町大字山田	古墳群	48,000														完了	14,750・2,500・2,500・8,710	
59	松原遺跡部	松木町大字津水	弥生・古墳集落	40,000														完了	再4,340	
60	新田遺跡部		弥生集落	100,000														完了	6,450	
61	西ノ原遺跡部		弥生集落・古墳集落	100,000														完了	2,600	
62	クサノクサ遺跡部		縄文・古墳集落	100,000														完了	1,270・1,270	
63	新田遺跡部		縄文・古墳集落	100,000														完了	4,480	
64	新田遺跡部		縄文・古墳集落	100,000														完了	4,480・4,000	

計 8,685 22,300 20,470 28,570 48,690 69,790 15,838 8,940 82,710 49,125 700 1,390

表2 柿原遺跡群調査工程表

年度	調査地区	調査期間	調査担当者	調査内容	調査面積	調査概要	備考	
昭和55年度	D・I・L	S55.4.26~7.34 S55.11.15~S56.1.10	藤原 新原	石山 佐々木	地形測量	14,700㎡		
# 56年度	G	S56.10.12~S58.3.29	新原 池田	発掘調査	900㎡	横穴式石室	報告書第4集	
# 57年度	G・H・S	S57.5.10~S58.3.29	堀田 小田	新原	#	8,300㎡	横穴式石室、土槨墓 石槨承屋穴式石室	#
# #	I	S57.6.14~S58.3.31	堀田 小田	新原	地形測量 発掘調査	15,000㎡	横穴式石室、石槨承屋穴式石室 土槨墓、住居跡、瓦土器	報告書第6集
# 58年度	I	S58.4.4~12.28 S58.3.1~3.23	藤原 小池	中間	発掘調査			報告書第37集
# 59年度	F	S59.4.2~7.24	藤原 小池	新原 伊崎	#	5,000㎡	横穴式石室、石槨墓、火葬墓、住居跡 墓塚墓、土槨墓、石蓋土槨墓、土坑	報告書第12集
# #	L	S59.6.4~7.26	藤原 小池	#	1,600㎡	横穴式石室、住居跡		
# #	E	S59.7.3~10.23	藤原 小池	新原 不利	#	4,600㎡	横穴式石室、石槨墓、火葬墓、 住居跡、墓塚墓	報告書第12集
# #	D	S59.9.10~S60.3.30	藤原 小池	新原 日高	地形測量 発掘調査	7,300㎡	横穴式石室、石槨墓	報告書第19集
# 60年度	D	S60.4.1~4.30	小池 日高	発掘調査	1,000㎡	#	#	
# #	L	S60.10.22~11.19	中間 小田	#	3,400㎡	横穴式石室	報告書第41集	

ことになったが、表土剥ぎ取り前の地形測量を実施するような時間的な余裕はなく、尾根線と緩傾斜部分を重機を用いて試掘することになったのである。試掘で遺構が確認された部分については、周辺も精査することにして6月4日から開始した。

尾根線の上部では、それまで踏査で確認出来てなかったが、横穴式石室を主体部にする古墳が2基発見され、2号墳の石室構造はこれまであまり類をみないタイプのもので注目される。

斜面の裾で傾斜の緩やかな部分からは、竪穴住居跡と土坑などが発見されたが、L-4調査区の住居跡では製鉄関連の遺構・遺物を伴っていた。

これらの調査によって、工事側の望んでいる採土予定量を当分の間は賅えることから、L地区のうち新池の脇になるL地区南半分の尾根部分は土取り工程では暫く先でも構わないことになった。文化財側では、併行して実施しているE・F地区の調査と、そのあとに追っているD地区の調査を控えていたため、L地区の調査は7月26日で中断して、昭和59年度には実施しなかった。

L地区北半分の調査には藤原、小池、日高があたり、高田一弘、武田光正、小田和利が調査を補助した。また製鉄遺構に関連して、九州大学文学部横山浩一教授、広島大学文学部潮見浩教授、九州歴史資料館石松好雄調査課長、横田義章学芸二課技術主査の指導・助言を得た。なお、製鉄炉跡については、発泡ウレタンを利用して切り取り保存の措置をとった。

L地区南半分の調査は、中間・小田が担当した。 (小池)

柿原古墳群L地区南群は、新池西側の丘陵斜面部を調査対象とした。調査面積は約3,400㎡で、円墳2基を検出した。発掘調査は昭和60年10月22日より開始し、翌月19日の一月足らずで

終了した。調査概要を日誌から拾ってみよう。

- 10月22日 調査開始。樹木伐採を行う(25日まで)。  
24日 古墳1基(1号墳)検出。  
25日 新池西側斜面部にトレンチを設定し掘り下げるが、古墳にあらず。  
28日 1・2号墳石室掘下げ。  
31日 2号墳石室写真撮影。池側斜面部の遺構検出を行うが、遺構はなし。  
11月1日 1・2号墳石室実測。2号墳閉塞石除去。  
2日 1・2号墳全体写真撮影。  
13日 古墳南斜面の遺構検出作業。遺構はなし。  
14日 L地区南群全景写真撮影。  
15日 1・2号墳墳丘測量。  
19日 調査終了。機材の撤収。(小田)

#### 大谷遺跡の調査経過

大谷遺跡の調査は、昭和62(1987)年9月22日から12月10日までの間に行った。以下に調査日誌を抄録する。

- 9月22日 テント設営。現場に至る農道の補修。  
25日 西南尾根部の遺構検出、発掘・測量。  
10月1日 SX4にて縄文晩期土器出土。  
5日 SX1～4の写真撮影。  
7日 北側尾根部の平板測量。  
12日 1・2号墳発掘開始。  
13日 1号墳石室内に閉塞石のような石の堆積あり。  
15日 2号墳の護道の閉塞石除去。  
20日 1号墳石室実測。  
23日 1号墳前面のトレンチ発掘。  
27日 2号墳土層実測。(周辺部にて掘削り始まる。)  
11月5日 1号墳周辺平板測量。2号墳石室実測。  
10日 1号墳の蓋石除去。  
12日 44地点の試掘。  
14日 発掘ほぼ終了。  
16日 器材を撤収し、図面実測のみ残る。  
12月10日 全て終了。(伊崎)

発掘調査を行った昭和59・60・62年度における関係者は次のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

	59	60	62
局 長	今村 浩三	今村 浩三	杉田 美昭
次 長	添田日出人	菱刈 庄二	吉岡 康行
総務部長	菱刈 庄二	安元 富治	安元 富治
管理課長	森 宏之	森 宏之	副島 紀昭
管理課長代理	佐伯 豊	佐伯 豊	三野 徳博
福岡建設局甘木工事事務所			
所 長	乗松 紀三	乗松 紀三	風間 敬
副 所 長	西田 功	西田 功	
副所長(技術)	中村 義治	中村 義治	友田 義則
庶務課長	徳永 登	徳永 登	大河 尋光
用地課長	岩下 剛	松尾 伸男	松尾 伸男
工務課長	後藤二郎彦	後藤二郎彦	豊里 栄吉
小郡工事区工事長	友田 義則	友田 義則	
甘木工事区工事長	猪狩 宗男	猪狩 宗男	
朝倉工事区工事長	平沢 正	小手川良和	上野 満
杷木工事区工事長	前田 雄一	山中 茂	小沢 公共

福岡県教育委員会

	59	60	62
(総括) 教育長	友野 隆	友野 隆	竹井 宏
教育次長	安部 徹	安部 徹	大鶴 英雄
指導第二部長			大平 岩男
指導第二部参事			窪田 康徳
文化課長	前田 栄一	前田 栄一	窪田 康徳(兼)
文化課課長補佐	中村 一世	平 聖峰	平 聖峰
〃 課長技術補佐		宮小路賀宏	宮小路賀宏
〃 参事補佐			中矢 真人
〃 〃			加藤 俊一
〃 〃		栗原 和彦	栗原 和彦
〃 〃			大塚 健
〃 〃			柳田 康雄

〔庶務〕文化課庶務係長	松尾 清	平 聖峰(兼)	加藤 俊一(兼)
〃 事務主査	長谷川伸弘	長谷川伸弘	竹内 洋征
〔調査〕文化課調査二係長	栗原 和彦(兼)	宮小路賀宏(兼)	
文化課調査班総括			柳田 康雄(兼)
〃 技術主査		井上 裕弘	井上 裕弘
〃 〃			木下 修
〃 主任技師	木下 修	高橋 章	
〃 〃	児玉 真一		
〃 〃	新原 正典		
〃 〃	中間 研志	中間 研志(兼)	中間 研志
〃 〃	佐々木隆彦	佐々木隆彦	佐々木隆彦
〃 〃	小池 史哲(兼)	小池 史哲	
〃 技師	伊崎 俊秋	伊崎 俊秋	伊崎 俊秋(兼)
〃 〃		小田 和利(兼)	小田 和利
〃 文化財専門員	木村幾多郎	木村幾多郎	木村幾多郎(兼)
〃 臨時職員	日高 正幸(兼)	日高 正幸	日高 正幸
〃 調査補助員	高田 一弘	高田 一弘	高田 一弘
〃 〃	武田 光正	武田 光正	武田 光正
〃 〃	佐土原逸男	佐土原逸男	佐土原逸男

## 〔柿原遺跡の発掘調査従事者〕

山下ハツエ・堀内カメノ・牟田 冴子・別府 ヒサ・堀内チマエ・山本サキ子・山口ヒロエ・山辺ヨシノ・谷村 京子・松田カズ子・稲垣ヨシ子・大山コトエ・森 キヨ子・柳瀬トキエ・稲葉ヨシ子・今村タキエ・小島ももえ・原野カホリ・窪山トヨカ・野田美知子・中西ハル子・中村 光恵・高瀬シズエ・柴山ミネ子・堀内ミカノ・市川 秀俊・高瀬 岩男・田中 彰・原野 昌伸・才田 明弘・羽野 繁伸・堀内 孝之・下村 精一

なお調査実施にあたっては、柿原地権者協議会の山下利夫委員長をはじめ地元の方々から種々の協力を得た。深く感謝します。

## 〔大谷遺跡の発掘調査従事者〕

井手 役人・安部 亀喜・鳥居 貞美・仲山 宗利  
中村 光恵・本石セツ子・高瀬セツ子・後藤カミヨ・矢野 静子・牟田サエ子・

石橋 丸子 ・ 谷口 晶子 ・ 石井 律子 ・ 丸山 啓子 ・ 山口由美子 ・ 高倉美智子 ・  
 安高マキ子 ・ 井手美貴枝 ・ 田中伊津子 ・ 因間美枝子 ・ 足立イツエ ・ 阿部恵美子 ・  
 坂元ヨリ子 ・ 岩下 幸子 ・ 鳥居アイ子 ・ 財津キヨカ ・ 日吉キヨノ ・ 梶原トミエ ・  
 伊藤千代香 ・ 熊谷ヨリ子 ・ 武藤ヒデ子 ・ 塚本ヤエ子 ・ 日吉スミ子

#### 報告書作成の経過

大谷遺跡・柿原Ⅰ地区から出土した遺物は、調査終了後に福岡県教育庁文化課甘木事務所に搬入して、順次、水洗・接合などの遺物整理作業を実施したが、諸般の事情で報告書作成年度は平成7年度までずれ込んだ。

両遺跡の報告書作成にかかわる、平成7年度の関係者は次のとおりである。

#### 日本道路公団福岡建設局

局長	倉沢 真也
次長	飛田 孝
総務部長	佐野 博志
管理課長	三根 敬正
管理課長代理	前田 正信

#### 福岡県教育委員会

〔総括〕教育長	光安 常喜
教育次長	松枝 功
指導第二部長	丸林 茂夫
文化課長	松尾 正俊
文化課参事兼文化財保護室長	柳田 康雄
文化課課長補佐	元永 浩士
// 参事補佐	井上 裕弘
//     //	樋口 達也
//     //	川述 昭人
//     //	木下 修
//     //	磯村 幸男
//     //	児玉 真一
//     //	中間 研志
//     //	小池 史哲



## II 遺跡の位置と環境

大谷（おおたに）遺跡は、朝倉郡杷木町大字若市字大谷に所在する。調査面積は12,730㎡であった。

柿原（かきばる）遺跡群L地区は、甘木市大字柿原字若山1282-3・1293-1・2・6・10にわたる部分で、調査面積の統計は約9400㎡にあたる。

両遺跡の位置は、距離的には約12kmを距てているために、それぞれ地理的・歴史的環境をみとめることにしたい。（小池）

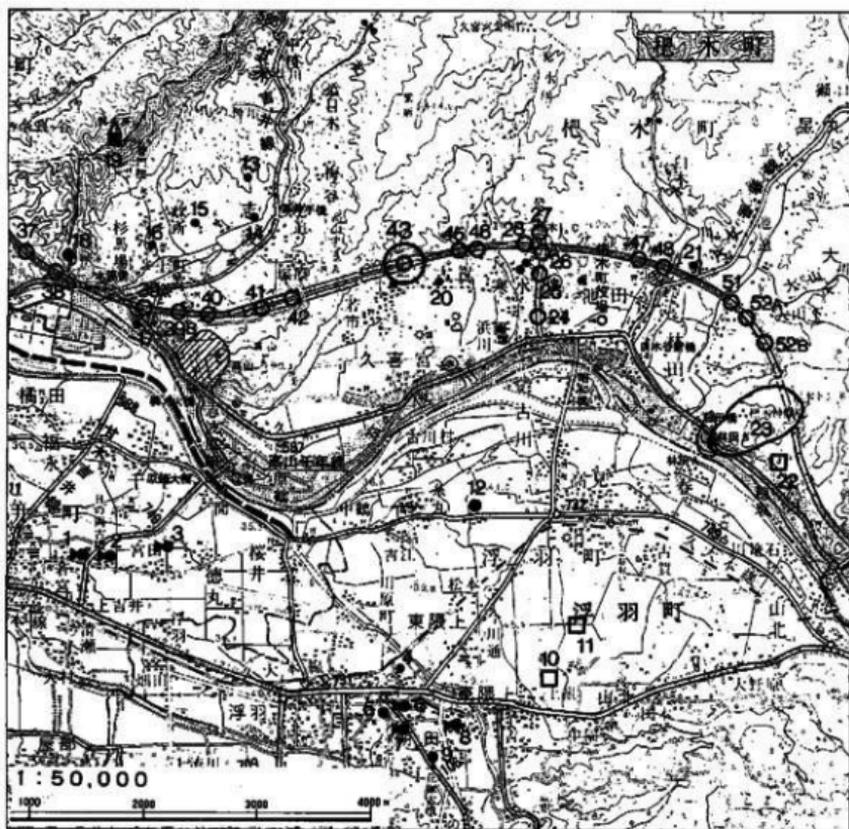
### 大谷遺跡の位置と環境

所在地：朝倉郡杷木町大字若市字大谷

大谷遺跡で検出された主な遺構は、縄文時代晩期の住居跡と思われる竪穴と土坑、そして古墳である。

縄文時代については横断道関係の調査で、とくに朝倉町・杷木町において、極論すれば調査したどの遺跡でも遺物が見られるというほどの状況である。杷木町に限っても、中町裏（第39-B・C地点）<sup>(註1)</sup>、志波桑ノ本（40）、志波岡本（41）、笹隈（45）、天園（46）、夕月（46）、上池田（47）<sup>(註2)</sup>、畑田（48）、楠田（51）、小覚原（52-A）、二十谷（52-B）などで縄文期の遺構・遺物が検出されている。これらは縄文時代の各時期に及ぶが、なかでも晩期が最も多いといってよいだろう。この大谷遺跡でも晩期の例を加えたことになる。

一方、古墳については、甘木市から東に至って朝倉町まではこれまでも多数の古墳が知られていたが、杷木町にはそれほど多くはないというのが一般的な見方であった。1978（昭和53）年の『福岡県遺跡等分布地図（甘木市・朝倉郡編）』によれば、杷木町内では疑問符のつくものを含めて11基が知られているにすぎなかった。その中には志波宝満宮古墳<sup>(註3)</sup>のように古くから著名なものもあるにはあったが、総じて地勢的な背景からくる該期の生産性を鑑みて、古墳は少ないという先入観があったように思われる。ところが、横断道関係の路線内だけでも、中町裏（39-B・C）、志波桑ノ本（40）、笹隈（45）、天園（46）、西ノ迫（杷木インター-C）<sup>(註4)</sup>、そしてこの大谷が知られるに至り、5～7世紀代の古墳の例が増えてきた。しかしまだまだ未知の古墳が眠っている可能性が高いといってよい。大谷遺跡にしても標高100m前後の山上での発見であり、予想外というところがあった。（伊崎）



第 2 図 大谷遺跡周辺の地形と遺跡の分布 (1/50000)

- |           |             |             |             |            |
|-----------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 日岡古墳   | 10. 日本道跡    | 19. 麻鹿良地跡   | 28. クリナラ道跡  | 45. 笹原道跡   |
| 2. 月岡古墳   | 11. 沖出道跡    | 20. 陽天宮古墳   | 27. 大迫道跡    | 46. 天原道跡   |
| 3. 塚堂古墳   | 12. 田島北道跡   | 21. 二本松古墳   | 28. 外之腰道跡   | 47. 夕月道跡   |
| 4. 西鉄上古墳  | 13. 岩河内古墳   | 22. 徳坂天神宮道跡 | 28A. 肥水宮道跡  | 47. 上地田道跡  |
| 5. 藤名古墳   | 14. 赤坂古墳    | 23. 肥水神籬石   | 28B. 中町高道跡  | 48. 柳田道跡   |
| 6. 成定古墳   | 15. 茶臼山古墳   | 24. 飯沼道跡    | 49. 寒波岡ノ木道跡 | 51. 柳田道跡   |
| 7. 法正寺古墳  | 16. 杉馬場古墳   | 25. 前田道跡    | 41. 寒波岡本道跡  | 52A. 小鬼原道跡 |
| 8. 屋次郎丸古墳 | 17. 常盤堂寶富古墳 | 26. 若宮道跡    | 42. 江東道跡    | 52B. 二十谷道跡 |
| 9. 塚花塚古墳  | 18. 本陣古墳    | 27. 西ノ迫道跡   | 43. 大谷道跡    |            |

1. 相模川沿線
2. 大井町沿線
3. 大井町沿線
4. 大井町沿線
5. 大井町沿線
6. 大井町沿線
7. 大井町沿線
8. 大井町沿線
9. 大井町沿線
10. 大井町沿線
11. 大井町沿線
12. 大井町沿線
13. 大井町沿線
14. 大井町沿線
15. 大井町沿線
16. 大井町沿線
17. 大井町沿線
18. 大井町沿線
19. 大井町沿線
20. 大井町沿線
21. 大井町沿線
22. 大井町沿線
23. 大井町沿線
24. 大井町沿線
25. 大井町沿線
26. 大井町沿線
27. 大井町沿線
28. 大井町沿線
29. 大井町沿線
30. 大井町沿線
31. 大井町沿線
- A. 大井町沿線
- B. 大井町沿線
- C. 大井町沿線
- D. 大井町沿線
- E. 大井町沿線
- F. 大井町沿線
- G. 大井町沿線
- H. 大井町沿線
- I. 大井町沿線
- J. 大井町沿線
- K. 大井町沿線
- L. 大井町沿線
- M. 大井町沿線
- N. 大井町沿線



第3図 相模川沿線の地形と道路の分布 (1/50000)

### 柿原遺跡群の位置と環境

柿原遺跡群は、地形的には、朝倉山塊の一角を占める大平山（標高315.1m）・安見ヶ城山の山塊の南側山麓に位置する。この山塊は、三郡変成岩類と総称される古生代末期頃の結晶片岩類の岩盤からなる地質で、緑色片岩・黒色片岩類が顕著だが、比較的軟質な黒色片岩類の風化（ミソ岩）部分も多い。遺跡群の南側には佐田川・苜原川をつくる扇状地が広がっているが、山塊の西側から筑後川に流下する小石原川をつくる扇状地との間には、堤・柿原などの山麓から小田・平塚へ続く丘陵状の地形が延びている。扇状地や丘陵状の部分の先端は崖状をなし、東側から筑後川が流れて形成した河岸段丘とされているが、山麓部や河岸段丘の端部には多くの遺跡が立地する。これらの遺跡については、柿原遺跡群の従前の報告をはじめ甘木・朝倉地域の横断道路線関係の報告、各市町の文化財調査報告書などに詳細に述べられているので、重複を避けたが、古墳時代および古代の遺跡での近年の発見で注目すべき例もある。

甘木市堤では、平成7年に甘木市教育委員会によって、当正寺前方後円墳<sup>(25)</sup>が発掘調査された。全長69mの規模を有し、壘穴式石室あるいは、石棺系石室を主体部にするようで、5世紀前半代に属する古墳であろう。5世紀の古墳は柿原G～I地区<sup>(26)</sup>でもみられたが、山麓部では先端部に位置する池の上・古寺墳墓群<sup>(27)</sup>、菩提寺古寺古墳群<sup>(28)</sup>、鬼の枕前方後円墳<sup>(29)</sup>と続いて占地されている。河岸段丘の先端部には神蔵古墳<sup>(30)</sup>、小田茶臼塚<sup>(31)</sup>がある。小石原川を挟んで史跡仙道古墳があり、佐田川を挟んで尾根頂部に占地する烏集院1号墳・宮地嶽前方後円墳が位置している。さらに6世紀後半の後期古墳群や7世紀代の終末期群集墳が山麓部の斜面に形成されている。

また最近史跡指定された平塚川添遺跡は小石原川の氾濫原に位置するが、自然堤防状になった平塚山の上遺跡や上々浦遺跡などにも弥生後期～古墳時代前期の集落が形成されている。

(小池)

1. 福岡県教育委員会 1991 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-21-』
2. 福岡県教育委員会 1996 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-42-』
3. 福岡県教育委員会 1932 『史蹟名勝天然記念物調査報告 第7集』
4. 福岡県教育委員会 1993 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-25-』
5. 1995年12月31日の西日本新聞朝刊記事による。
6. 福岡県教育委員会 1984 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-4-』
7. 甘木市教育委員会 1979 『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告書 第5集  
甘木市教育委員会 1982 『古寺墳墓群』甘木市文化財調査報告書 第14集
8. 福岡県教育委員会 1992 『菩提寺古寺古墳群』福岡県文化財調査報告書 第96集
9. 甘木市教育委員会 1987 『鬼の枕古墳』甘木市文化財調査報告書 第19集
10. 甘木市教育委員会 1978 『神蔵古墳』甘木市文化財調査報告書 第3集
11. 甘木市教育委員会 1979 『小田茶臼塚古墳』甘木市文化財調査報告書 第4集

### Ⅲ 大谷遺跡の調査

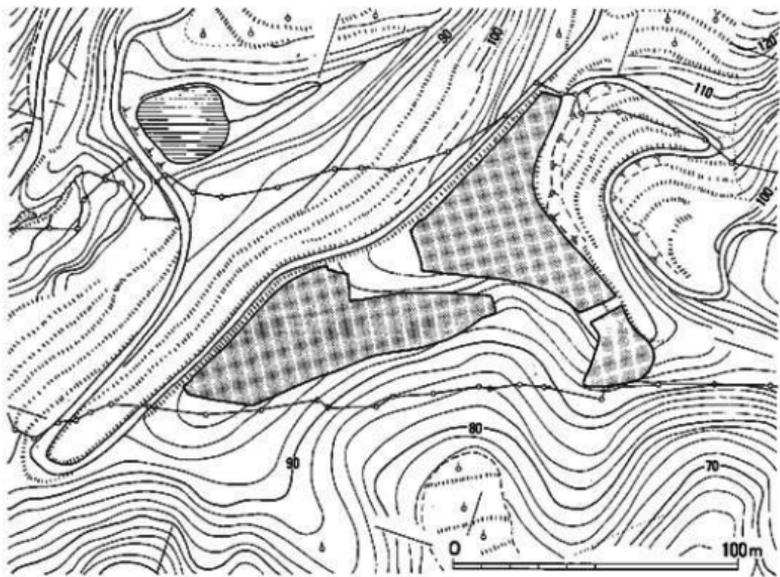
#### 1. はじめに

大谷遺跡の調査は、調査経過の中でも述べたように昭和62年9月から12月まで行ったのであるが、この頃は朝倉インターチェンジまでがこの年2月に部分開通してのち、さらに日田までの開通をめざして発掘調査がとにかく集中したときであった。

45地点・杷木町笹原遺跡の調査を9月19日で終わり、すでに先行して表土剥ぎを済ませていたこの大谷遺跡へと移動してとりかかったのであった。

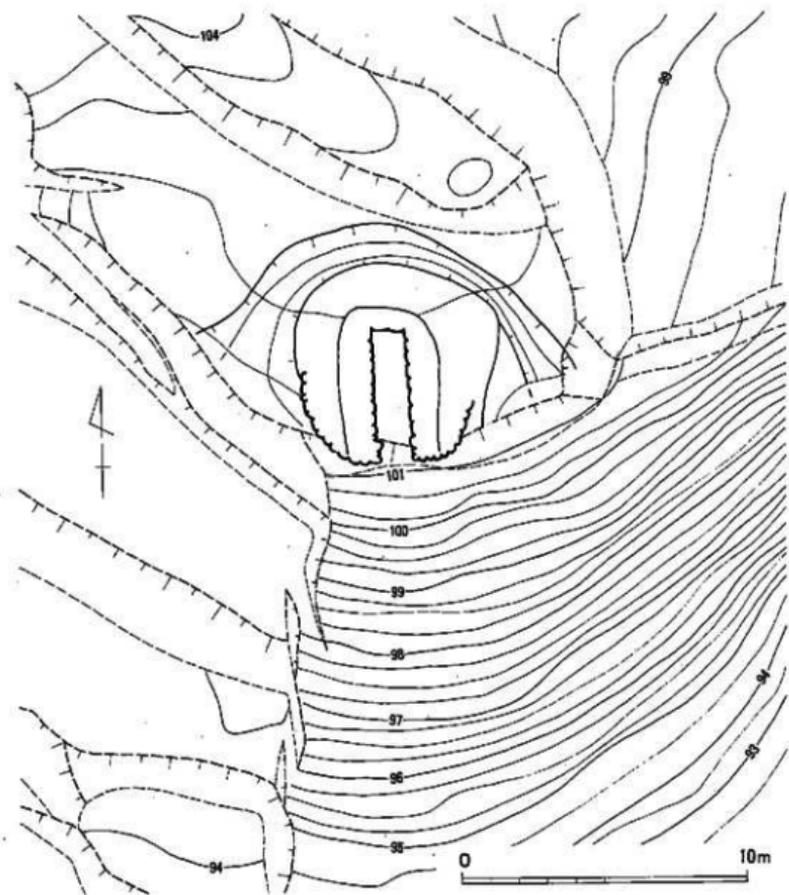
大谷遺跡の調査面積は12730㎡である。

路線内の最高所、標高114m前後の鞍部から、東側へ延びた尾根上およびその南斜面では古墳



第4図 大谷遺跡位置図(1/2000)

が、西側へ延びた尾根上では住居跡と思われる竪穴および土坑が、さらにその東側斜面でも土坑等が検出された。土坑については、埋土および出土遺物から、縄文時代または古墳時代後期前後に属するものを「土坑」とし、いろんな時期の遺物はあるものの新しい時期の可能性の高いものを「SK」として区別した。道かとも思われる溝状のものは「SR」としている。また、遺構番号を付していないものには、この地がもと柿畑であったことによる植栽用の穴や、近年



第 5 図 大谷 1 号墳地形測量図 (1/200)

において子牛の屍骸を埋葬したという土壌もみられた。

検出された遺構・遺物は次のとおりである。

・古墳 … 2基 (1・2号墳)

出土遺物…土師器, 土製品, 鉄器

・堅穴 … 4基 (SX1~4)

・土坑 … 19基 (1~19号土坑)

30基 (SK1~30)

・道状遺構…1基 (SR1)

出土遺物…土師器, 縄文晩期土器, 打製石鏃, 黒曜石・サヌカイト剥片, 台石, 砥石

## 2. 古墳と古墳時代以降の遺構と遺物

### a. 1号墳 (図版2~5, 第5~10図)

調査区の東端にて検出した円墳で, 主軸を南北にとり, 南に開口する横穴式石室を主体部とする。なお, この古墳の墳丘削平後に石室後方付近に土坑が幾つか掘られている (土坑31~34ほか)。

**墳丘** 調査前には, 古墳のある所が盛り上がっているような形跡もなく, 古墳の存在そのものを認知できる状況にはなかった。試掘のとき石室の天井石を確認したことで初めてその存在がわかったというのが実状である。丘陵尾根の先端部に築かれ, 石室の天井石が完存していたことからすると, 盛土はごく僅かしかなされていなかったものと思われる。

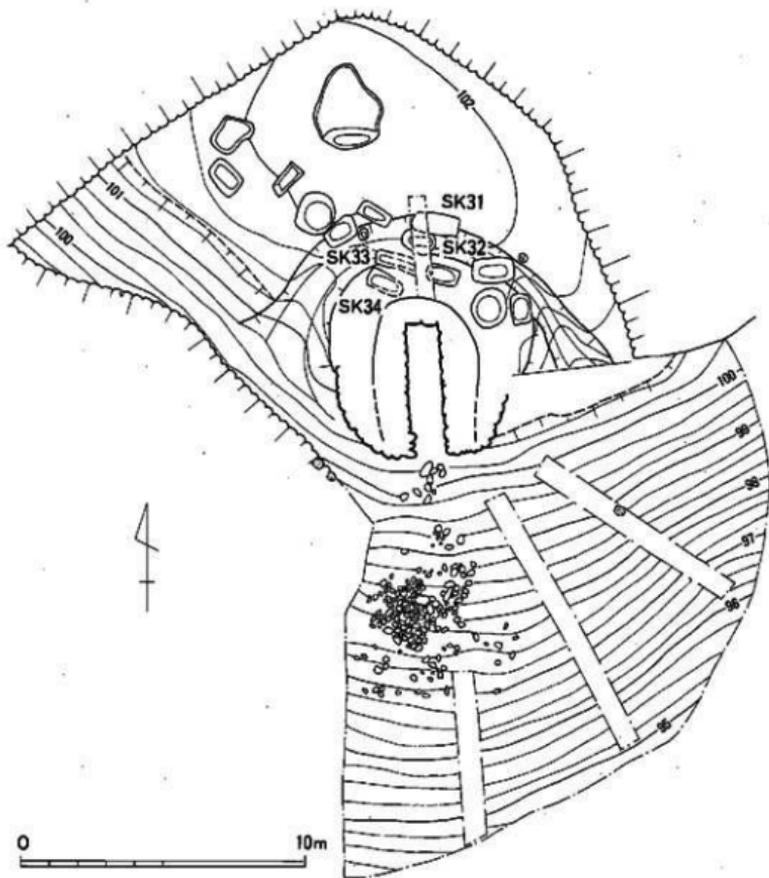
**周溝** 石室の前面 (南側) は急斜面となっていて, 両側面から背後の方しか巡らない。残存する深さもあまり深くなく, 石室背後においては溝底レベルが石室天井石よりも高い所にある。外周の直径は復元で約12mを測り, その中心点はおおよそ玄室主軸長を二等分した点と一致している。内周については直径約7mとなって, 石室前面では内列石の根石ラインと大略重複し, その中心点は玄室奥壁を起点としてその主軸長の1/3のあたりにある。

**内列石** 石室の羨道から連続して弧状に列石が置かれるが全周はしない。石室前面では5段ほどが積まれているものの, 他は1~2段が残るのみである。しかし本来それほど高く積まれていたものではないだろう。この列石最後尾の根石の基底レベルは玄室天井部の高さよりも高い位置にある。

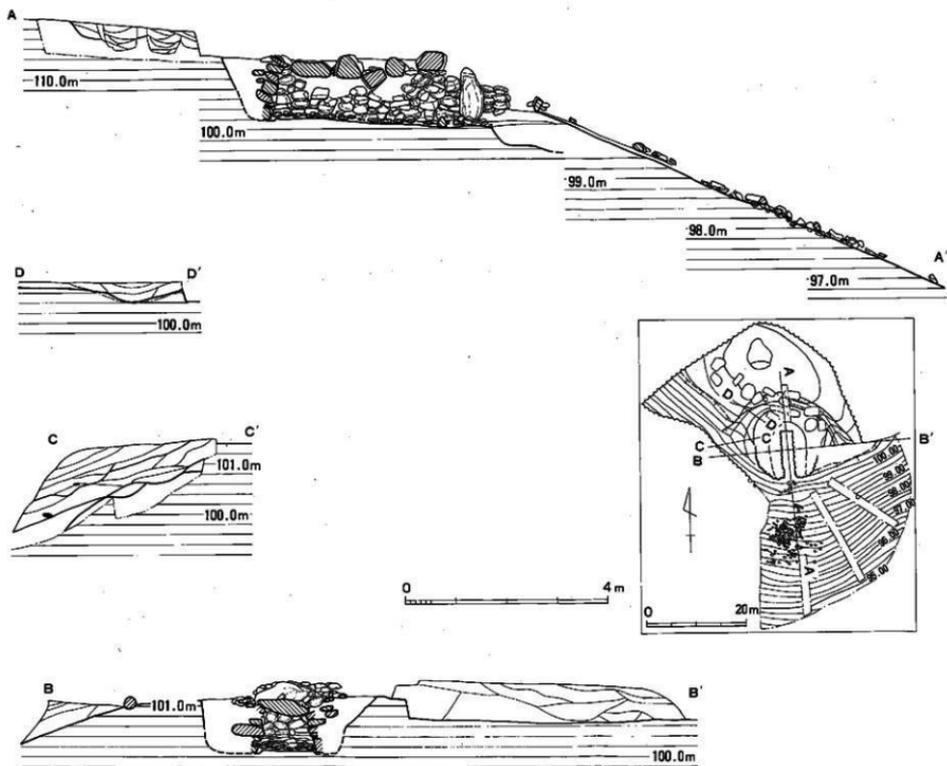
**石室** 南に開口する横穴式石室である。石室掘り形は東西3.4m, 南北5m強の隅円長方形プランをなす。両袖石があまり内側に突出せず側壁の延長上に立てられた如くであり, 平面プラン

としては長いコの字形を呈する。狭道を含めて長さ4.6m。主軸方位はN-5'-W。

玄室は奥壁最下段の2個の石のみ腰石といえるほどの大きさを有するが、両側壁の11個のそれは壁面の石材と大差ない大きさの石を据えている。床面は扁平で丸みをもった河原石を敷き詰めるが、特に中央付近ではそれらの間に小さな丸い石を多く詰め込んでいる。床面中央よりやや奥壁寄りの所を境に敷石のあり方が少し異なっているのは作業工程上の変化があったのだ

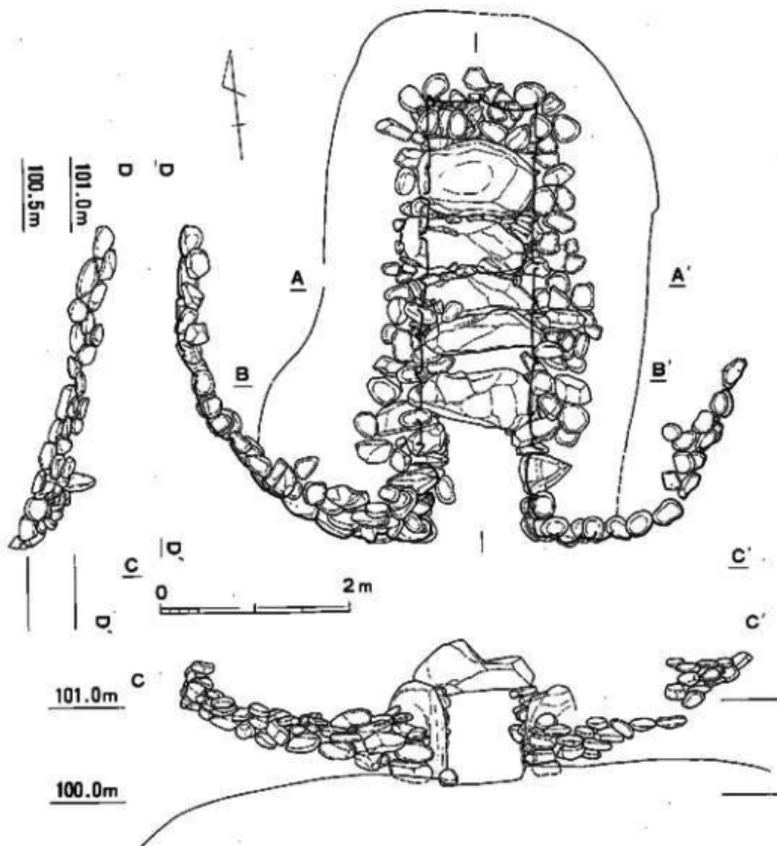


第 8 図 大谷1号墳遺構図 (1/200)

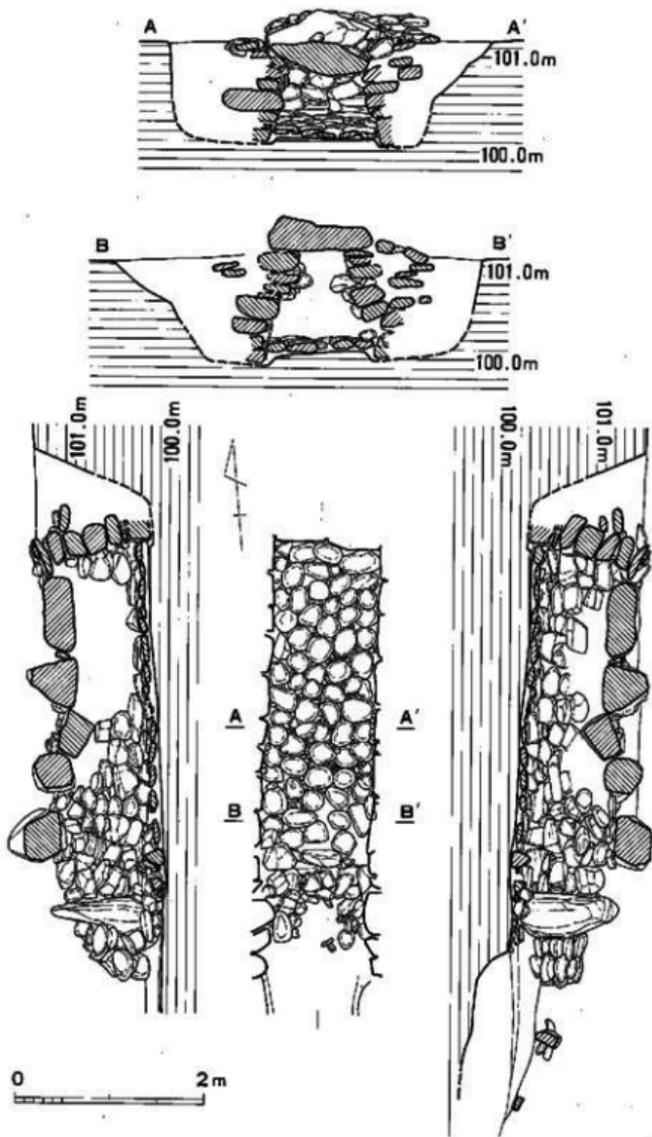


第 7 圖 大谷 1 号墳横丘土層圖 (1/80)

ろう。床面レベルは奥壁に向かって高くなっていく。また、玄門寄りの所には河原石の敷石がなく、かわりに角礫が置かれていた。ここの奥壁寄りの埋土中に多数の石材が見られたこともあって、これらが閉塞石の一部かとも思えたのであったが、袖石よりも内側にあることと、当初から壁材の崩落があったことより否定的に考えざるを得ない。床面に幅は奥壁部1.12m、中央部1.13m、玄門側1.18mとほとんど差がなく、長さは3.76mである。壁面は丸みをもった石材で構築され、6段ほどを順次持ち送って積んでのち天井石が架けられている。天井石は5

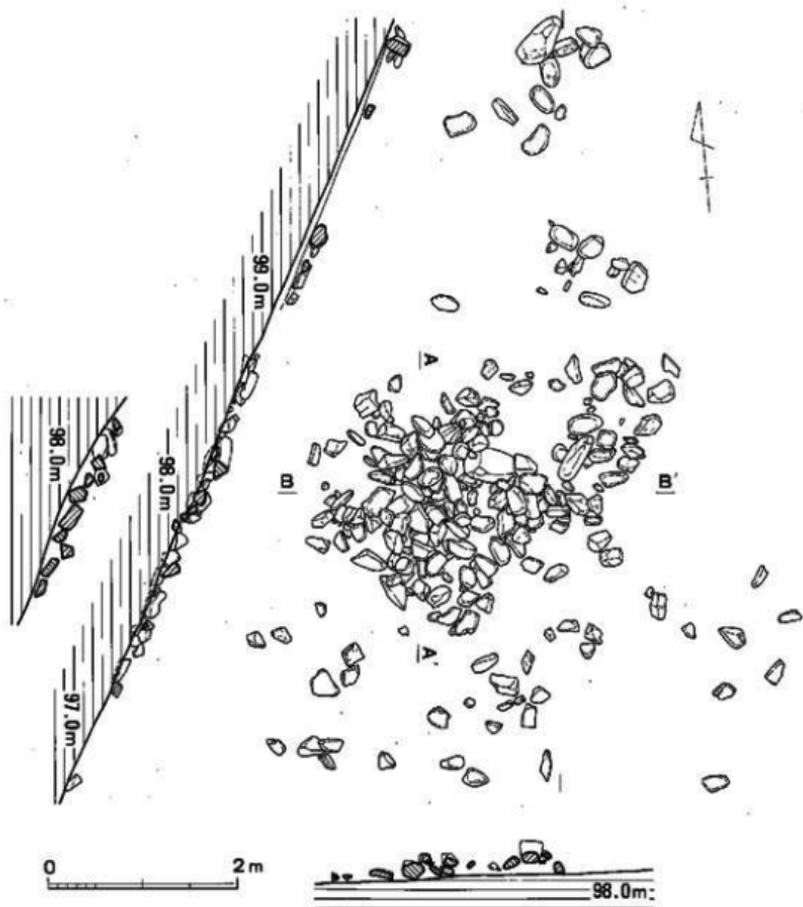


第 8 図 大谷1号墳内蔵列石実測図 (1/60)



第 9 图 大谷1号填石室夹测图 (1/60)

枚の大石が残るが玄門部にもう1枚が架かっていたとしてよい。この天井石を取り外す際に両側壁ともに一部がさらに崩落したが、もとより壁材が丸みを持っているが故に全体のバランスが不安定で天井石の少し陥没した部分もあった。玄室内に遺物は全くなかったが、これからすると、あるいはこの石室は築造はしたものの埋葬以前に壁体の一部が崩落するという事など



第10図 大谷1号墳前面碑群実測図(1/60)

があつて、使用されされることなく放置されたということも可能性として考えられる。中心点の座標は、 $X=40483m$ 、 $Y=-18673m$ 。

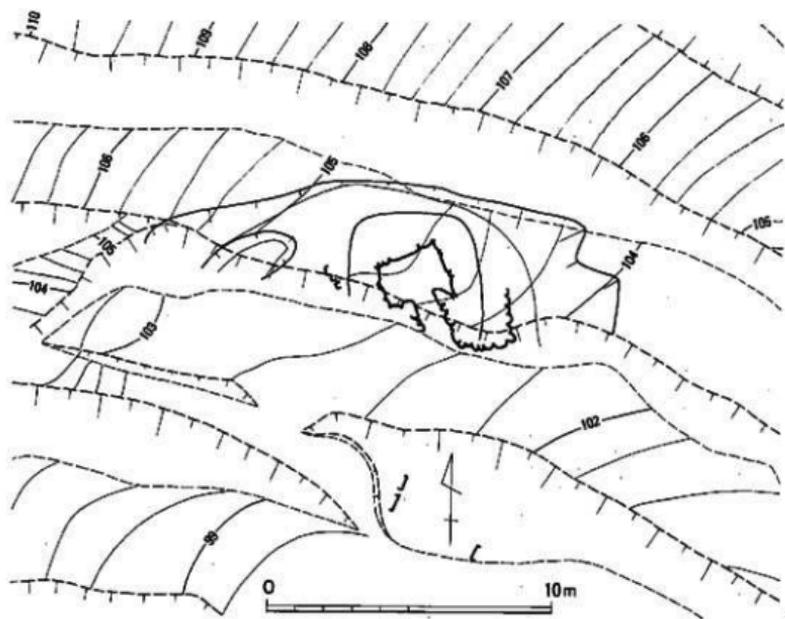
玄門の幅は最小0.92mで、西側のそれがやや突出するのみである。袖石間に仕切石はなかった。

**閉塞石** 調査時には全て除去されていた。羨道の前面（南側）にあった数個の石がこれに使われていたのかもしれない。

**羨道** 長さ約50cmと短く、これに内腰列石が接続する。

**墓道** 羨道前面の1.5mほどまでは平坦な部分があるが、それより南方は約24°の傾斜をもって下っていく。ここにはもとは階段のような施設があったものと考えられよう。

**石室南方集石群** 石室開口部の南斜面に多数の礫が散在していたが、これが当初から置かれたものなのか、あるいは盗掘等の結果としてのものなのか判断しえなかった。



第 11 図 大谷 2 号墳地形測量図 (1/200)

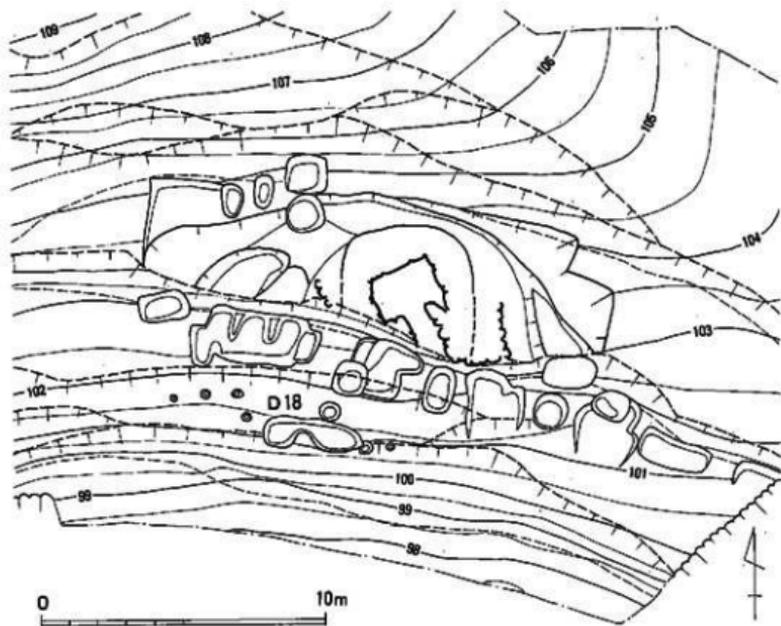
出土遺物（図版11-2，第15図1・2）

珍しいと言っていいほどに遺物が少ない。東側の周溝内から土師器片4，石室掘り形内と周  
辺から土師器片3が出土したのみである。前述のように石室内には全く遺物がなかった。なお，  
周溝内や南方の集石付近などから縄文晩期土器片2，粘土塊，黒曜石コアが採集されている。

1は土師器の甕の口縁部破片で，内面にはミガキが施されている。石室掘り形内出土。2も  
土師器の甕で，かなり外反する口縁部である。東側の周溝内出土。

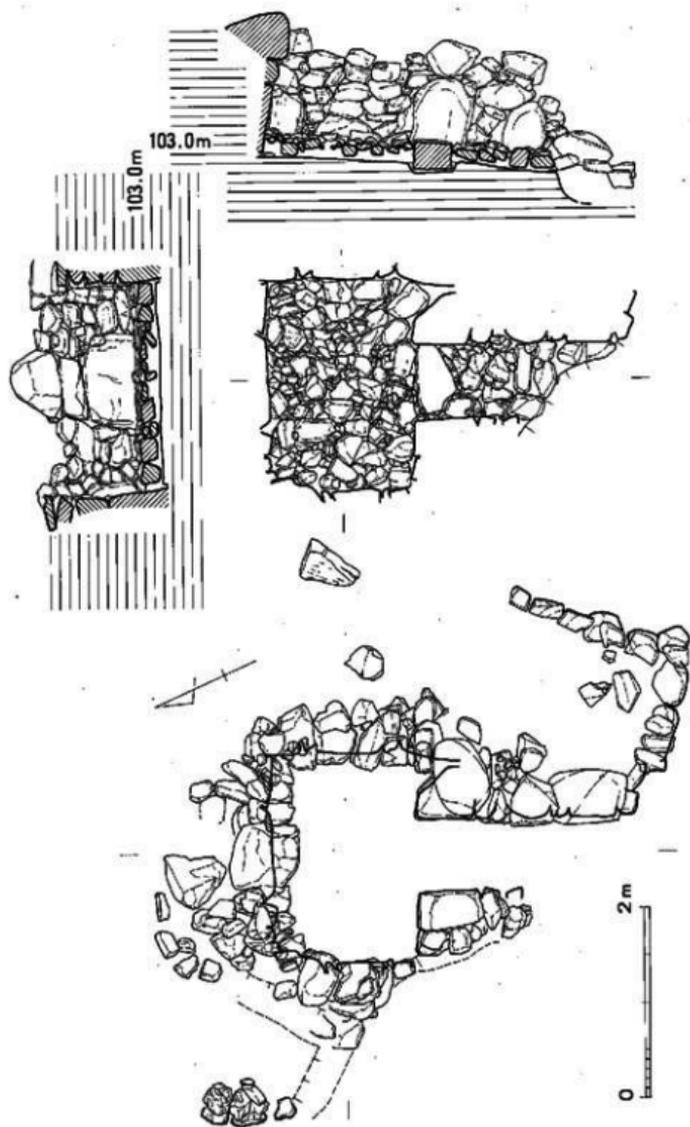
#### b. 2号墳（図版6・7，第11～14図）

1号墳の北西約30mの所にあり，丘陵の尾根上でなく，その南斜面に築かれている。南西に  
開口する横穴式石室を主体部とする。周溝の形状は不整形であるので何とも言えないが，内腰  
列石は方形に屈折するので方形墳とみることもできる。しかしここでは円墳としておく。なお，



第12図 大谷2号墳遺構図（1/200）





第 14 图 大谷 1 号填石室平面图 (1/60)

この古墳も墳丘削平後に石室周辺に土坑が幾つか掘られている。

**墳丘** この古墳も調査前には墳丘の痕跡すら見えず、重機にて表土を剥いでいく段階で検出した。斜面の上方に溝を巡らせて石室上に若干の盛土を有する程度であったろう。

**周溝** 石室の前面（南側）は段落ちとなって何ら痕跡を有さないが、石室の両側面から背後の方に遺存する溝は弧状をなすところが少ない。石室を挟んで東西方向に内周で約8m、外周で約16.5mを測るが、外周についてはやや大きすぎる規模となり、むしろ地形上の都合で不整な部分があると見た方がよかろう。特に石室西方において溝の幅が6mほどもあるのは特異である。この部分での深さは1.5mを測る。1号墳と違って石室背後の溝底レベルが石室天井石よりも高くなることはない。

**内蔵列石** 東側の羨道から東に折れた列石は約2mで北東に屈折して、さらに2mほどまで延びている。反対側の方は段落ちとなって羨道も僅かしか遺存しないが、玄室西方に数個の石があるのはこの列石の一部であろう。

**石室** 南東に開口する横穴式石室である。石室掘り形は東西4.6mで、南北は約5mの長方形プランとみてよい。羨道を含めて長さ3.6m。主軸方位はN-25°-E。

玄室は平面が横長の長方形プランをなし、床面から最高1.4mの高さまでの壁材が遺存するのみで天井部は欠失する。床面にて幅は奥壁部2.1m、中央部2.23m、玄門側2.2mとほとんど差がなく、長さは1.55mである。床面には大きめの角礫を敷き詰め、間隙は小礫で補填している。床面レベルは奥壁に向かって高くなっていく。奥壁は中央最下段に鏡石といえるほどの大きな石を据え、その直上も他より大きな石を積んでいる。両側壁ともに最下段はやや大振りの石で腰石とし、その上は5段ほどが遺存する。奥壁・両側壁ともに床面より1mほどの所から持ち送りがなされていたものと見られる。埋土中に鉄器片と鉄滓があった。中心点における座標は、X=40505m、Y=-186996m。

玄門部分は袖石が羨道からの延長上に立てられていて内側に突出するということはない。玄門幅は0.75~0.80mで、大きな額石が置かれている。

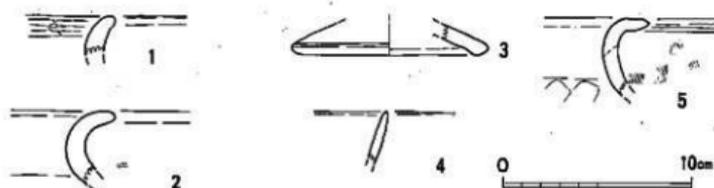
**閉塞石** 調査時には何もなかった。

**羨道** 西側は長さ0.5mしか残らないが、東側の長さ2mと同じであったろう。幅は0.75m。この上面から土製品が出土している。

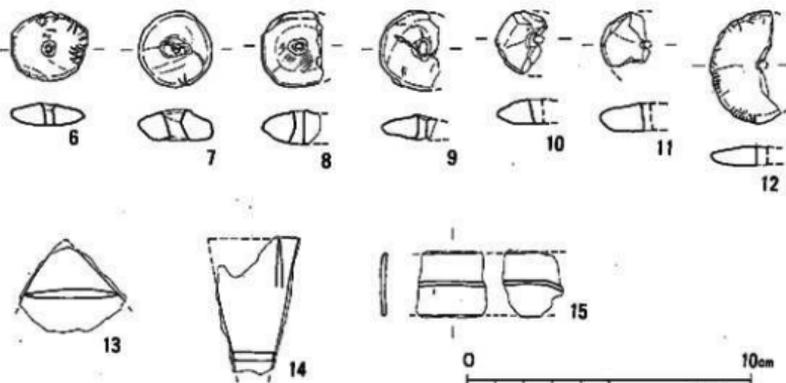
**墓道** 段落ちとなって詳細不明である。

#### 出土遺物（図版11-2、第15図3~5・16図6~12・13~15）

この古墳も遺物が少ない。上述した以外に、周溝内の東側より土師器片2、西側より土師器片1、石室背後の所より鉄器片が、墳丘東側より土師器片2、鉄器片が出土した。なお、周溝内や玄室埋土中などから縄文晩期土器片が採集されている。



第15図 大谷1・2号墳出土土器実測図(1/3)



第16図 大谷2号墳出土遺物実測図(1/2)

3～5とも土師器である。3は蓋にしては小さすぎる感があり、高坏の脚部かもしれない。内外とも横ナデを施す。復元径10.4cm。4は坏であろうか。精製品である。5は甕の口頸部片で硬質の焼成である。口縁上端が少し窪んでいる。3・5は西側の周溝内、4は墳丘東側からの出土。

6～12は羨道上面出土の孔のある土製品で、12のみが大きい。玉とするにはつくりが粗くてやや大きく、紡錘車とするには孔が小さすぎる。6～9の径は24.1～27.8mm、孔径は2.8～4.2mm、厚さ7.6～10.0mm。重さは6が3.9g、7が5.7g。10・11もほぼ同形としてよい。12は径が39.2mm、孔径3.2mm、厚さ6.4mm。一部に指紋あるいは掌紋が残ることから手のひらの上でこねて成形されたものだろう。

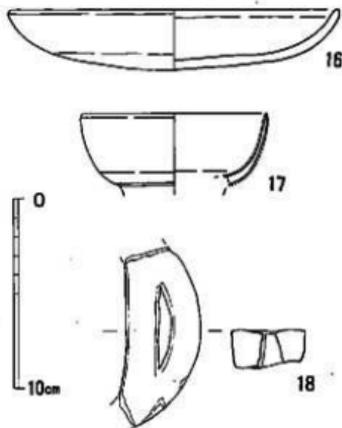
13～15は鉄器でいずれも錆が著しい。13・14は鐵とみられる。15は薄い鉄板で刀装具の一部であろうか。13は玄室埋土中、14は石室背後の周溝内、15は墳丘の東側から出土した。

### c. その他

古墳時代の後期以降に属する土坑は、2号と12号であり、いずれも西側尾根の頂部にある。2号は1×2mほどの長方形プランであるが、12号は不整形をなす。

谷筋から西側尾根に登ってくる道かと思われるSR1は長さ12mほどが弧状に掘られている。土師器坏と粘土塊・木炭が出土した。

「SK」として番号を付した30基は大半が西側尾根上であり、一部はその東斜面、あるいは中央谷頭あたりにあるが、それらは方形、長方形、楕円形プランのほかの不整形のものがある。それらからは縄文晩期土器、粘土塊、黒曜石・サヌカイト、陶器、磁器（青磁・染付）、ガラス、鉄製品の破片・剣片等が出土している。縄文土器、黒曜石などの図示しうるものについては次項で説明する。また、1号墳の周辺にも新しい土坑が幾つかあった。



第18図 大谷SK2・4・9出土土器実測図(1/3)

出土遺物（図版11-2、第18図-16~18、25図-69）

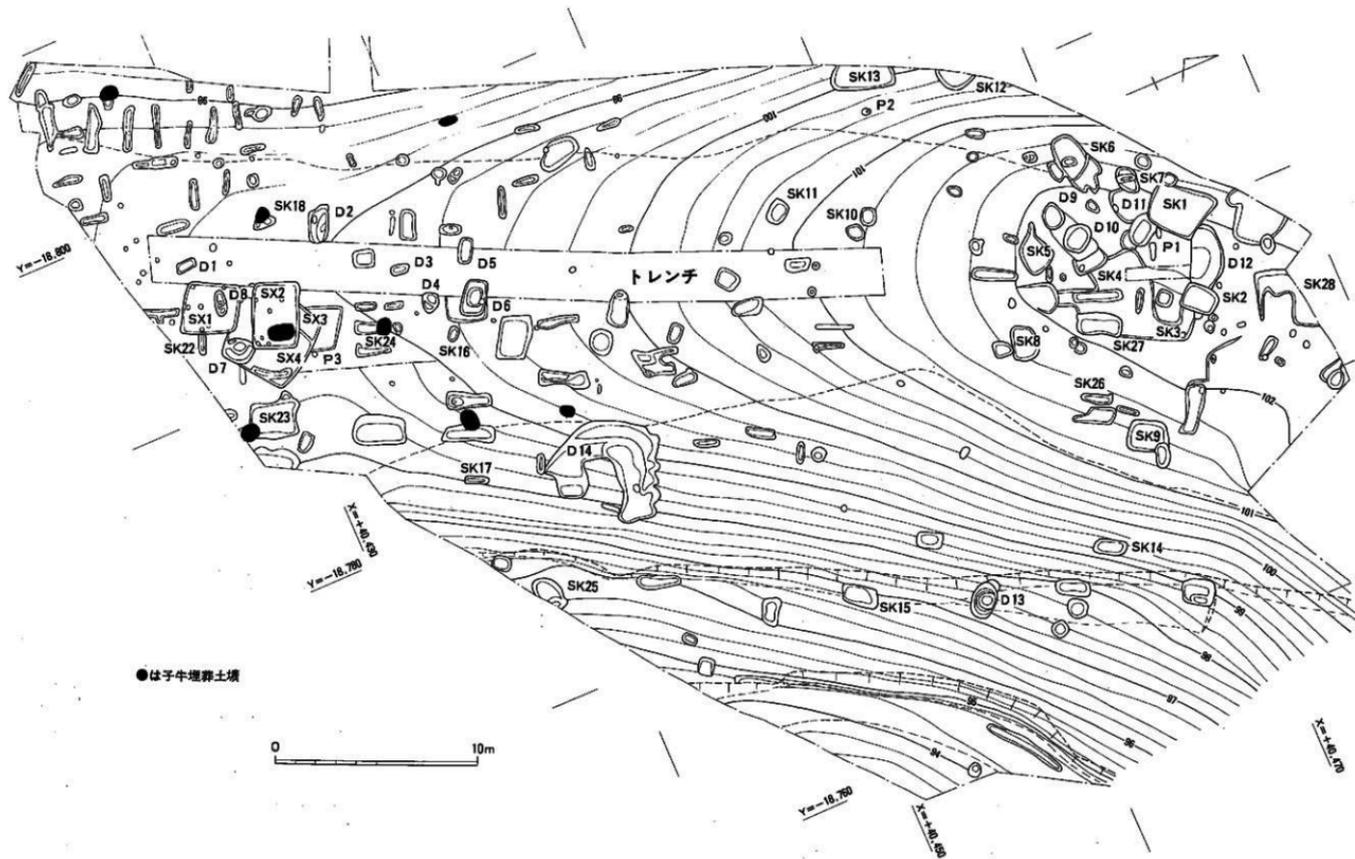
16は2号土坑出土の土師器で、坏とするが皿の形状に近い。かなり磨滅している。口径17.4cm、器高3.2cm。17はSK9出土の染付碗で、灰被り状の軸轆である。復元口径3.9cm。18は1号墳周辺のSK34出土の七輪の底の部分である。

69は2号墳の西南部から採集された寛永通宝である。径24.2mm、重さ1.8g。1736年以降に鑄造されたという「マ頭通」である。

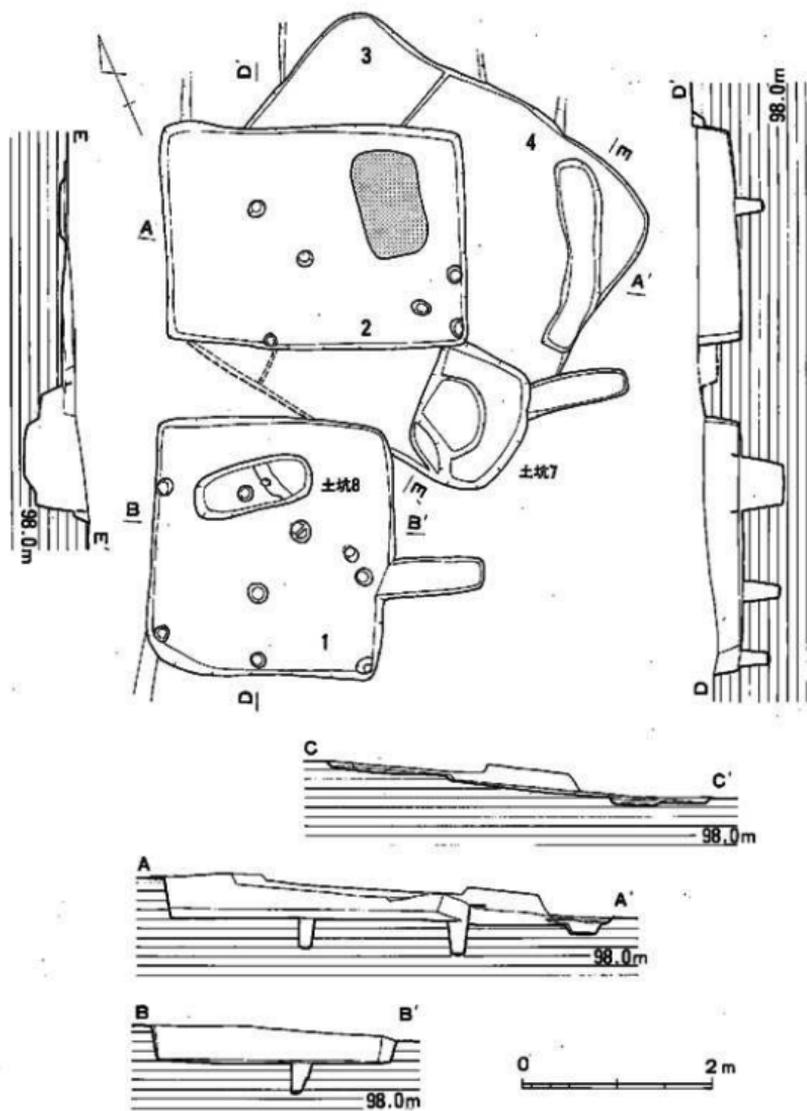
## 3. 縄文時代の遺構と遺物

### a. 竪穴

調査区の西側尾根部の南端に住居跡と思われる竪穴4基があった。調査中に竪穴住居跡と称せずSXの略号を冠したことの理由が今にして記憶不鮮明であるが、ここでは竪穴住居跡の可能性が高いことを提示しておきたい。4基は重複しており、いずれも晩期の所産であるが、



第 17 図 大谷遺跡西南部遺構配置図 (1/200)



第 19 图 大谷SX1~4実測図 (1/60)

(古) 4→3→2 (新), (古) 4→1 (新) の関係となる。

#### SX 1 (図版 8, 第19図)

南北2.7m, 東西2.5mのほぼ方形のプランをなし, 面積は6㎡。東辺の一部を新しい土坑に切られている。また床面北半に8号土坑があるが, これとの先後関係はわからなかった。床面にある8個の柱穴については主柱穴は特定できない。図示しえない晩期土器片と黒曜石剥片2が出土した。

#### SX 2 (図版 8, 第19図)

SX 1の北にあり, SX 3・4の上ののっている。南北2.3m, 東西3.2mの長方形プランをなし, 面積は6.64㎡。床面に6個の柱穴があるが主柱穴は特定できない。また床面東半に子牛の屍骸を埋葬したという70×110cmほどの土坑が掘り込まれていた。晩期土器片と黒曜石・サヌカイト剥片が出土している。

#### 出土遺物 (図版12, 第22図-19, 25図-65)

19は精製の浅鉢である。外面はミガキを施す。65は黒曜石の使用剥片で, 長さ35mm, 幅40.7mm, 厚さ8.2mm, 重さ10.6g。

#### SX 3・4 (図版 8, 第19図)

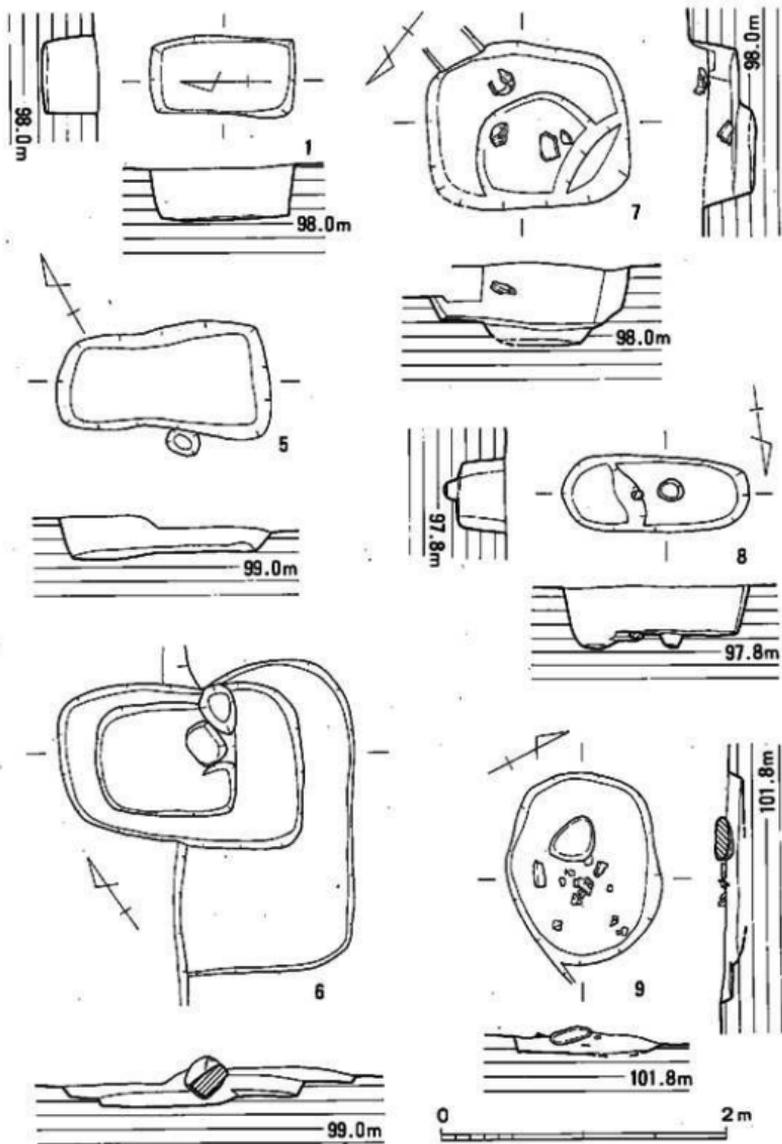
SX 2の下位にあり, 長方形プランのSX 4が, その西にあるSX 3を切っているものとして2基に分けたが, あるいは1基であったのかもしれない。西南辺の北半部は確認できなかった。SX 4は2.75×3.75mの規模で, 面積9.97㎡。3と4を1基とすると一辺4mの方形プランとなり, 面積は14.85㎡。双方は約5cmの段差がある。床面は南に向かって少し傾斜している。出土遺物はなかった。SX 4の南隅に7号土坑があるが, これは付随するものかも知れない。

### b. 土坑

19号まで番号を付したが, 9基を図示する。出土遺物のないものもあるが全て晩期の所産である。その性格については不明である。

#### 1号土坑 (図版 8-3, 第20図)

SX 1の西にある。幅50cmに長さ100cmの長方形プランで, 深さ40cm。主軸方位はほぼ南北をさす。出土遺物はない。



第 20 图 大谷遺跡土坑突測区1 (1/40)

### 3・4号土坑 (第17図)

SX 3・4の北方にある。3号は略南北の主軸をもった長方形土坑で、出土遺物はない。4号はその東にあり、楕円形気味のプランである。土器片1があったが図示できない。

### 5号土坑 (図版9-1, 第20図)

3号土坑の北にある。略東西に主軸をおく長方形プランで幅55~80cm, 長さ150cm。灰黄褐色砂質土を埋土としていた。小粘土塊と黒曜石剥片が出土した。

### 6号土坑 (図版9-2, 第20図)

5号土坑の東にある。長さ220cmの南北に長い浅い土坑の北半に営まれた、略東西に主軸をおく隅円長方形プランの二段掘りの土坑である。下段の東端に礫石が1個ある。灰黄褐色砂質土を埋土としていた。土器片1と黒曜石剥片が出土した。

### 7号土坑 (図版9-3, 第20図)

SX 4の南隅にある。幅115cm, 長さ140cmの隅円長方形プランの二段掘りの土坑である。上段の上面から土器片が、下段の上面から礫石が出土した。黒曜石剥片もあった。

出土遺物 (図版12, 第22図-20)

20は浅鉢の胴部片で、粗製ではないが精製とは言いがたい土器である。復元胴径17.2cm。

### 8号土坑 (図版10-1, 第20図)

SX 1の床面にある。主軸を略東西に置き、幅53cm, 長さ131cmの隅円長方形プランで、床面東端部は一段深くなる。また床面ほぼ中央に小ビットがある。

出土遺物 (図版11, 第26図-70)

70は玄武岩質のすり石で、両側面は面をとっている。長さ9.6cm, 幅7.6cm, 厚さ4.3cm。

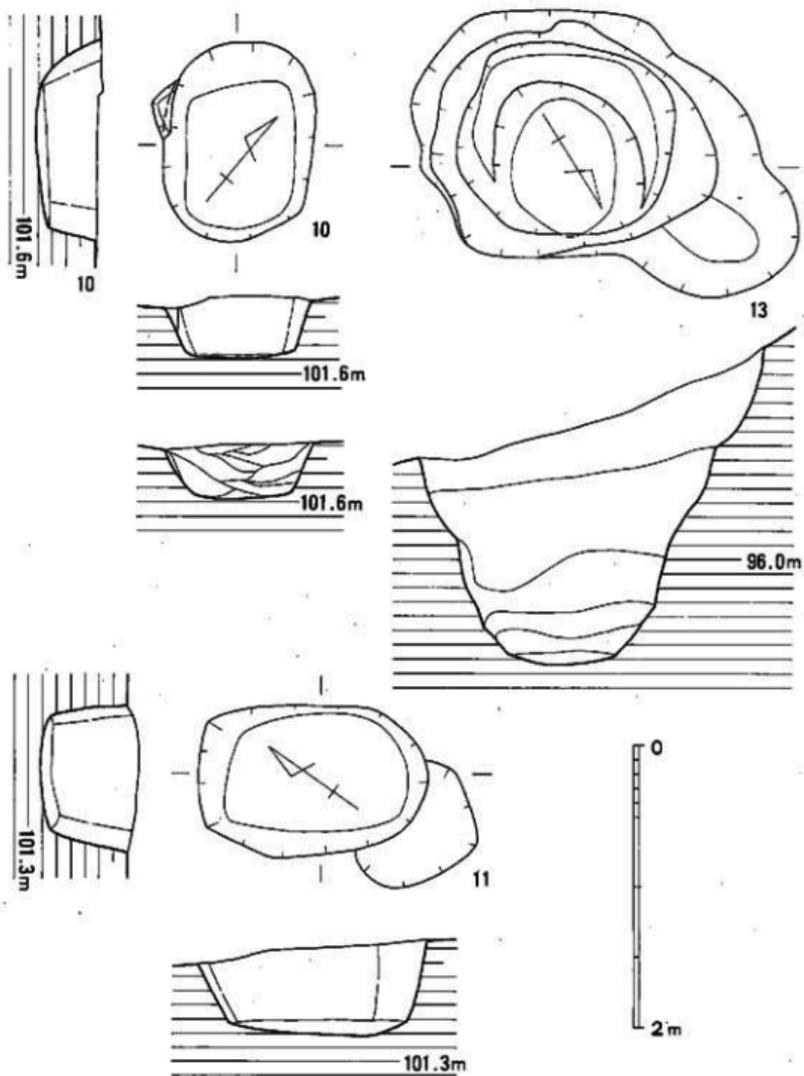
### 9号土坑 (図版10-2, 第20図)

西側尾根の北端平坦部にある。幅110cm, 長さ140cmの楕円形プランで、黄褐色から黒灰色の砂質土を埋土としていた。床面より浮いた状態で土器片と磁石等が出土している。サヌカイトの剥片もあった。

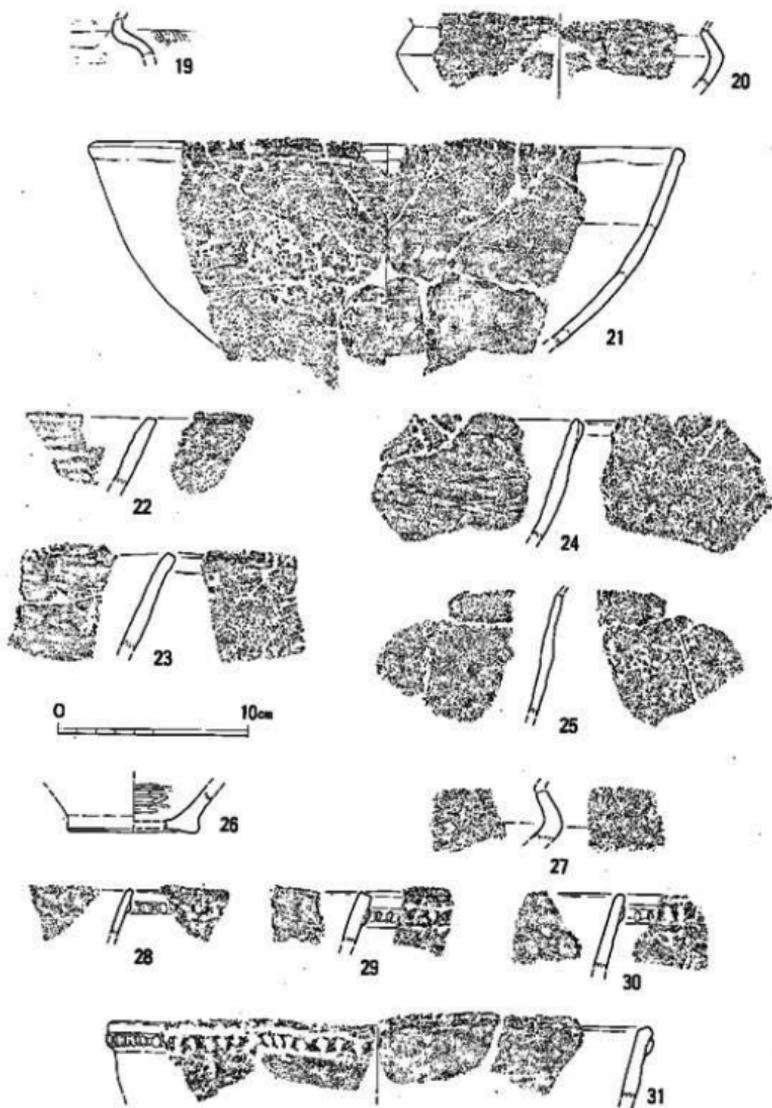
出土遺物 (図版11-2・12, 第22図-21~25, 26図-74・75)

21~25とも同一個体の破片かとも思われるが確証がない。22と23は同一個体である。いずれも鉢形をなす。21は口唇部にイネ科の茎による押圧が見られる。また外面にはコゲが付着する。

74は片岩の磁石もしくは石皿である。磁石とすれば粗磁になる。くぼんだ面はとともよく擦



第 21 圖 大谷遺跡土坑実測図 2 (1/40)



第 22 图 大谷遺跡土坑等出土土器実測図 1 (1/3)

れていて、側縁には4ヵ所のすり切り痕がある。3片に割れていたが、割れたのちに黒斑が付着している。75は長さ36cm、厚さ10cmの作業台石であり、表裏ともによく擦れている。

#### 10号土坑 (図版10-3, 第21図)

9号土坑の東にある。幅105cm、長さ140cmの隅円長方形プランで、黄褐色砂質土を埋土としていた。

出土遺物 (図版12, 第25図-66)

66は黒曜石の使用剥片である。

#### 11号土坑 (図版11-1, 第21図)

10号土坑の北にある。幅105cm、長さ162cmの隅円長方形プランで、淡黒褐色砂質土を埋土としていた。土器片のほかに黒曜石剥片2が出土している。

出土遺物 (図版12, 第22図26-31)

26は壺の底部になろう。復元径6.8cm。27は浅鉢片。粗製である。28-31は刻目突帯文の壺である。28は薄手のつくりで刻みは爪によるものらしい。29-31は厚みに差があるものの同一個体らしい。刻みはやや粗く、木の小口によって施されている。31の復元口径28.7cm。

#### 13号土坑 (第21図)

9-11号土坑より東南方向の斜面にある。平面形は175×215cmほどの楕円形プランであり、側面には幾つかの屈折点がある。深さは最大225cmを測り、落し穴状となる。土器片のほかに黒曜石21・サヌカイト10の剥片と台石が出土している。

出土遺物 (図版12, 第23図-36-42, 25図-67, 26図-76)

36-39は浅鉢片。36は内外ともミガキを施す。40は鉢で外面に煤が付着する。口縁直下に焼成後の穿孔がある。接合面は上半部がくの字状にくぼむ。復元口径12cm。41・42は刻目突帯文の壺で同一個体である。刻みは木の小口によって施されているらしい。

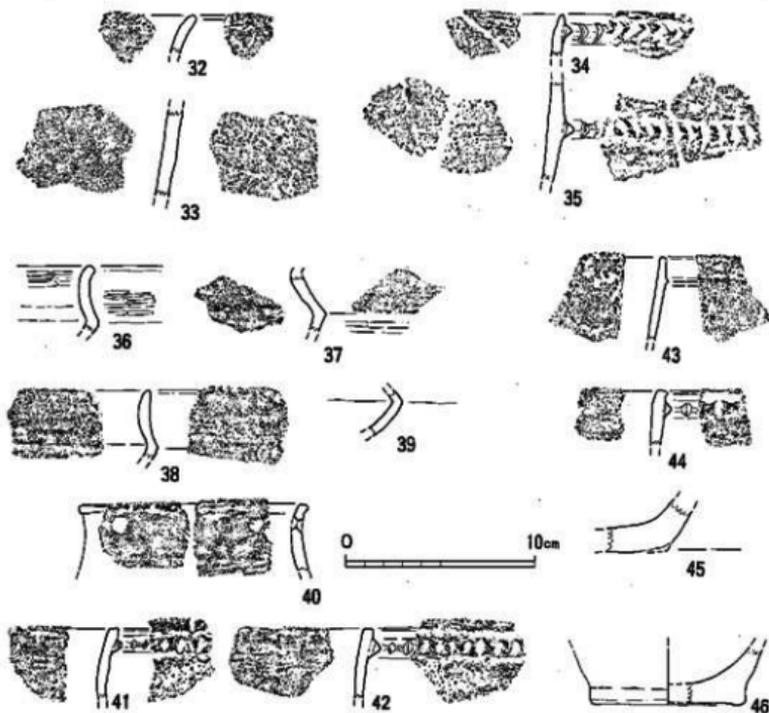
67は黒曜石の使用剥片である。長さ38.5mm。76は石英斑岩と思われる石材の作業台石である。表裏とも擦れている。長さ28.5cm。

#### 14号土坑 (第17図)

5・6号土坑の東方斜面にあり、U字形をなす不整形の土坑である。土器片のほかに黒曜石1・サヌカイトの剥片2が出土している。

出土遺物 (図版12, 第23図-43-45)

43は刻みのない突帯を有する深鉢片。44は刻目突帯文の壺。45は分厚い底部片。



第 23 図 大谷遺跡土坑等出土土器実測図 2 (1/3)

15号土坑 (第17図)

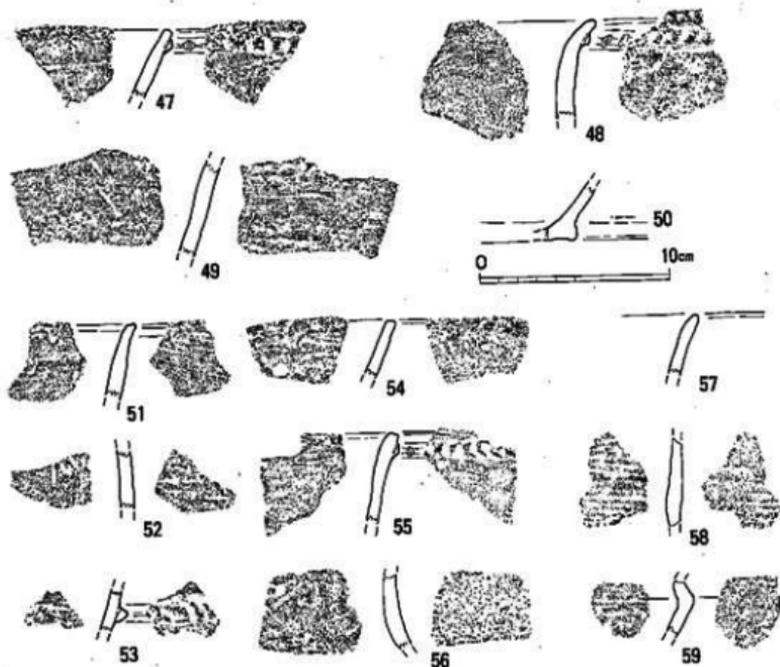
13号土坑の北東斜面にある溝状のものである。土器片 1 (図示不可) のほかに鉄 1, 炭化した種子が出土している。

出土遺物 (図版12, 第25図-60)

60はサヌカイト製の鉄で、造りは縄である。長さ21.3mm, 幅15.3mm, 厚さ3.6mm, 重さ0.9g。

16号土坑 (第17図)

調査区の最高所から少し降りた所にある不整形土坑である。土器片 1 があったが図示できない。



第 24 図 大谷遺跡土坑等出土土器実測図 3 (1/3)

17号土坑 (第17図)

16号土坑の東にある小土坑で、粘土塊 1 が出土した。

18号土坑 (第17図)

2号墳主体部の西南にある不整形土坑である。土器片 1 が出土した。

出土遺物 (図版12, 第23図-46)

甕の底部片で復元径 8 cm。

19号土坑 (第17図)

SR1の西にある長方形土坑である。黒曜石コアが出土した。

c. その他出土遺物 (図版11-2・12, 第23~26図)

32~35は12号土坑出土の土器である。32は鉢だろう。34・35は接合しないが同一個体だろう。刻みはイネ科植物の茎のような原体で施されている。

47~50は11号土坑を切ってその北にあるSK1出土土器である。壺の破片で48の刻みはイネ科植物の茎によるものらしい。

51・52は11号土坑の西にあるSK6出土の深鉢である。

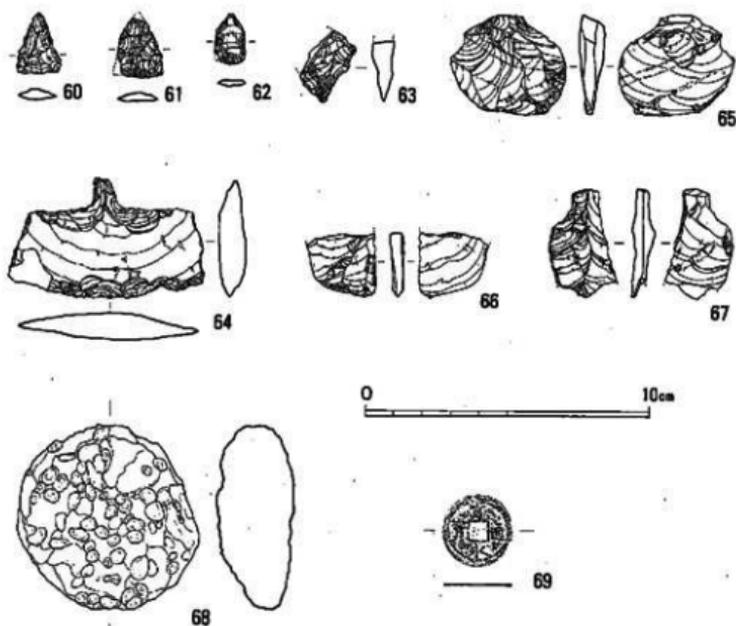
53はSK9出土の刻目突帯文土器である。

54~56は11号土坑の北東にあるSK25出土土器である。

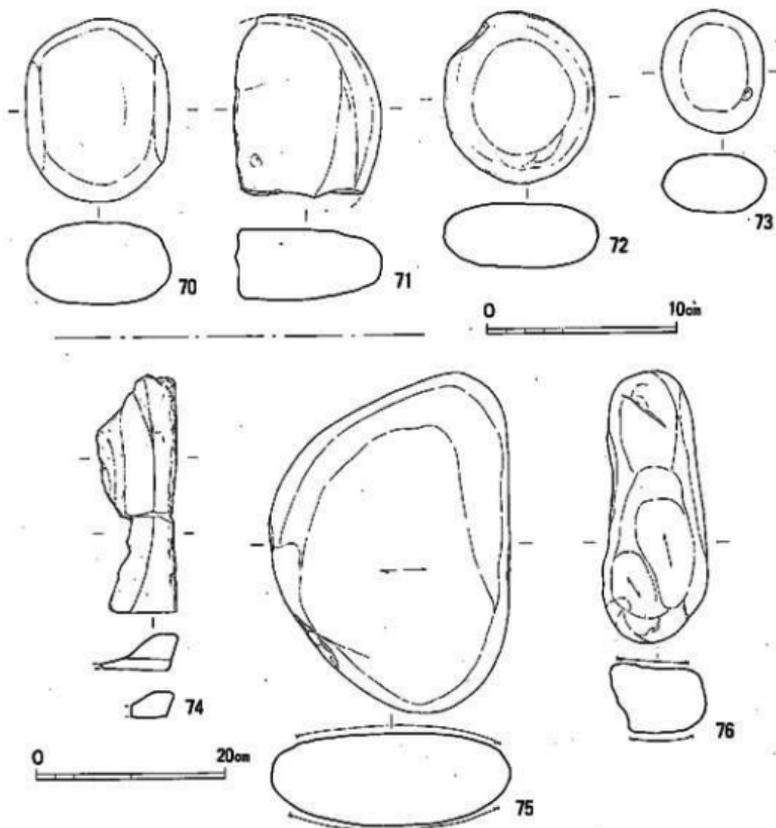
57は11号土坑の東隣にあるP1出土の鉢である。

58は1号墳の東側周溝から出土した深鉢片で、内面は貝殻腹縁による条痕が残る。

59は2号墳の西側周溝から出土した浅鉢片で、精製土器ではない。



第 25 図 大谷遺跡出土石器等実測図1 (1/2)



第 26 図 大谷遺跡出土石器等実測図 2 (1/3)

61はSK25出土の黒曜石製剥片鉄で、長さ20.3mm、幅15.4mm、厚さ3.1mm、重さ0.9g。

62は6号土坑の周辺で採集された黒曜石製剥片鉄で、長さ17.8mm、幅10.9mm、厚さ2.3mm、重さ0.4g。表面ともにくすんだ原面を残す。

63は西側尾根上での採集品で、ドリルであろうか。黒曜石製。長さ25.4mm、幅18.0mm、厚さ7.0mm、重さ2.5g。

64は1号墳周辺のSK34から出土した横型石匙で、サヌカイト製。長さ41.9mm、幅68.7mm、厚さ9.8mm、重さ23.8g。

71は1号墳周辺のSK31・32（いずれであったか不明）から出土したすり石である。

72は西側尾根上での採集品で、玄武岩質の叩石である。周縁には敲打した痕跡がある。長さ9cm、幅8.2cm、厚さ3.3cm。

73は6号土坑周辺の採集品で、玄武岩質のすり石である。長さ6.4cm、幅5.5cm、厚さ3.1cm。

68は1号墳南側の集石の周辺から出土した土製品である。粘土をこねて饅頭のような形に成形し、器表には押型文のような粒が多数見える。しかし押型文期のものか否かわからない。直径65mm、厚さ27mm。

#### 4. おわりに

##### a. 縄文時代

縄文時代については、晩期の竪穴住居跡と思われる竪穴4基、それに土坑19基があった。これらは主に西側尾根の頂部に営まれている。竪穴は仮に住居跡でなかったにしても、土坑も含めて縄文晩期人の生活に関連した遺構であることは間違いない。ここは標高98.5～102mであり、山裾とは60mほどの比高差がある。このような環境は山の幸には十分に恵まれたものであったといえよう。

ところで、これらの遺構から出土した土器は量は多くないが、従前の編年でいえば山の寺式あるいは曲り田(古)式に該当するものであろう。曲り田(古)式の段階で玄界灘沿岸ではすでに稲作農耕が始まっており<sup>(11)</sup>、ここから弥生早期とする見解がある。それを認めることにやぶさかでないが、しかしながらこの段階でも地域差があるのは確かであって、この大谷遺跡においては、立地に示されるように稲作農耕を営んでいる人々の生活跡とは考えられないのである。そうはいっても眼下の筑後川に臨む平野部のいづこかでは、すでに稲作を行っていた可能性もある。同じ杷木町内の畑田遺跡<sup>(12)</sup>では曲り田(古)段階併行と考えられる支石墓が検出されており、玄界灘沿岸に受容された稲作文化複合はかなり早い段階で各地へと伝わっていったと思われる。そうするならば、あるいは地域差というのではなく、ここを山の民の生活跡と捉えることもできるのではないか。ともあれ、ここではいまだ「縄文時代」の項のなかで説明したところである。

##### b. 古墳時代

古墳は、1号墳が直径7mほどの、周溝を入れても直径12～13mほどの小円墳であった。2号墳は方形墳ともとれるが、ここでは直径8m前後の円墳と捉えた。

この古墳2基については、その僅かな出土遺物のみでは時期決定がきわめて困難である。石

室形態からは6世紀中葉を遡ることはなく、それよりは新しい。土器は土師器の破片数点のみであり、これらは器形としてほぼ7世紀代の特徴を有するものと捉えるが、いまだ詳しい時期はわからない。

1号墳は壁面を河原石で構築した寸胴形の特徴的な石室であり、一見すると終末期古墳の石室であるとみられたのであった。類似した石室を北部九州の中では霧隠にして知らないので比較のしようがないが、基準があいまいながらも、ここでは7世紀後半代に築造されたものと考えておきたい。

2号墳は横長の石室を持つものであるが、およそこの地方では6世紀以降に洞張りプランが多数を占める中で少数派ではある。類似したものに、甘木市柿原古墳群I地区20～23号墳<sup>(註3)</sup>、同D地区7・11・18・23号墳<sup>(註4)</sup>などがある。これらはその出土遺物等から7世紀初頭～末葉の間に比定されるもので、当2号墳も、これも確たる根拠はないが、とりあえず7世紀中葉頃と考えておきたい。

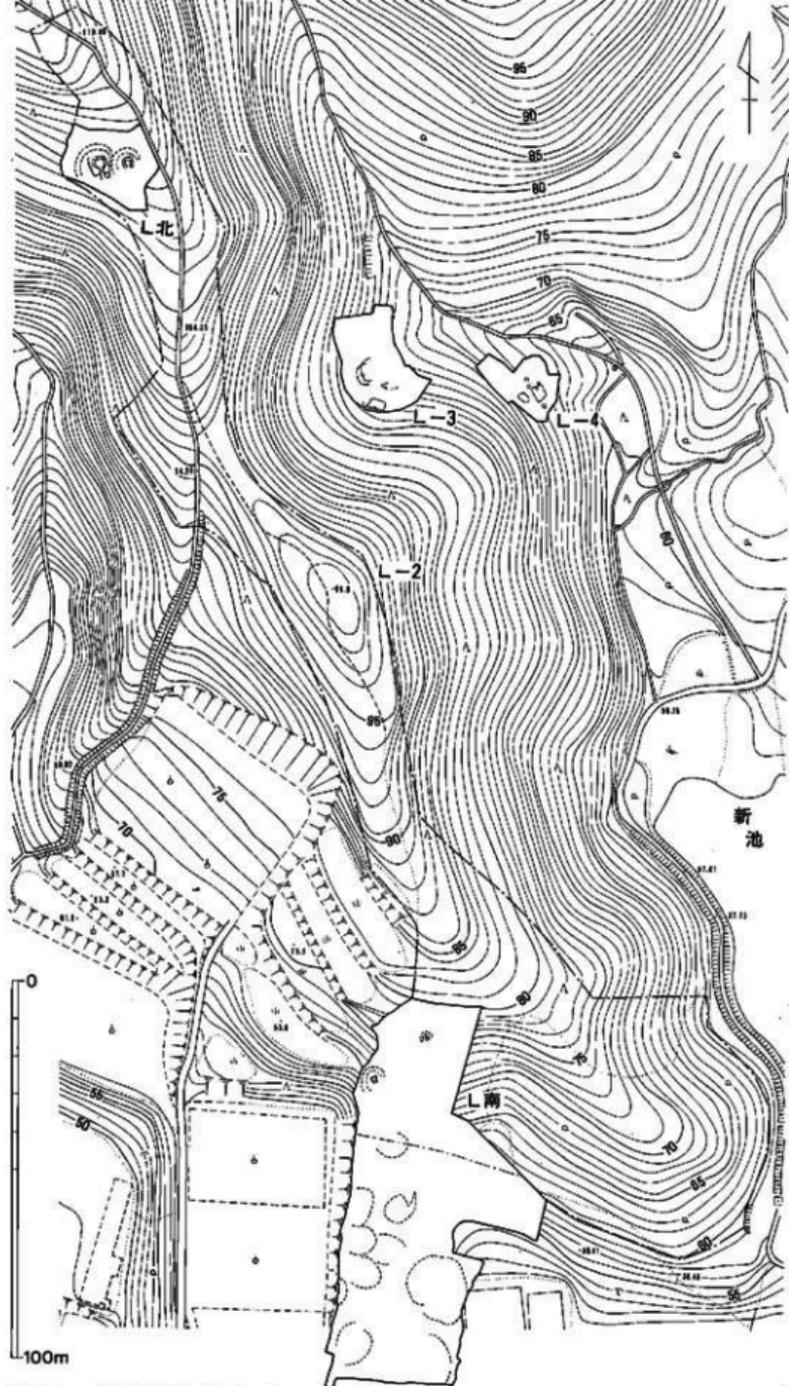
(伊崎)

註1 福岡県教育委員会 1985 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集』

2 福岡県教育委員会が九州横断自動車道関係で1986年に調査を行った。

3 福岡県教育委員会 1986 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-6-』

4 福岡県教育委員会 1990 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-19-』



第 27 图 柿原L地区地形图 (1/1500) -40-

## IV 柿原遺跡群の調査(L地区)

### 1. はじめに

柿原採土場用地内の遺跡を総称した「柿原遺跡群」のうちで、L地区は最も西側に位置する。L地区では、諸般の事情から発掘調査は分割して実施した。またL地区尾根の北側半分については、全面を発掘調査せず、試掘調査を実施した際に文化財を確認した部分を拡張して発掘調査を実施したために、1～4調査区が点在している(第27図)。

#### L1調査区(L北古墳群)

L1調査区はL地区北半分の調査区で、L地区全体では斜面の下部側がやや緩傾斜なのに比べて、幅が狭くて急傾斜の尾根が大部分を占めている。L地区の踏査時には斜面下部には古墳の墳丘らしい起伏が発見され、地形測量を昭和54年度に実施したが、そのほとんどは土取り対象地外になって保存された。しかし標高の高く急傾斜の尾根部では、古墳の墳丘らしい起伏も確認されないような地形であった。このため尾根部の表土を削ぎながら遺構の有無を確認することにしたが、踏査時に墳丘を確認出来なかった部分で、尾根線より僅かに南西側の斜面で標高111～113m程の場所に横穴式石室を主体部にする古墳が2基発見された。ここではこの2基の古墳をL北古墳群の1号墳・2号墳と呼称し、斜面下部の古墳群をL南古墳群とすることにしたい。

#### L2調査区

L地区尾根線の試掘範囲のうち、L1地点を除いた部分をL2調査区と呼んでいるが、その南端部は昭和59年度実施のL南古墳群調査区と一部重複する。

この調査区では、L北古墳群よりも100m余り下がった部分で、尾根線の頂き部分が僅かに広く成っていた。標高100m弱の位置であり、緩傾斜部分が他の部分よりも広く、遺構の存在も予想されたため試掘範囲を拡張して精査した。しかし遺構・遺物は全く発見されなかった。

#### L3調査区

L地区尾根のうち、新池の上流側端に続く谷のうちI地区との境にしている支谷に面した斜面で、鞍部と谷部を含むものの僅かに緩傾斜になった部分から、試掘時に土器片などが発見されたために調査区を設定した。調査区は新池に土砂が流れ込まないことも考慮して面積を抑えたため約460㎡の広さにとどまった。この調査区では、住居跡とみられる竪穴2基と、土坑2基、柱穴状ピット群などの遺構が発見された。

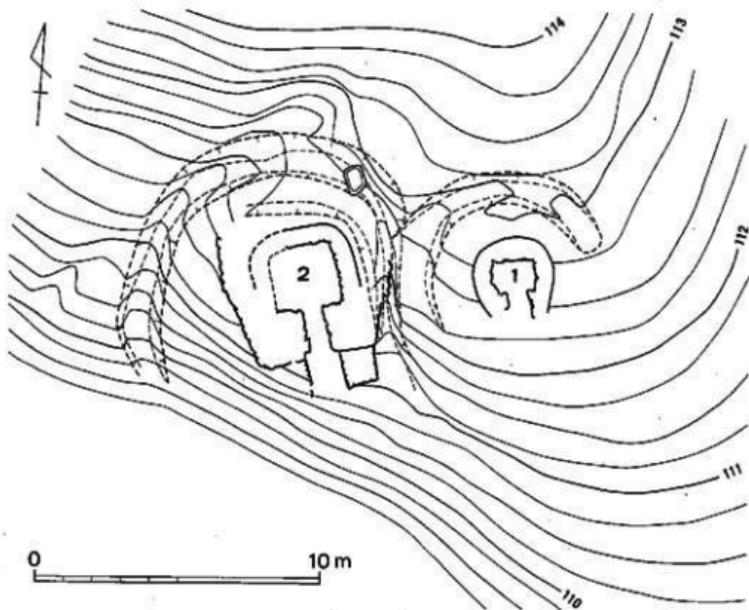
#### L4調査区

L3調査区よりも新池に続く沢に近接した位置にあり、標高66~72m位である。やや緩傾斜な標高69m以下の東半分には、竪穴住居跡1基と、楕円形土坑1基、不整形土坑4基の他、柱穴状ピットが10余り発見された。約270㎡の広さを調査した。

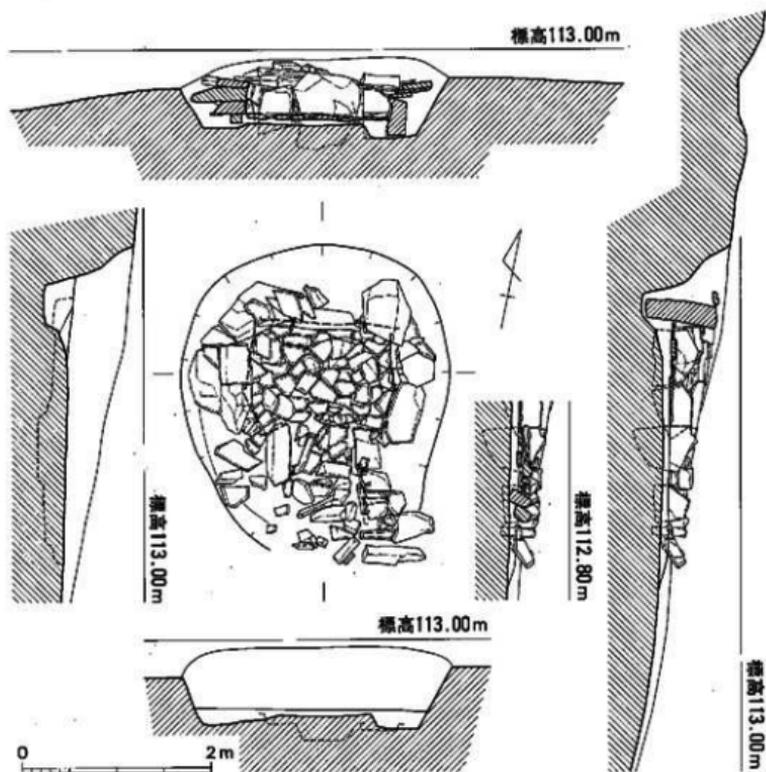
#### L南古墳群調査区

昭和54年度に地形測量を実施した部分を含め、昭和59年度に発掘調査した古墳群をここではL南古墳群と呼称することにする。昭和59年度の調査範囲は約3400㎡であるが、西側寄りの斜面から横穴式石室を主体部にする古墳が2基発見された。また昭和54年度に地形測量された部分はその大半が土取り範囲から外されて、そのまま現地保存されているが10基前後の古墳が存在するようである。

### 2. L北古墳群 (図版14-1, 第28図)



第28図 柿原L北1・2号墳墳丘地山整形面測量図 (1/200)



第 28 図 柿原L北1号墳石室実測図 (1/60)

1号墳 (図版14-2, 第28図)

L地区尾根の標高112.5m位に位置する。緑泥片岩の岩盤の上に僅かに乗る緑泥片岩・黒色片岩の風化した黄褐色・暗赤褐色土の部分に構築されているが、削平を受けて墳丘盛土は全く残らずに、周溝と石室の下部が残るのみである。

周溝は、石室の後ろ側を中心にして馬蹄形に残る。残された上縁では最大幅1.5mを測るが大部分は1.0m幅前後で、深さは0.2~0.3mである。周溝の内側掘で測ると墳丘径は東西幅で

5.7mを有することになる。

#### 主体部 (図版14-3, 第29図)

この古墳の主体部は、主軸方向をN10°Wにとり、南方向に開口する単室両袖タイプの横穴式石室である。

主体部の掘り方は、北側で0.7mの深さに残り、南北3.4m、東西2.8mの広さをもっている。玄室部分の掘り方床面は岩盤にまで達している。

全長2.3mを測る石室の壁体は緑泥片岩の石材が用いられていて、袖石と鏡石には大振りの石材が据えられ、他は40cm×50cmの広さで10～15cm程の厚みの扁平石が多用されている。

玄室は僅かに胴の張る横長の長方形プランで、長さ1.10m、最大幅1.55m、奥壁部の幅1.43m、袖石部の幅1.30mを床面で測る。奥壁は、中央に高さ75cm (床面からの高さ45cm)、幅50～70cm、厚さ20cm前後の扁平石を立てて鏡石にして、その両脇には小振りの扁平石を立てて基底部にしているが、その上には扁平石を小口積みして2・3段分が残っている。

玄室右側壁は基底部に扁平石を2枚立てて、その上に10cm前後の厚みの扁平石で小口積みされるが、左側壁は基底部から厚さ15cm前後の扁平石で小口積みされていて、30cm程の高さしか残らない。また左右の袖石は、厚さ30cm、幅40・60cm、高さ60cm (床面からの高さ30cm) 程の大きさの石を用いて、70cm弱の間を距てて据えられている。

玄室内床面の敷石は、人頭大程の広さの扁平石を敷き詰めているが、特に規則性のある敷き方ではない。また両袖石間の玄門床面でも敷石の並び方は乱れていて、仕切石もみられない。

袖石より前面は、左側には残らないが、右側では0.8mの長さに扁平石を立てた石組基壇の壁が続き、前面に面を向けた扁平石が前側に傾いているが、本来は立っていたと推定される。

閉塞は、石組基壇部から袖石の前面側にかけて、石室主軸に直交する向きに扁平石を積み上げられていたようで、その下部のみが残されていた。

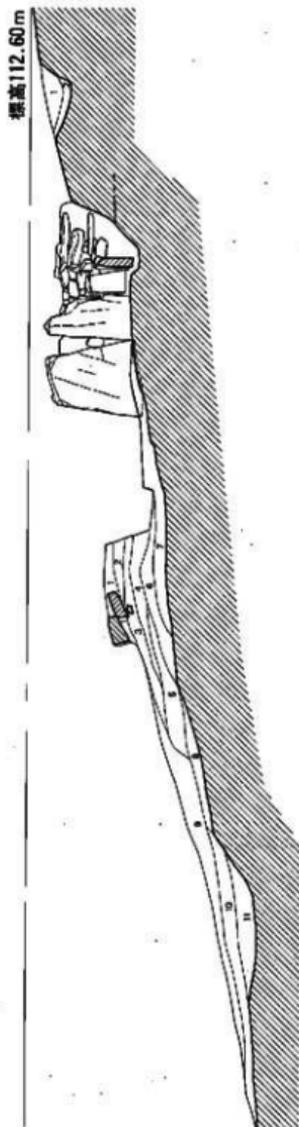
#### 遺物

既に石室などが開削されていたためかも知れないが、石室内部や周溝部分および、石室前面からはなんらの遺物も出土しなかった。

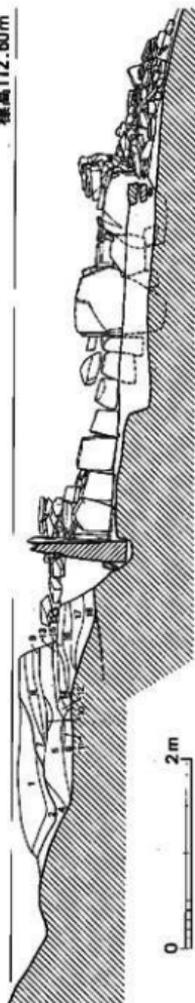
## 2号墳

#### 墳丘 (図版15-1, 第28・30図)

1号墳の西側に隣接し、尾根から南西側の少し下の斜面に構築された古墳で、標高111.5m位に占地する。石室部分が破壊された後に斜面上部から流入した土砂で埋没していて、墳丘は

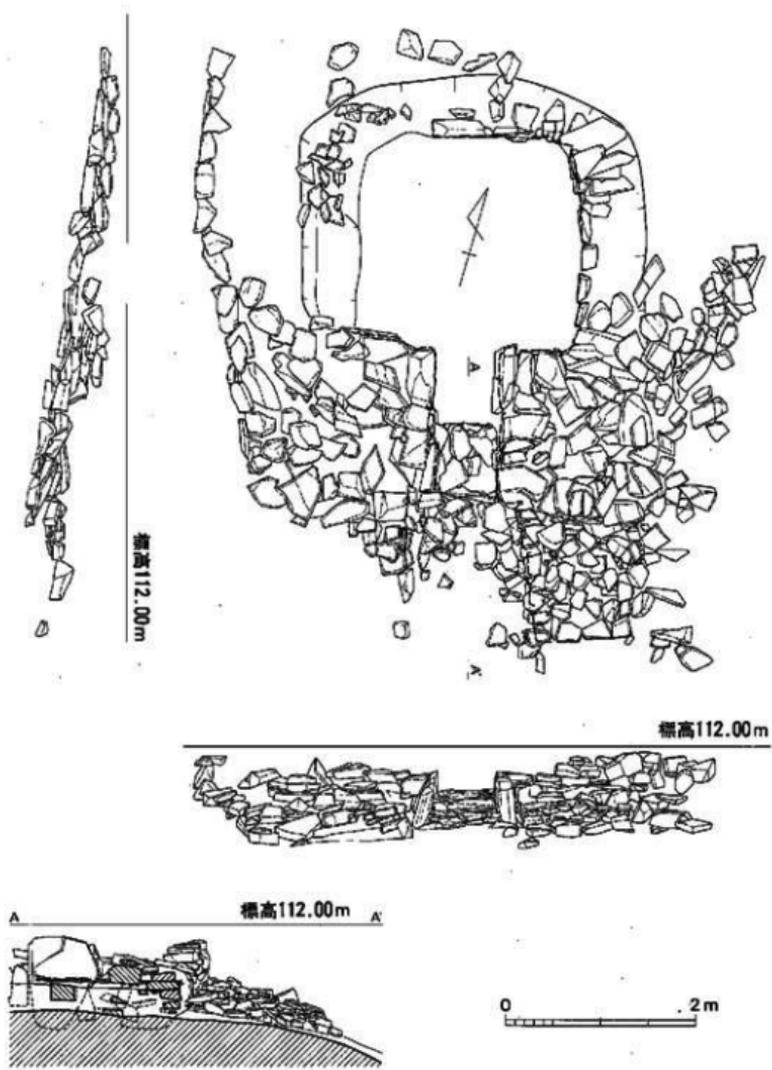


標高112.60m

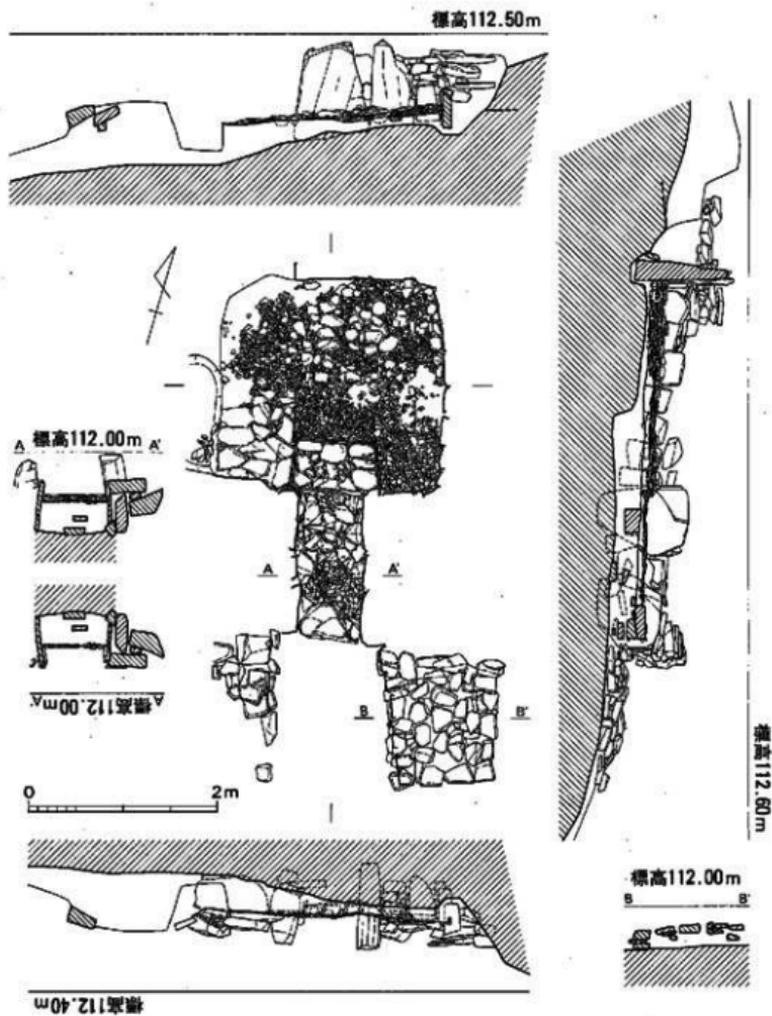


- ①黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ②黄赤褐色土層  
 ③D1土層  
 ④黄赤褐色土層  
 ⑤黄赤褐色土層  
 ⑥黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑦黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑧黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑨黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑩黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑪黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑫黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑬黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑭黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑮黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑯黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑰黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑱黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑲黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ⑳黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉑黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉒黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉓黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉔黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉕黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉖黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉗黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉘黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉙黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉚黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉛黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉜黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉝黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉞黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㉟黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊱黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊲黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊳黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊴黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊵黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊶黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊷黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊸黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊹黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊺黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊻黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊼黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊽黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊾黄赤褐色・灰赤褐色交り土層  
 ㊿黄赤褐色・灰赤褐色交り土層

第38図 榊原L北2号墳横丘断面実測図(1/60)



第 31 图 柿原 L 北 2 号墳墳丘列石・石室閉塞状況実測図 (1/60)



第 32 图 柿原L北2号埴石室実測图 (1/60)

東北側に僅かに残る程度である。古墳の占地在斜面であるために、北東部では岩盤が露出しているが、主体部部分から南西側は盛土の上に石室が構築されている。周溝は石室後ろ側を中心に馬蹄形に残り、東側の周溝は、岩盤を掘り込んでいるが、東側にある1号墳の周溝によって壊されているようである。また北側では周溝に続いて斜面上側に向かう攪乱土部分がある。周溝は上縁の幅で0.8~1.6m、深さ0.3~0.4mを測るが、概して東側周溝が細く、急傾斜である。周溝の内側裾は東側で石室中心から2.4mで、北側で4.0m弱、西側で5.4mを測り、周溝の東側と西側では底面で2.0mの高低差がある。従って、墳丘は西側で裾が下がるために広がるが、東側は盛土が少なく急傾斜であったことになる。

墳丘には淡茶褐色土・暗赤褐色土・淡赤褐色土・黄褐色土などが積み上げられていて、緑泥・黒色片岩の小さな角礫や粒を多く含んでいる。主体部中央から左右にそれぞれ2.80・2.95m部分に面を揃えた列石があり、緩やかに弧を描いて主体部を囲んでいる。さらに、列石は石室前面側に続き、羨門部に面を揃えた列石に繋がるが、前面側には崩落して前面区画に転落した石が多く、羨道部門脇の外側に続く葦石らしい石との識別が困難なほどである。葦石は石室前面から層石の部分を覆っていたものと推定される。

#### 石壇状前面区画 (図版16-2, 第31・32図)

主体部の横穴式石室の前面の左右に構築されていたようだが、左側の区画は大半が流失したらしく、内側に面を揃える列石状の部分以外は残らない。右側では扁平な石材を使用して、長さ1.30~1.40m、幅1.00~1.20m程の不整形プランの区画が作られて、前面・内側・外側ともに石の面が揃い、区画内は僅かに内側に傾斜するものの扁平石で平らに敷き詰められる。

#### 主体部 (図版16-17, 第31・32図)

この古墳の主体部は、主軸方向をN16°Wにとり、南南東方向に開口する単室両袖タイプの横穴式石室である。

主体部の掘り方は、北側で1.0mの深さに残り、東西に上縁で4.0m弱、床面で2.8mの幅を有し、玄室部分の床面は岩盤を掘り込んでいるが、前面側は盛土であるために南北方向の規模はよく分からない。

全長5.3mを測る石室の壁体は緑泥片岩の石材が用いられていて、袖石と鏡石などには大振りの石材が据えられ、他は小振りな広さで10~15cm程の厚みの扁平石が多用されている。

玄室は、西側の左側壁が基底部から抜き取られているために不確定だが、僅かに胴の張る方形プランで、長さ2.15~2.20m、最大幅2.40m、奥壁部の幅2.20m、袖石部の幅2.30mを床面で測る。奥壁は、中央に高さ95cm(床面からの高さ70cm)、幅50~80cm、厚さ20cm前後の扁平石を立てて鏡石にして、その右脇には少し幅の狭い扁平石、更に隅部には小振りな扁平石を立

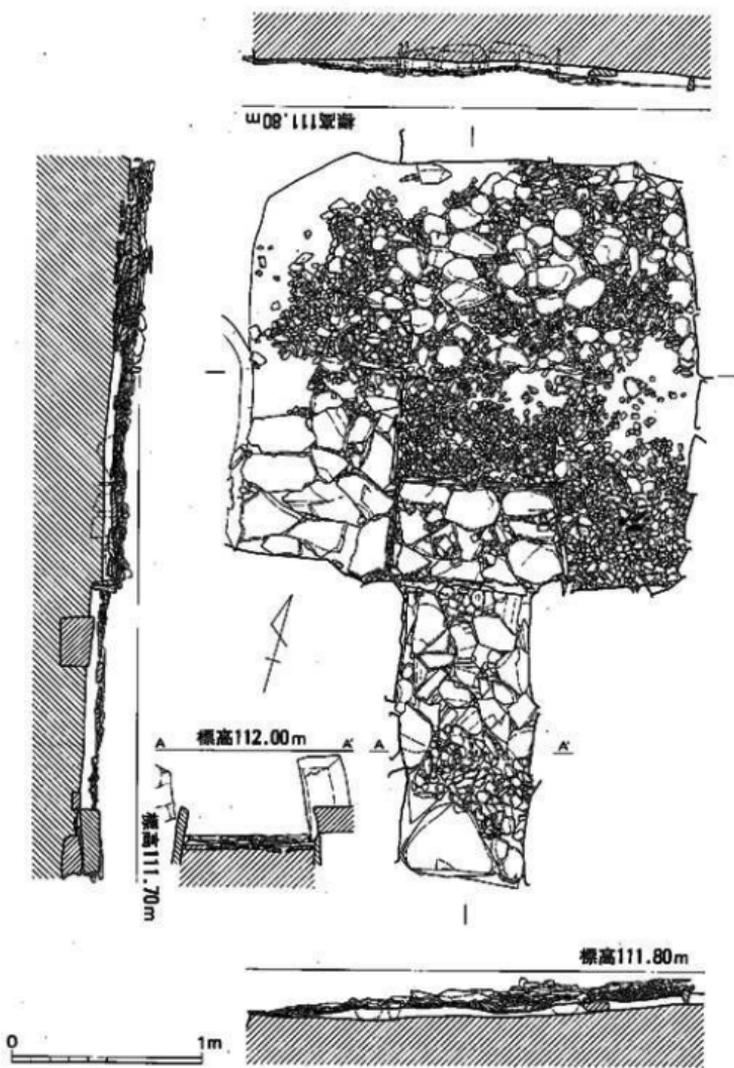
てて基底部にしているが、高さの低い隅部の石の上は扁平石を小口積みして3段が残っている。

玄室右側壁は基底部に扁平石を7枚並べて立て、その上に10cm前後の厚みの扁平石で小口積みされるようで奥壁側面部で4段が残る。左側壁では残された抜き痕でみる限り右側壁よりも枚数が少なく大きめの扁平石が立てられた可能性がある。左右の袖石は、厚さ15cm・30cm、幅70cm、高さ90・80cm（床面からの高さ50cm）程の大ききの石を用いて、70cm弱の間を距てて据えられている。また袖石と側壁との間は、基底部に扁平石が立てられて、その上側や隙間には扁平石が小口積みされている。

玄室内床面の敷石は、細かな玉砂利から人頭大程の広さの扁平石まで幾種類かの石で敷き詰められているが、石の種類や敷き方にある程度規則性をもっているように見える。すなわち、玄室中央から奥側半分は小さめの扁平石と玉砂利が敷かれ、その上にやや大振りて角の丸くなった扁平石が奥側半分の真ん中の部分に敷かれ、前側半分との境目に小さな扁平石が立てられている。前側半分では、幅を三分割して長さ20cm、幅10cm、厚さ2～3cm程の扁平石を並べて立てて区画を仕切り、さらに中側の区画は0.55m毎に仕切られて2区画に細分され、羨道部とも仕切られている。敷石は右側側区画で川原石らしい丸みをもった玉砂利が充填され、左側側区画は大きめの扁平石が敷き並べられる。床面全体の1/12の広さである中央側の小さな区画は角張った玉砂利が充填され、玄門側の小さな区画は左側側のように大きめの扁平石が敷かれて砂利が隙間を埋めているのである。

羨道部では羨門に高さ70cm、幅60・80cm、厚さ15cm程の石を立てて据え、袖石の間には基底部に小振りの扁平石を立てるが、両側壁ともに薄い扁平石をその前側に立てて羨道全体の幅を整えている。羨道部は長さ1.50m、幅0.65～0.70mの広さで、床面には石室前面側端に大きな扁平石を置き、丸みのある川原石を敷くが、奥側には大振りの扁平石を敷き詰めている。また床面に露出していないが、袖石間に長さ65cm、幅25cm、厚さ18cmの大ききの石が挟まり、仕切石であったと推定されるが、石室全体が前側に低く傾斜気味ながら、床面を平らに整えるために羨道部の床がかさ上げされたのかも知れない。同種の敷石が使用されたことからみて、玄室奥側区画内の床の高さが増加したことに伴っての改修の可能性もある。羨門部には扁平石が4段積まれているが、横たわる石のうち、一番上の1枚は追葬に伴った可能性があるものの、その下の石は羨門に挟まるように置かれていて、本来の羨門を仕切る石であったと推定される。

墓道部は、左右にある石壇状の石敷方形区画に挟まれた長さ1.40m、幅1.20mの範囲であろうが、左側の石壇状区画は大半を失う。また床面の高さは、羨門を仕切る石よりも0.20m前後低く、羨門部分に閉塞石の一部らしい石が散乱する。



第 33 图 神原L北2号墳石室内敷石・遺物出土状況実測図 (1/30)

この古墳からは、玄室内床面の右壁側区画から金属製品が出土したが、その他の石室内部や石室前面、墳丘、周溝などでは遺物の出土は全くみられなかった。玄室内右袖に近い床面の区画内では直刀の破片とみられる鉄片、鉄線片、銀製刀装金具などが互いに近接して出土した。

遺物 (図版28, 第34図)

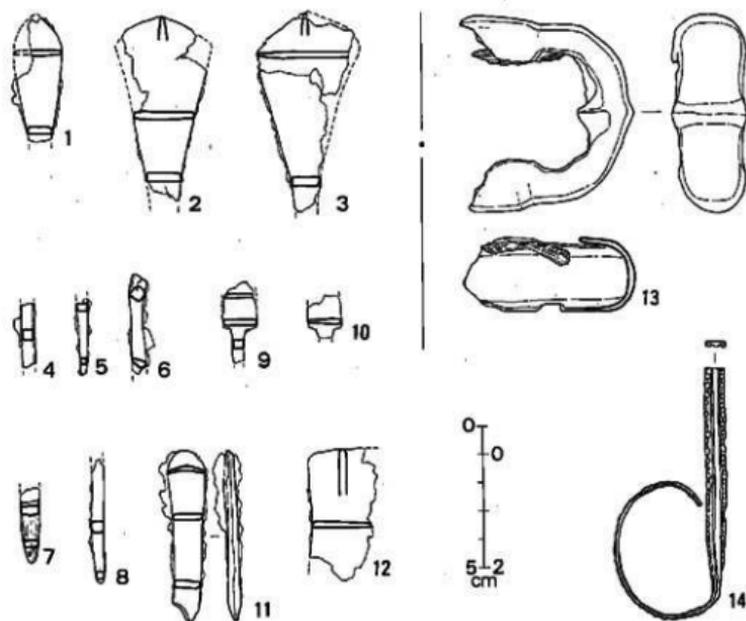
鉄 鐮 (1~10) 1は柳葉形、2・3は広根式圭頭形の鐮で、基部を失う。4~6・8は尖根鐮などの基部で、7は木質の鏽着する広根式鐮の鏽被部らしい。9・10は広根式方頭形の鐮であろう。

鉄 鐮 (11) 茎側を欠くが、先端部の断面形が浅いU字形を呈する鐮であろう。

不明鉄製品 (12) 扁平な鉄片で、角張った形の縁部をもつ。

鉄 刀 図示しえないが鉄刀片らしい鍛造鉄製品の剣片が多数ある。

銀製柄頭?金具 (13) 1点のみ出土したため、柄頭金具か石突(鏝)かの区別はしえない。兜形で外縁には僅かな段があり、端部内側に一部木質が遺存する。背部中程は帯状に尖り、内



第 34 図 柿原L北2号墳出土金属器実測図 (1/2・実大)

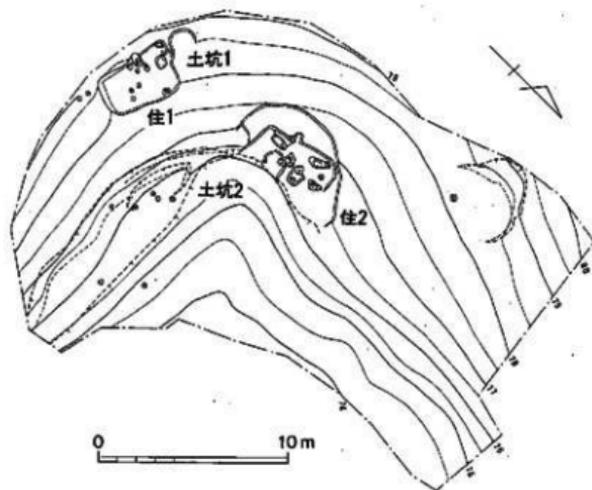
縁側にも突起が続く。厚さ1mmの素材をU字形に曲げて、断面形もU字形を呈する。長さ3cm、外側の最大幅3.5cm、厚み1.3cmの大きさ。

銀製刀装具(14) 厚さ1mm弱、幅3.5mmの帯状を呈し、2条の溝の間は蒲鉾形の断面形を残し、両側縁は細かな打ち出しで起伏のある縁飾りに細工されているが、一端は捻れて長径2.3cm、短径1.8cmの楕円形に曲がっている。柄飾りの部品であろうか。

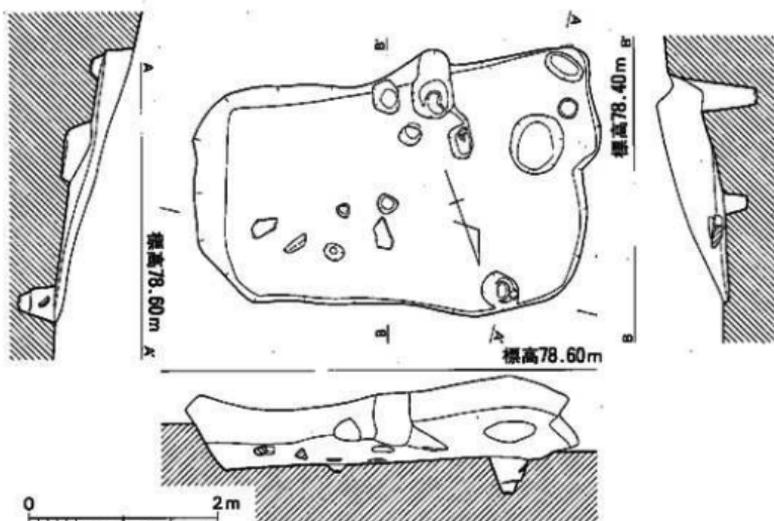
### 3. L3・4調査区の生活遺構

#### L3-1号住居跡(図版18-2, 第36図)

調査区南端近くの、標高78m前後を測る斜面較部で発見された住居跡状の竪穴遺構である。長さ4.2m、幅2.3~2.6mの広さの不整形プランで、主軸方向はN72°Wを向く。周壁は南側で0.5m程度とやや残りがよいものの、斜面下になる北側ではほとんど残らない。床面はさほど堅緻ではなく、北側に傾斜して0.3~0.5mの高低差がある。床面には柱穴状ピットと緑泥片



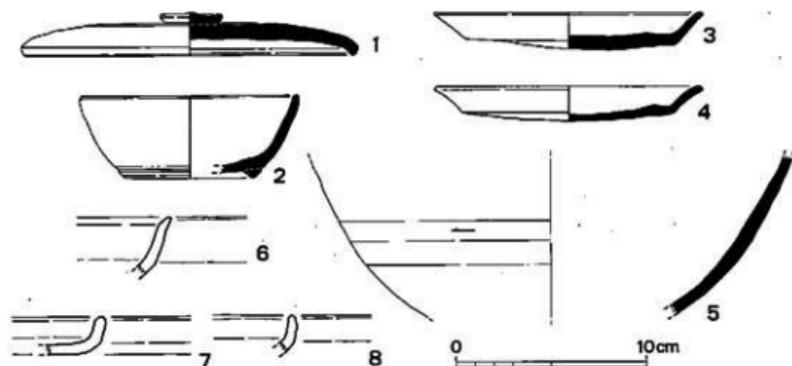
第35図 神原L3調査区遺構配置図(1/300)



第 36 図 柿原L3-1号住居跡実測図 (1/60)

岩の扁平石が若干みられ、扁平石に囲まれた直径1m弱の範囲は焼土化しているが、カマド施設の痕跡などは発見されなかった。柱穴状ピットには深さを有するものもあるが、配置に規則性がみられず主柱穴としてまとまるピットを特定しがたい。

出土土器 (図版24, 第37図)



第 37 図 柿原L3-1号住居跡出土土器実測図 (1/3)

須恵器杯蓋(1) 復原口径17.8cm, 器高2.3cmの大きさの, 鳥嘴状の口縁部と扁平な宝珠形つまみを有する杯蓋で, 口縁部端部はやや丸みをもつ。低平な天井部の外面は回転ヘラ削り調整されている。胎土に砂粒がほとんどみられず, 堅い焼成で, 灰色の色調を呈している。

須恵器杯身(2) 復原口径11.6cm, 器高4.5cm, 高台径7.5cmの大きさの, 底部端に高台が付く杯身である。胎土に砂粒がほとんどみられず, 堅い焼成で, 灰色を呈している。

須恵器皿(3・4) 共に, 僅かに丸みをもつものの平らな底部から口縁部が短く外反する器形の杯というよりはむしろ皿形の土器である。復原口径14.2cm, 器高2.0cm弱の大きさで, 外底はヘラ切り離しのあと少しナデられているが, 底部の厚みでは3が厚く4は薄めである。胎土に細砂粒を含み, 灰色と暗灰色に堅く焼成されている。

須恵器鉢(5) 口縁部と底部を欠くために全体の器形は不明だが, 残された部分の復原径は25.0cm前後である。胴部内面がヘラミガキ調整されていることなどから, 鉢形土器であろう。外面の口縁部側はナデ調整, 底部側はヘラ削り調整されている。胎土に石英粒などを含み, 灰色ないし暗灰色に堅く焼成されている。

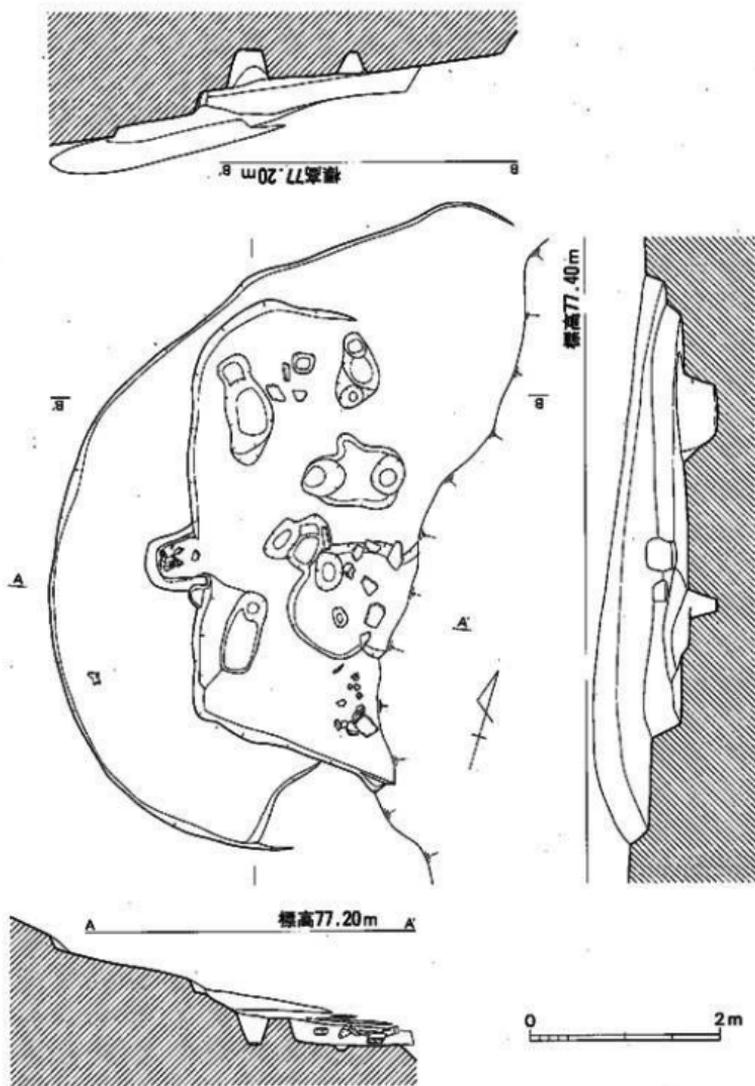
土師器杯(6~8) いずれも口縁部破片である。6はやや深い器形の杯で, 口縁部は外反する。7・8は平らな底部から内彎気味の口縁部が短く立ち上がる杯である。外底部側はヘラ削りされるが, 口縁部はヨコナデ調整されている。胎土に石英・雲母・赤褐色粒などを含み, 褐色ないし橙褐色に焼成されている。

### L3-2号住居跡(図版19, 第38図)

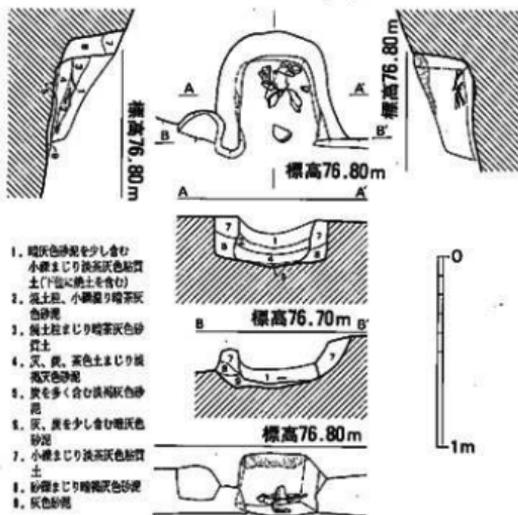
調査区の中央部で発見された住居跡で, 斜面のうちでは谷状に窪んだ部分にあり, 調査時が雨期でもあったためか湧水が止まらないような場所に位置する。斜面下側になる東側を失うが, 長さ4.6m, 幅2.4mの広さの不整形方形プランで, 主軸方向はN13°Wを向く。また周壁は西側で0.5m程度とやや残りがよいものの, 東側は削平されて残らない。中央部に焼土が散らばる床面はさほど堅緻ではなく, 東側に傾斜して0.25mの高低差がある。さらにこの不整形方形プランの周囲に直径6.5m前後の大きさの不整形円形プランの壁穴がみられるが, 重複りもむしろ方形プランと併うかのような位置にあり, 床面はさほど堅く締まらない。また不整形方形プランの壁穴の床面には柱穴状ピットには深さを有するものもあるが, 配置に規則性がみられず主柱穴としてまとまるピットを特定しがたい。西壁の中ほどにカマドが施設されている。

#### カマド(図版19-2, 第39図)

住居跡周壁を切り込んで突出するカマドで, 火床面は床面とほぼ同じ高さである。周壁の前に出る袖は分らないが, 奥側の両袖部は内側が焼けている。焚き口部は明確ではないが, 燃焼室は長さ50cm, 幅40cmの広さをもつ。火床に支え石はみられないが, 中央部に浅い凹みがあ



第 38 图 柿原L3-2号住居跡実測図 (1/60)



第 39 図 柿原 I 3-2 号住居跡カマド実測図 (1/30)

開いて立ち上がる器形の杯で、3 はやや直に立ち上がる。3 は復原口径13.0cm、底径9.3cm、器高3.9cmで、4 は復原口径14.8cm、底径7.9cm、器高3.7cmである。胎土に石英・雲母・赤褐色色粒を含み、淡褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。

土師器小形甕 (6~10) 6 は膨らんだ胴部から頸部が括れて、短く外反する口縁部があまり肥厚しない器形の甕で、復原口径11.2cmの大きさである。7 は胴部がほとんど膨らまずに口縁部が僅かに肥厚して外反する甕で、復原口径16.3cmの大きさである。8~10は胴部がほとんど膨らまずに、口縁部が肥厚して外反する甕で、復原口径14.2cm~16.8cmの大きさである。胴部外面はハケ目調整され、内面はヘラ削りされている。

土師器甕 (11~13) 11は復原口径19.4cmの大きさの、外反する口縁部が肥厚しない甕で、胴部もほとんど膨らまない。12・13は復原口径が26.4cm・23.0cmの大きさの甕で、外反する口縁部は肥厚するが、外反は13の方が強い。いずれも胴部外面は縦方向にハケ目調整され、内面は頸部までヘラ削りされているが、11の内面は磨滅している。

土師器鉢 (14) 口径17.7cm、器高9.9cm、底径9.1cmの大きさの、口縁部が強く外反する鉢で、口縁部はやや内湾する。レンズ状に少し膨らむ外底部はヘラ削りされ、底部から直線的

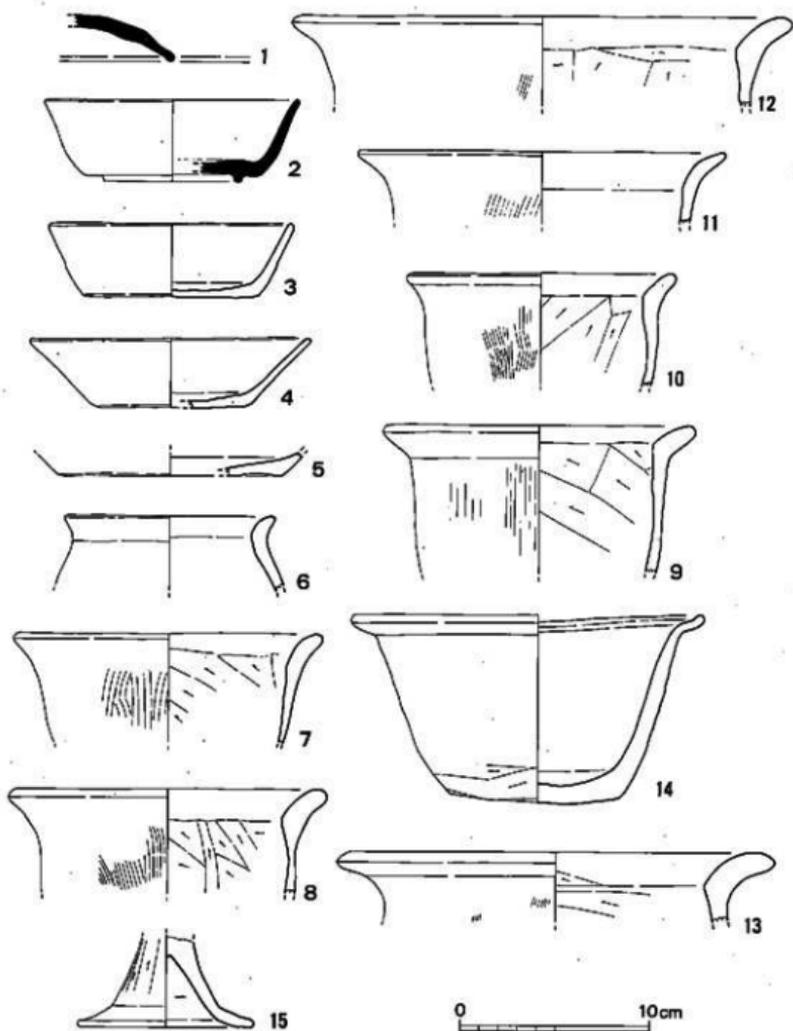
り、抜き痕であろうか。火床より僅かに浮いた位置から土師器甕片や杯片が出土した。

出土土器 (図版25, 第40図)

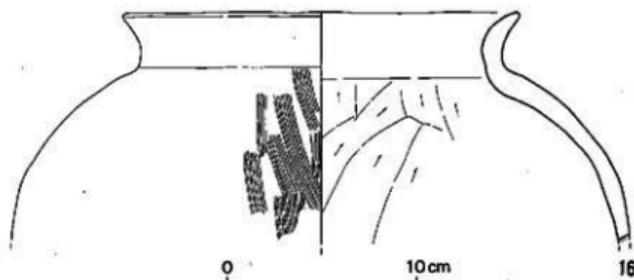
須恵器杯蓋 (1) 退化して端部が丸くなった鳥嘴状口縁を有する杯蓋の口縁部破片である。天井部外面はナゲ調整されている。

須恵器杯身 (2) 断面四角形の高台を有し、口縁部が緩やかに外反する杯身である。復原口径13.4cm、器高4.3cmの大きさで、砂粒を含まない胎土を淡茶灰色に焼成されている。

土師器杯 (3~5) 平らな底部から口縁部が直線的に



第 40 图 柿原 L. 3-2 号住居跡出土土器実測図 1 (1/3)



第 41 図 柿原 L3-2 号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)

に開く胴部は内外面ともにヨコナデ調整されている。胎土に石英・砂粒などを含み、橙褐色に焼成されている。

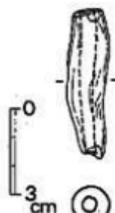
土師器高杯 (15) 杯部を失うが、残存器高4.8cm、裾径9.4cmの大きさの脚部である。中空の柱状部は内外面ともにヘラ削り調整されて開き、ヨコナデ調整される裾部は外反する。胎土に細砂粒を含み、橙褐色に焼成されている。

円形整穴部出土土器 (図版25, 第41図)

土師器甕 (16) 膨らんだ胴部から頸部が矮れ、肥厚する口縁部が短く外反する甕である。復原口径21.0cm、胴部最大径32.6cm前後の大きさで、胴部外面は縦方向にハケ目、内面はヘラ削り調整されている。胎土に石英・赤褐色粒などを含み、淡褐色に焼成されている。

出土土製品 (図版29, 第42図)

精良な胎土で、淡茶褐色に焼成された管状土錘で、ナデ調整されているが、捻れている。長さ5.2cm、外径0.9~1.4cm、孔径0.4~0.5cm、重量8.05gを測る。

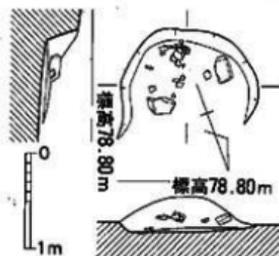


第 42 図 柿原 L3-1 出土土製品実測図 (1/2)

## L3-土坑

### 1号土坑 (第43図)

調査区北部で発見された不整形の土坑で、斜面上方の南壁では周壁が0.3m残るものの、斜面下方の北東側では削平されて残らない。床面は僅かに東北東側に傾斜している。他の遺構よりも色調の濃い黒色土が堆積していて、床面より少し浮いて土器片や緑泥片岩の角礫が出



第 43 図 柿原 L3-1 号土坑実測図 (1/60)

土した。

出土土器 (図版25, 第44図)

土師器壺 (1~4) いずれも胴部の膨らむ壺で、胴部径は1が18.2cmを越し、2・3は25.2cmを有する。口縁部は括れた頸部から外反し、1は復原口径15.7cm, 2は復原口径24.3cmの大きさ。胴部外面は縦方向にハケ目調整され、内面は頸部の少し下までへら削りされている。1では口縁部がほとんど肥厚せずに短く外反して、外面は口縁部までハケ目が残りに、内面のへら削りが弱めである。胎土に石英・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。やや口縁部が肥厚して強めに外反する2は口縁部がヨコナデされて、胴部内面のへら削りが進み器壁がやや薄い。胎土に石英・長石・雲母・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。4は凸レンズ状に膨らむ丸底の内外面がナデ調整されていて、石英粒などの砂粒を胎土に含み、橙褐色に焼成されている。

土師器皿 (5) 平らな底部から口縁部が短く開き、復原口径14.9cm, 器高1.5cmの大きさで、外底はへら切りされている。胎土に細砂粒を含み、橙褐色に焼成されている。

土師器杯 (6・7) 底部か天井部かの区別もし難い7は外面にへら切り難しの痕跡が明瞭に残りに、胎土に石英・雲母・長石を含み、橙褐色に焼成されている。6は復原口径12.4cm, 器高3.7cmの大きさで、口縁部は端部が内彎気味に開き、外底面はナデられる。高杯の杯部の可能性も残り、あるいは8の胴部と同一個体かも知れないが、接合はしない。胎土に石英・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

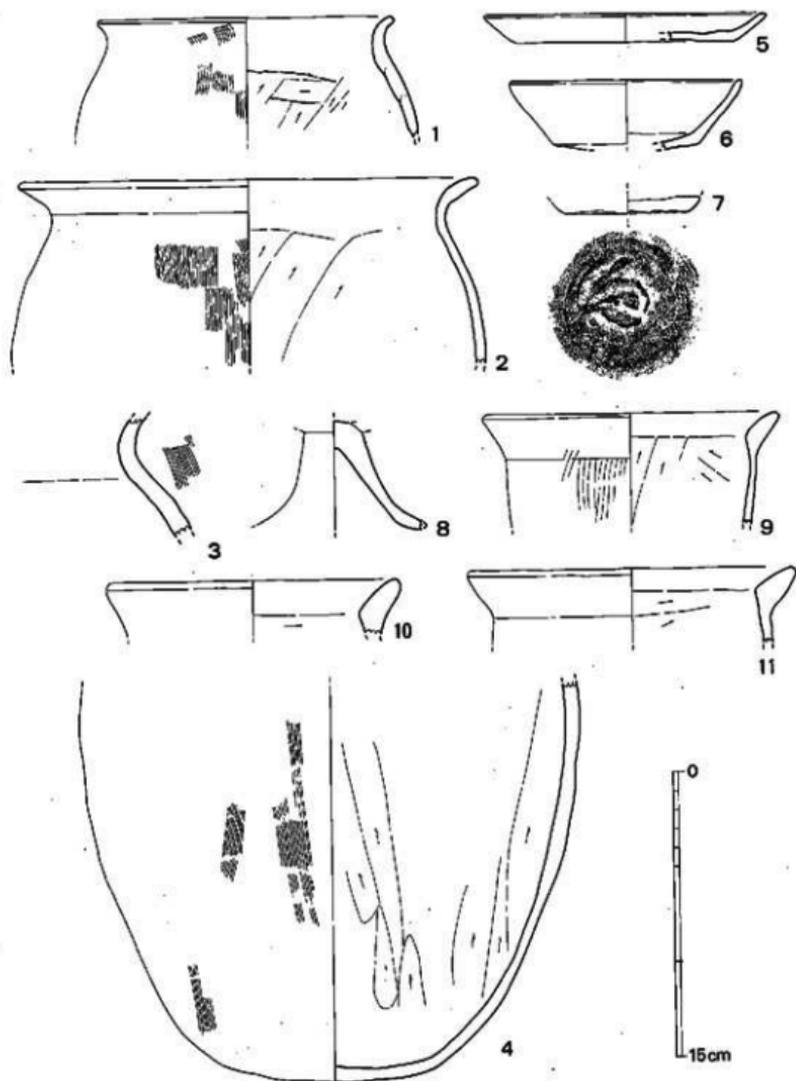
土師器高杯 (8) 杯部を失うが、中空の柱状部は裾部に向かって開き、裾部は緩やかに外反する。復原径10.0cm弱で、残存器高5.8cmの大きさ。石英・長石を含む胎土で、橙褐色に焼成されている。

2号土坑 (第35図)

調査区南東端近くで発見された溝状を呈する不整形円形の土坑で、2号住居跡の東側に位置する。南側は斜面上側から続く岩盤が露出し、岩盤に乗る状態の黄褐色粘土部分との境目に土坑が掘り込まれていて、長さ4.2m, 幅1.5mの広さをもつ。周壁は余り高く残らず、中央部にかけてなだらかに傾斜して深さ0.3mを有する。西端部床面には木炭がやや多く散乱していて、やや深さのある柱穴状ピットもみられたが、上部施設を想定できるようなピットはない。

出土土器 (図版25, 第44図)

土師器壺 (9~11) いずれも胴部がほとんど膨らまず、口縁部が肥厚して短めに外反する壺である。復原口径は15.6cmと17.4cmを測る。9では胴部外面が縦方向のハケ目、内面は頸部までへら削りされる。胎土に石英・砂粒を含み茶褐色に焼成されている。10・11は口縁部が厚めに肥厚し、外面は頸部にまでハケ目が及ばない。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み、黄橙



第 44 图 柿原 L. 3—土坑出土土器实测图 (1/3)

色、茶褐色に焼成されている。

### L 3 - 包含層出土土器 (図版26, 第45図)

須恵器杯身 (1・2) 蓋受けのかえりを有する杯身で、1は口径10.6cm, かえり部外径12.7cm, 器高4.2cmの大きさ。外底面はヘラ切り離しの後にナデられ、回転ナデ調整される体部外面にノ字形のヘラ記号がみられる。口縁端部は上側に立ち上がるが、焼成後の打ち欠き痕らしい傷がみられる。胎土に砂粒を含み、暗灰色に堅く焼成されている。2は口縁端部が1よりも内傾して立ち上がる。細砂粒を含む胎土で、灰色に堅く焼成されている。

須恵器杯 (3) 口縁部が緩やかに外反する口縁部破片である。胎土に砂粒を含み、ややあまい焼成で茶灰色を呈している。

土師器甕 (4・5) 4は膨らんだ胴部から頸部が括れて、僅かに肥厚した口縁部が外反する器形の甕で、5は胴部がほとんど膨らまずに僅かに肥厚した口縁部が強く外反する甕である。4は口径16.0cm, 胴最大径29.9cmの大きさで、胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面は頸部直下までヘラ削りされている。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み、淡褐色に焼成されているが、胴部外面に煤が付着している。5は口径17.6cmの大きさで胴部外面は粗い目のハケ目、内面は頸部までヘラ削りで調整されている。胎土に石英・長石を含み、褐色に焼成されている。

土師器鉢 (6) 胴部は底部から直線的に開き、口縁部が外反する器形の鉢で、復原口径20.8cm, 残存器高6.3cmの大きさ。器壁は薄めだが、器面が風化磨滅して調整手法は分からない。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成されている。

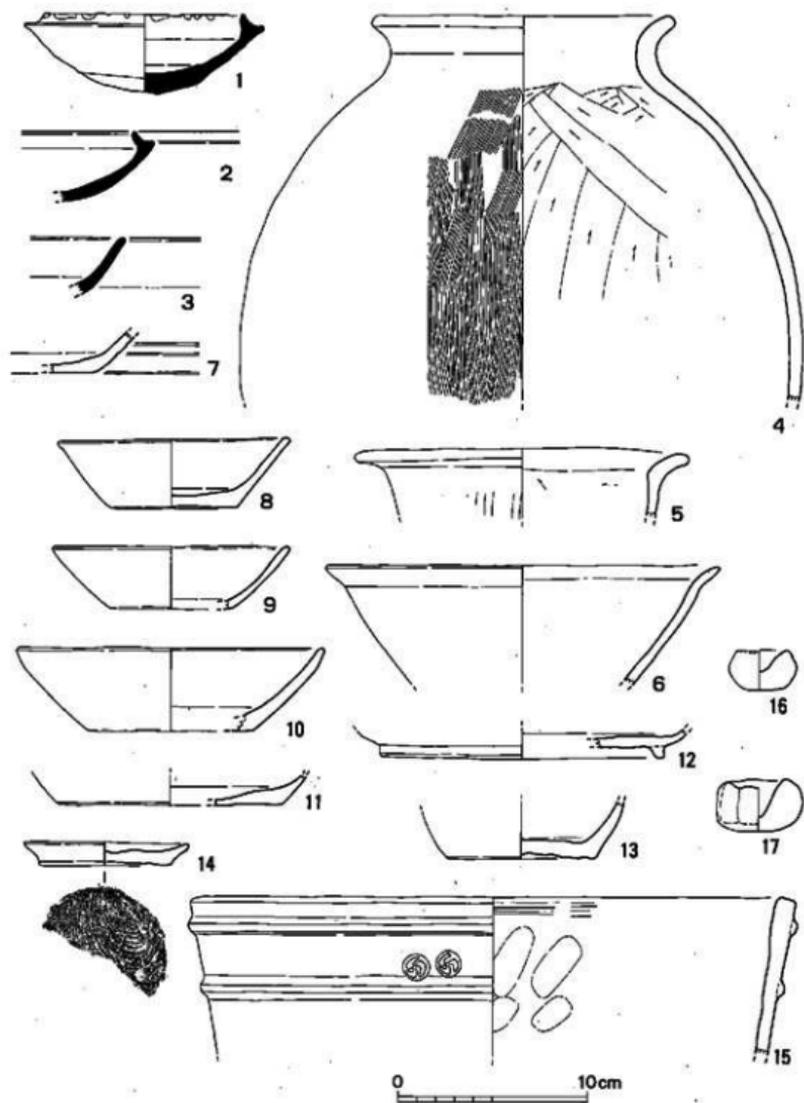
土師器杯 (7~13) 8は復原口径12.3cm, 器高3.7cm, 底径6.7cmの大きさの杯で、平らな底部から口縁部が直線的に開く。器面が風化磨滅して調整手法は分からない。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み、淡褐色に焼成されている。9・10は口径が器高の4倍ほどで、口縁端部が内彎気味に開く口縁部を有している。9は復原口径12.5cm, 器高3.3cm, 底径6.6cm, 10は復原口径16.2cm, 器高4.4cm, 底径8.7cmの大きさ。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み、淡褐色・褐色に焼成されている。7・11の破片も胎土・焼成がほぼ同様である。

12は高台を有する杯の底部破片で、復原高台径15.0cmの大きさ。

13は口縁部を失うが、ナデ調整される復原底径8.0cmの底部から、口縁部が内彎気味に立ち上がるらしく、残存器高は3.0cmである。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み、淡褐色に焼成されている。

土師器小皿 (14) 口径8.7cm, 器高1.3cm, 底径7.1cmの大きさで、糸切り痕の残る底部からの口縁部立ち上がりは低い。精良な胎土で、橙褐色に焼成されている。

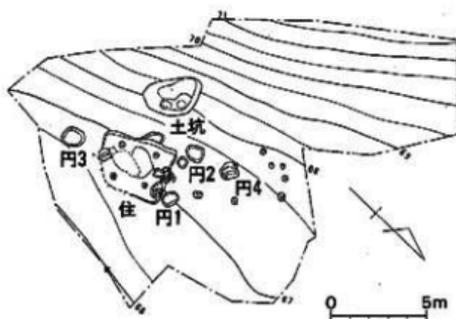
土師質火鉢 (15) 復原口径32.0cmの大きさの、口縁部が直線的に立ち上がる火鉢で、口縁



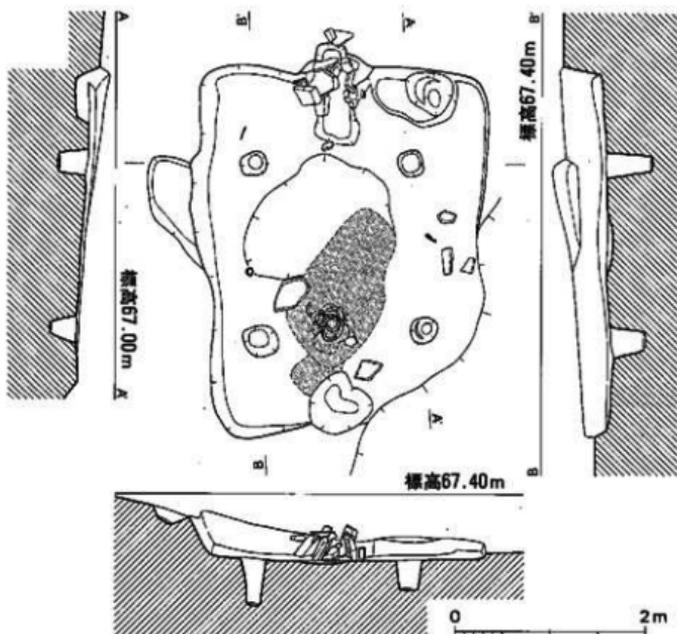
第 45 图 柿原 L 3 - 包含層出土土器実測図 (1/3)

部下に蒲鉾形の紐状凸帯が廻り、凸帯間に巴状の押捺文様が並ぶ。外面の凸帯下と内面の口縁部に若干ハケ目が残り、指先の凹みが残るナデ調整が内面にみられる。胎土に細砂粒・雲母を含み、淡黄褐色に焼成されている。

手控椀 (16・17) 外径4cm内外、高さ2～3cmの大きさの扁球形で、指先で押さえたような凹みがある。胎土に石英・雲母を含み、淡褐色ないし淡橙色に焼成されている。



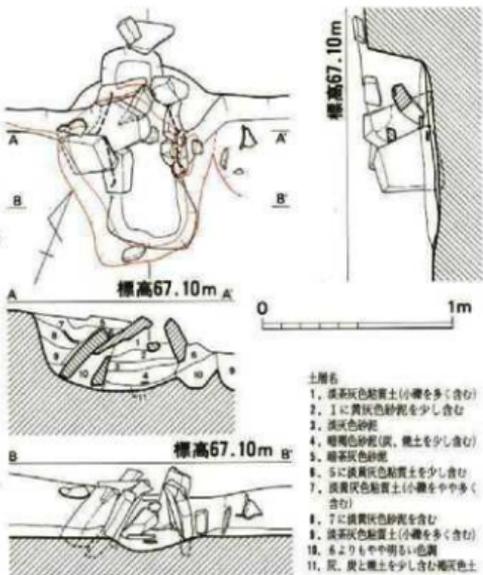
第46図 柿原L4調査区遺構配置図 (1/300)



第47図 柿原L4一住居跡実測図 (1/60)

L 4 - 住居跡 (図版20-2・3, 第47図)

調査区南側で発見された竪穴住居跡である。主軸方向をN 25°30'Wにとる不整形長方形プランを呈し、長さ3.9m、幅3.0mの広さをもつ。周壁は西側で0.35m前後を残すが、東側は斜面に削られて隅部を失う。北側壁の中程にカマドが施設されて、カマドの右側の床面に屋内土坑が設けられている。床面はやや堅緻で、1.6~1.8mの距離を置いて四方の配置で柱穴が掘り込まれている。柱穴は直径25~35cm、深さ30~40cmの規模である。柱穴に囲まれた床面には、長さ2.0m、幅0.9mの楕円形の範囲が火熱を受けて変色し、炭化物が散乱する部分と、その北西側に同規模ほどの広さの浅い



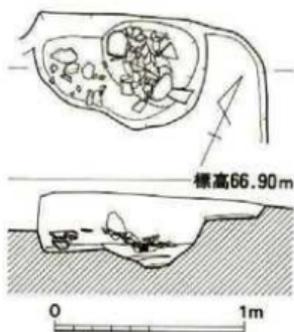
- 土層名
1. 灰茶灰色粘質土(小礫を多く含む)
  2. 1に黄灰色砂泥を少し含む
  3. 灰黄色砂泥
  4. 暗褐色砂泥(灰、焼土を少し含む)
  5. 暗茶灰色砂泥
  6. 5に淡黄灰色粘質土を少し含む
  7. 淡黄灰色粘質土(小礫をやや多く含む)
  8. 7に淡黄灰色砂泥を含む
  9. 淡茶灰色粘質土(小礫を多く含む)
  10. 6よりもやや明るい色調
  11. 灰、焼土を少し含む暗褐色土

第48図 榊原L4-住居跡カマド実測図(1/30)

凹みがある。さらに焼けた部分の南側寄りには鍛冶に使用されたとみられる炉跡がみられる。また、住居跡の北壁に隣接する2基の不整形円形土坑、および南側に約1mの距離をおいて位置する不整形円形土坑はいずれも直径1.0m弱、深さ0.1~0.2mの規模を有していて、周壁が火熱を受けて赤変するが、この住居との関連は不明である。

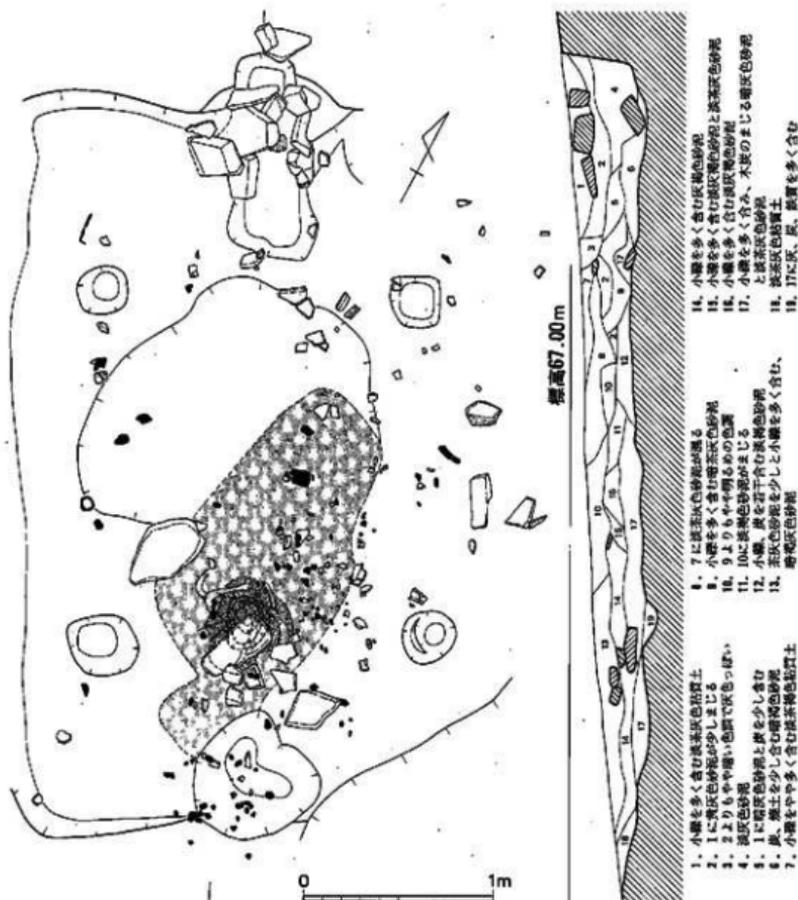
カマド (図版21-1・2, 第48図)

竪穴住居の北側壁よりも掘り方が僅かに突出し、火床面が床面とほぼ同じ高さのカマドで、馬蹄形に壁が築かれている。右袖は残存長50cm、基底部幅25cm、残高30~35cm、左袖は残存長45cm、基底部幅30~35cm、



第49図 榊原L4-住居跡屋内土坑実測図(1/30)

残高30~35cmを測る。左右の袖には、長さ35~40cm、幅25~30cm、厚さ5~10cmの扁平石を立て並べて、内傾させて据えられ、石の外側は粘土質の土砂で固められている。天井部分にも石材が渡し架けられていたものと推定されるが、それは残らない。燃焼室は長さ60cm、幅30~35cmの広さで、焼けた面はあまり顕著ではない。支脚石は長さ30cm強、幅15cm、厚さ10cm程の



第50図 柿原L4一住居跡内遺物出土状況と鍛冶炉実測図(1/30)

棒状の石材で、燃焼室の奥側に倒れている。

#### 屋内土坑 (図版21-3, 第49図)

住居内東北隅部の床面を掘り込んだ土坑で、東側が深い。上縁での長さ90cm, 幅60cm, 深さ10~25cmを測る。坑内に扁平石と土師器甕の破片などが出土したが、完形の例はない。

#### 炉跡 (図版21-4, 第50図)

前述したように、住居跡の床面中央部には木炭が散乱し、焼けて変色した部分がみられたが、南側の2つの柱穴に挟まれた部分には、直径50cm前後の広さで強く火熱を受けたとみられる部分があり、その中央部の直径30cmの部分は中凹みで、約10cmの深さを有する。この凹みの縁には低い土手状の突起を伴うが、東・西側に幅5~7cm程、北側に幅10cm余の切り込みがみられる。また炉跡露呈時には取り外しているが、遺物出土状況実測図や土層図に示すように、炉跡の南側縁の上に長さ40cm, 幅18cm, 厚さ6cmの扁平石や小さな石がみられた。炉跡縁に架かった状態では発見されていないが、炉跡付近の覆土からフイゴの羽口片も出土していることから、炉の上縁にみられる切り込みに、フイゴ羽口がはめ込まれていたものと推定されよう。

なお、この炉跡部分は約1m四方の広さを、発泡ウレタンを用いて切り取り保存した。

#### 遺物出土状況 (第50図)

住居跡覆土内には緑泥片岩の風化微粒を含んだ暗黄茶褐色系の色調を呈した堆積土がみられ、床面付近には土師器片のほか鉄滓・木炭片・鉄製品などが出土した。鉄滓は木炭と共に炉跡を中心とした部分に多くみられた。またその周辺部では、東側で鉄鏝、西側で鉄環、北西側で鉄刀子が出土した。

#### 出土遺物 (図版27~29, 第51~53図)

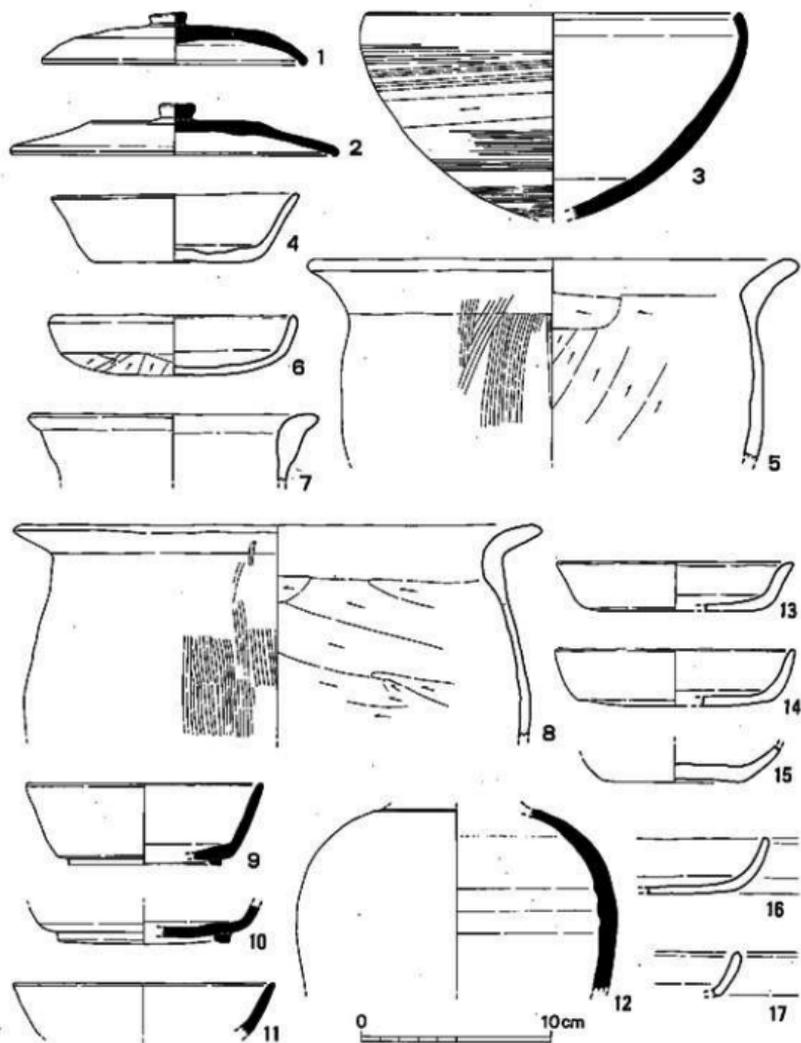
##### 屋内土坑出土土器 (第51図1~5)

須恵器杯蓋 (1・2) とともに口縁端部が退化して丸みをもった鳥嘴状をなす杯蓋で、外天井に平らな釘状のつまみが付く。1は口径14.0cm, 器高2.8cmの大きさで、口縁部は内彎気味に開く。砂粒を含む胎土で、灰色に堅く焼成されるが、内天井には墨の付着と磨滅痕がみられることから碓として利用された可能性がある。2は復原口径17.5cm, 器高2.8cmの大きさで、口縁部は直線的に開く。砂粒を若干含み、灰色に堅く焼成されている。

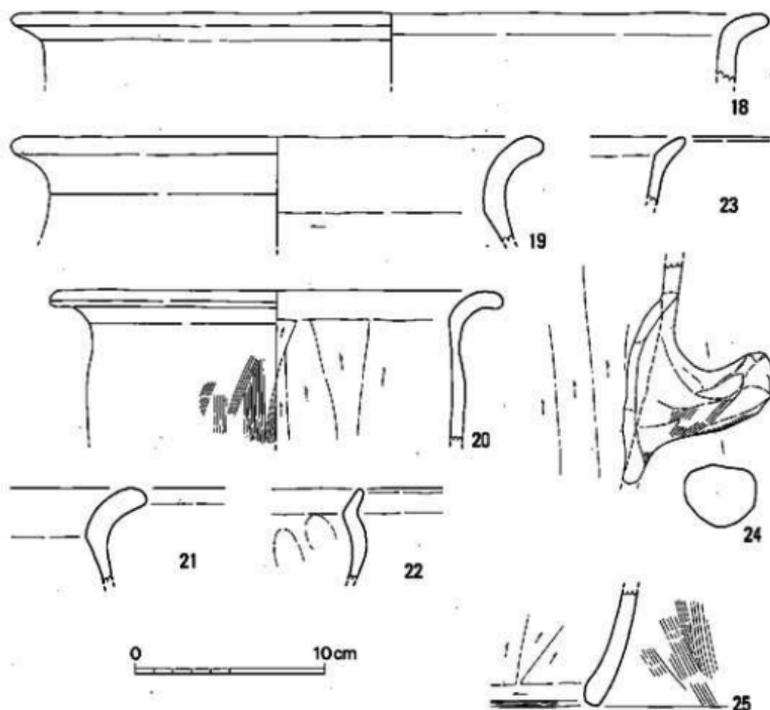
須恵器鉢 (3) 口径19.6cm, 残存器高10.8cmの大きさの、鉄鉢形を呈する鉢で、口縁部は内彎するが、口唇部は内傾して面をもつ。胴部外面は横方向にカキ目調整されるが、一部はヘラ削り化している。胎土に細砂粒を含み、淡茶灰褐色に堅く焼成されている。

土師器杯 (4) 口径13.1cm, 器高3.6cmの大きさの、底部ヘラ切りの杯で、口縁部は開いて端部が緩やかに外反する。胎土に砂粒がほとんどみられず、淡茶褐色に焼成されている。

土師器甕 (5) 胴部の膨らみが少なく、頸部の括れもさほど強くないものの、口縁部が肥



第 51 图 柿原 L 4 - 住居跡出土土器実測图 1 (1/3)



第 52 図 柿原L4一住居跡出土土器実測図2 (1/3)

厚して外反する器形の変である。復原口径26.0cm、胴最大径22.4cmの大きさで、胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面は頸部までヘラ削りされて、頸部下の器壁は薄めである。胎土に石英・雲母・長石を含み、暗黄茶褐色に焼成されるが、胴部外面には煤が付着する。

カマド付近出土土器 (6~8)

土師器杯 (6) 復原口径13.0cm、器高3.2cmの大きさのやや扁平な杯で、口縁部は内彎気味に立ち上がるが、外底部は静止ヘラ削りで、口縁部はヨコナデ調整されている。精良な胎土で、橙褐色に焼成されている。

土師器甕 (7・8) 7は胴部が膨らまずに口縁部が肥厚して外反する小形甕で、復原口径15.4cmの大きさである。8はやや膨らんだ胴部から頸部に括れて、口縁部がさほど肥厚しないで強く外反する甕である。復原口径28.0cmの大きさで、胴部外面は縦方向のハケ目、内面は頸

部下までへら削り調整されて、肩部の器壁は薄めである。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み、赤褐色に焼成されている。

#### 覆土出土土器（9～20）

須恵器杯（9～11） 前2者は外底面の縁より内側に断面四角形の高台が付く杯である。9では復原口径12.6cm、器高4.4cm、高台径8.1cmの大きさで、底部から腹をなして口縁部が直線的に立ち上がって開く。胎土に石英・長石を含み、暗灰色に堅く焼成されている。10・11はこれに比して10の復原高台径が9.1cm、11の復原口径が13.9cmとやや大きく、口縁部への立ち上がりやや緩やかで、灰緑色がかった色調である。

須恵器瓶？（12） 胴部上半部の破片で、復原胴最大径17.0cmの大きさの、細頸壺か瓶であろう。胴部は内外面ともに回転ナア調整されるが、頸部との境には沈線が巡る。胎土に砂粒を含み、暗灰色に堅く焼成されている。

土師器杯（13～17） 13・14はへら切り難しの底部から、ヨコナア調整される口縁部が立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する器形の杯。復原口径12.6cm前後、器高2.6cm・3.0cmの大きさで、胎土に石英・長石・赤褐色粒を僅かに含み、黄褐色ないし褐色に焼成されている。15～17は器面の風化磨滅の進む破片で、13・14に比して、16の破片はほぼ同様の大きさと推定されるものの、15の底部片は小振りである。なお16では胎土に石英・長石・赤褐色粒の他に角閃石を含み、他の資料であまりみられない角閃石を含んでいる。

土師器甕（18～20） いずれも口縁部破片で、さほど肥厚せずに外反する。18・20では胴部側の器壁が薄めで、胴部はほとんど膨らまないよう、19の例は口縁部がやや肥厚して、胴部の膨らむ器形であろう。19は復原口径28.2cmの大きさで、淡褐色に焼成される。20は復原口径24.0cmの大きさで、胴部外面は縦方向のハケ目、内面はへら削りされている。胎土に石英・長石・雲母・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されている。

#### 鉄製品（図版29、第53図1～3）

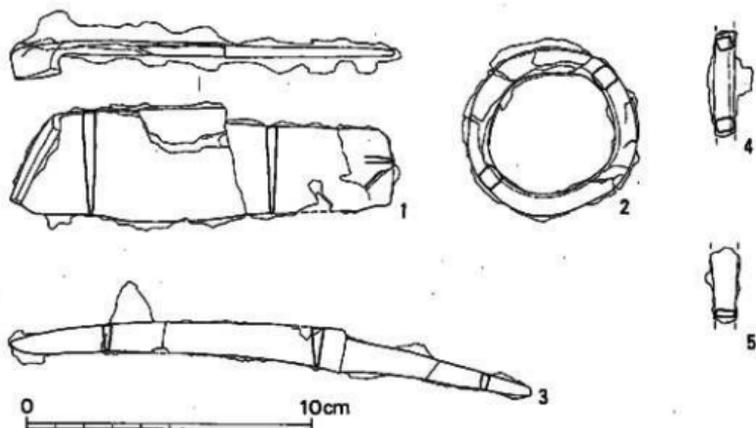
鉄 鎌（1） 炉の北東側から出土した。長さ13.5cm、幅2.7～3.9cm、最大厚0.5cmの大きさで、一方の縁が刃部で、厚みのある端部の背側を斜めに折り曲げている。

鉄 環（2） 炉の北西側から出土した。錆膨れが進んで亀裂も生じているが、外径6.0cm、内径4.2～4.5cmの大きさ。幅・厚さ0.7cmの隅丸方形断面の棒を曲げて繋いだ環であろう。

鉄 刀子（3） 北西側柱穴の北側から出土した。内反りの刃部をもつ刀子で、長さ18.5cm、関部幅1.5cm、厚み0.5cm、身部の長さ12.0cmを測る。基部に木質は錆着していない。

#### 出土鉄滓（図版29）

炉内から39g、炉の周囲から917g、住居跡覆土内から947gの鉄滓が出土した。出土状況は第50図に示すが、炉の南東側にやや多い傾向はみられた。鉄滓の大半は小さな塊だが、若干塊形の鉄滓が含まれていて、大きな塊は炉の北側に散在して出土した。



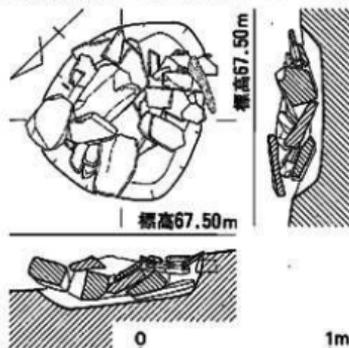
第 33 図 柿原 L 4 - 住居跡出土鉄器実測図 (1/2)

#### L 4 - 土坑 (第46図)

円形の土坑は 4 基あり、うち 3 基は 1 号住居跡に近接する。住居跡北東隅に近い 1 号は直径  $0.6 \times 0.8\text{m}$ 、深さ  $0.1\text{m}$  の規模で、周壁に焼けた面がみられる。北西隅に近い 2 号 (第 54 図) は直径  $0.8 \times 1.0\text{m}$ 、深さ  $0.1 \sim 0.2\text{m}$  の規模で、緑泥片岩の角礫と木炭を多く含む黒褐色土が詰まり、周壁と石材の一部に火を受けた痕がみられる。住居跡南側の 3 号は直径  $1.0 \times 1.2\text{m}$  の規模で、深さ  $0.1 \sim 0.2\text{m}$  だが、北半部の周壁に火を受けた痕跡がみられる。また 2 号円形土坑の北側に  $1.2\text{m}$  離れて位置する 4 号は直径  $0.9\text{m}$ 、深さ  $0.5\text{m}$  を測るが、西側の壁に火を受けた痕跡がみられる。いずれも土師器小片が出土したものの、図示できる資料ではない。

#### 楕円形土坑 (図版 20-1, 第 46 図)

1 号住居跡西側の斜面上側に  $1.5\text{m}$  の距離をおいて位置する。上縁で長径  $3.2\text{m}$ 、短径  $1.9\text{m}$  の大きさ。淡褐色・淡灰褐色の色調を呈する砂礫混じりの堆積土が詰まり、西側壁は緩傾斜だが、東側壁は急傾斜で、東側に深く、最大深さ  $1.5\text{m}$  を測る。



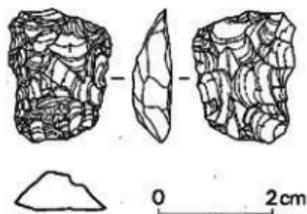
第 54 図 柿原 L 4 - 2 号円形土坑実測図 (1/30)

遺物の出土はみられない。

#### L4-包含層出土遺物

土器 (図版28, 第52図21~25)

土師器壺 (21) 口縁部破片で、胎土に石英・長石・赤褐色粒を含み、淡褐色に焼成されている。胴部はあまり膨らまず、外反する口縁部は肥厚する。内面は胴部までへら削りされる。



第55図 桔原L4-出土石器  
実測図 (実大)

土師器鉢 (22・23) 22は括れた頸部から口縁部が短く外反する破片で、個球形に近い胴部を有する鉢形土器であろう。器面は磨滅するが、胴部内面に指頭圧跡らしい凹みが残る。石英・雲母・赤褐色粒を含む胎土で、赤褐色に焼成されている。23は底部から直線的に開く胴部をもち口縁部が外反する鉢形土器の口縁部片であろう。石英・雲母・赤褐色粒を含む胎土で、淡褐色に焼成されている。

土師器甕 (24・25) 同一個体かもしれないが、途中の破片や口縁部も分からずに接合はしない。胴部片では牛角状の把手が付き、底部片では端部が僅かに肥厚する。外面はハケ目調整、内面はへら削り調整されている。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含み、淡茶褐色ないし淡褐色に焼成されている。

鉄製品 (図版29, 第53図4・5)

4は両端側を失い、全体の形状は不明だが、幅・厚さが0.4~0.5cmの不整形断面の棒状で鉄鍍の基部の可能性もある。また5も両端側を失うが、偏平な断面形で、鉄鍍の先端部に近い部分の破片かも知れない。

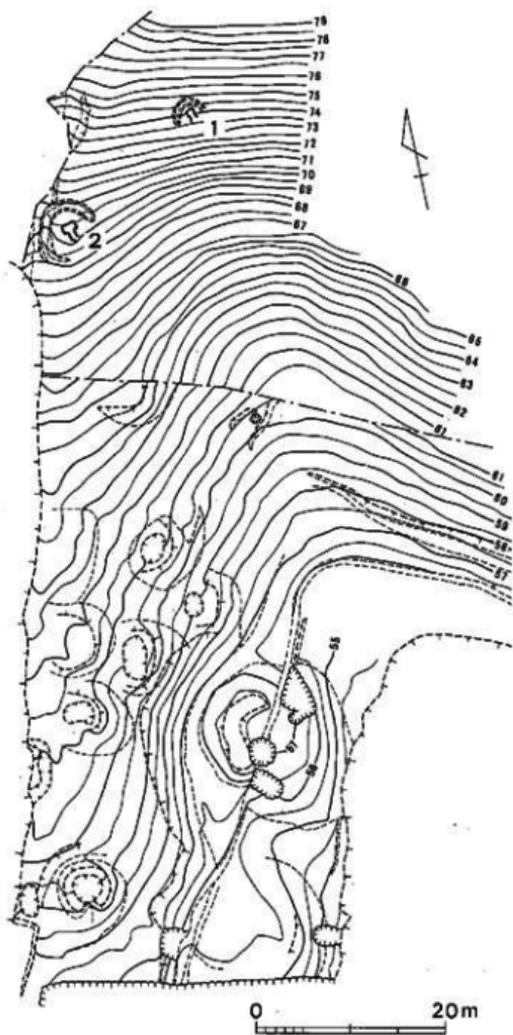
石器 (図版29, 第55図)

搔 搔 黒色黒曜石製の搔搔で、長さ2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.8cmの大きさ。面側の一部に原面を残すがほぼ全面に調整刻離が及んでいる。縄文時代の所産であろう。(小池)

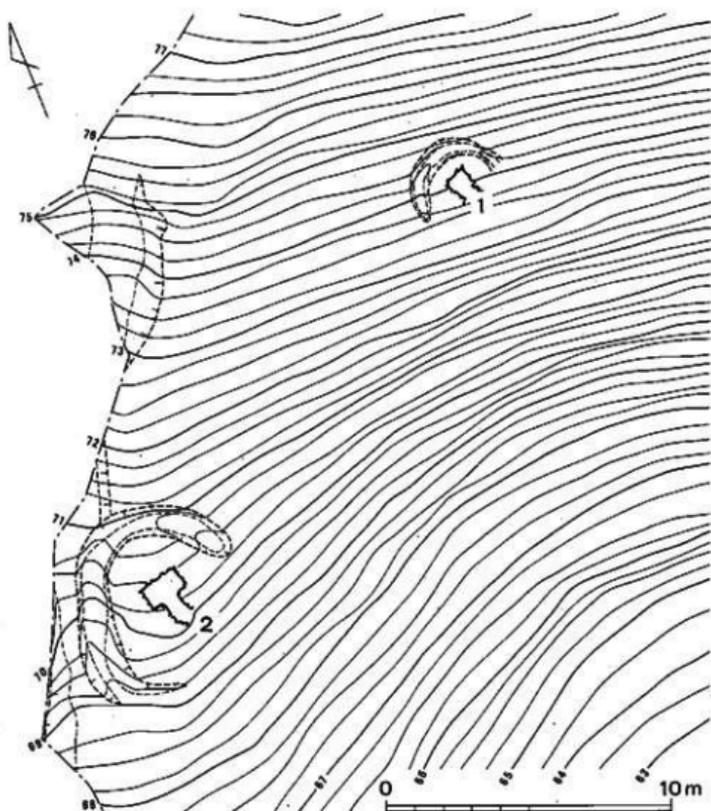
## 4. L南古墳群

### 1号墳 (図版22, 第57・58図)

本墳は、L地区丘陵の標高74mを測る南斜面に位置する。墳丘盛土は全く遺存しないが、トレンチで確認した周溝により、墳丘径2.7mの円墳に復原できる。周溝は墳丘斜面部に設けら



第 58 圖 柘原 L 南古墳群遺構配置圖 (1/600)

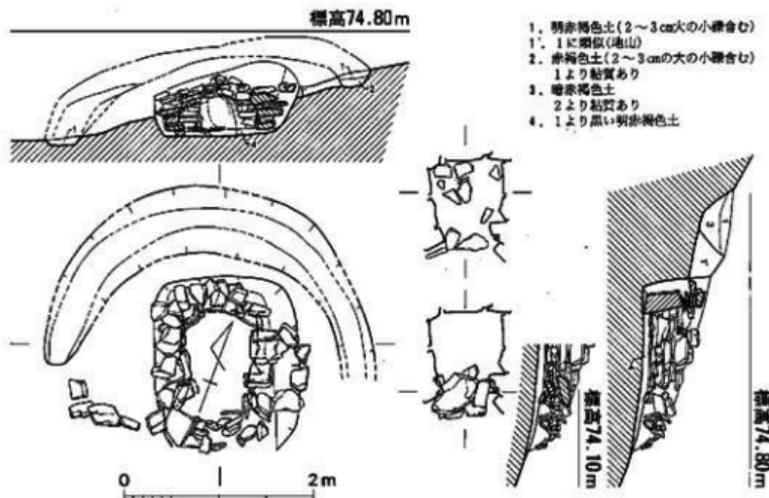


第 57 図 柿原L南1・2号墳地形図 (1/200)

れ、半月形を呈する。上面幅0.7m、深さ0.32m遺存する。埋土は暗赤褐色土で、地山との区別が付け難いものであったが、トレンチによる断面観察の結果、その存在を確認したものである。

主体部 (図版22-2・3、第58図)

本墳の埋葬施設は、南東側に開口する小型単室の横穴式石室で、主軸方位はN21°Wを示す。石室掘形は1.8×1.52mの隅丸長方形を呈する。石室は破壊され、天井石を留めない。また、



第58図 柿原L南1号墳石室実測図(1/60)

入口部を閉塞しているが、羨道部は遺存しない。石室は長さ1.5m、幅0.7m、残高0.55mで、床面プランは只字形を呈する。奥壁の中央に幅0.5m、高さ0.43m、厚さ0.21mの石を立てて鏡石としている。側壁は幅0.15~0.3m、厚さ0.05~0.12mの片岩平石を小口積みしており、現状で6段数える。扉床面は明褐色土を7cm程入れて水平に埋めた後、敷石を施している。

石室内の副葬品は皆無であるが、閉塞石の間から土師器甕の胴部片が出土している。実測に耐えられないため掲載を割愛した。

## 2号墳(図版23, 第57-59図)

本墳は1号墳の13m南西で、標高70mの丘陵斜面部に位置し、未調査の古墳群とは20m程の距離を有する。本墳も墳丘盛土は全く遺存しないが、トレンチで確認した周溝により、墳丘は4.2mの円墳に復原できる。周溝は墳丘斜面部をC字形に巡る。上面幅1~1.2mで、深さは0.2m遺存する。埋土は1号墳同様の暗赤褐色土で、地山との区別が付け難いものであった。

主体部(図版23-2・3, 第59図)

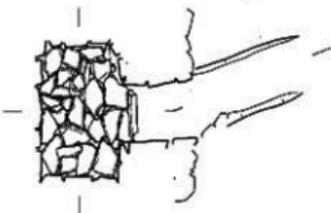
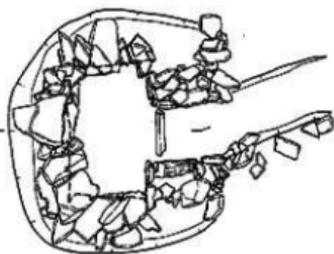
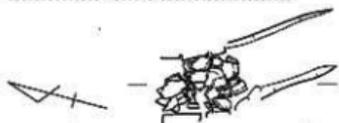
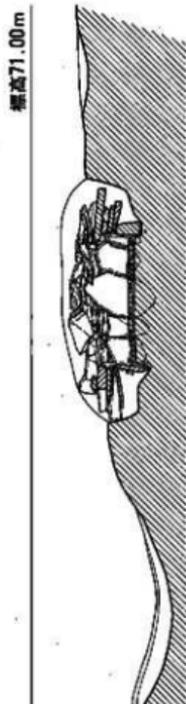
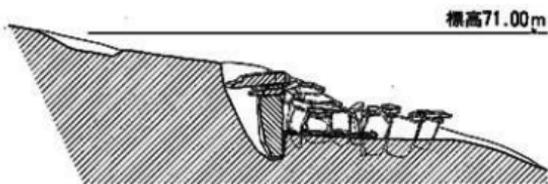


图 58 栲原山南 2 号填石壅塞测图 (1/60)

本墳の埋葬施設は、南東側に開口する小型単室の横穴石室で、主軸方位はN17°Wを示す。石室の掘形は2.6×2.6mの隅丸方形を呈する。石室は破壊され、天井石を留めない。石室長1.4m、幅0.8m、残高0.62mで、床面プランは横位長方形を呈する。石室の基底部は石を立てており、奥壁の中央に幅0.43m、高さ0.75m、厚さ0.24mの石を立てて鏡石としている。側壁は基底部のみ立石で、それから上を小口積みしており、現状で6段数える。屍床面は敷石を施している。

羨道部は長さ0.7m、幅0.55mで、平石で閉塞していた。樫石から2番目までの石を立てており、先端部は石を単に置いた状況である。また、羨道部の両脇は平石を3段積んでおり、外護列石としている。墓道は幅0.65mで、長さ1.35m遺存し、石室主軸から東に振っている。これは、古墳群の墓道を宥蔵したためと考えられる。

石室内の副葬品は皆無であり、周溝内からも遺物は出土していない。(小田)

#### 4. おわりに

##### 生活遺構の時期

L3-1号住居跡は、須恵器杯や皿の特徴などからみて、8世紀第2四半期から中頃の時期であろう。またL3-2号住居跡は、須恵器杯や土師器甕の特徴などから、8世紀中頃～後半にかけての時期が与えられよう。

L4-1住居跡は、須恵器鉢に時期の遡る要素はあるものの、須恵器杯蓋・杯身や土師器杯・甕の特徴からは8世紀第2四半期～中頃の時期が考えられる。鉄鎌や鉄刀子がこの時期まで下らないように思われるが、この住居跡にみられる鍛冶炉も含めて、この時期まで使用されていたと考える必要があり、鉄製品は永く伝世されていたのかも知れない。

土坑からは、8世紀代を中心とした土器類が出土していて、住居跡と並行した時期を想定しておきたい。

L3調査区の包含層には、6世紀末頃の須恵器杯身なども出土しているが、糸切り底の土師器小皿や瓦質の火鉢などは15世紀頃のものである。

##### 古墳群の時期と性格

柿原L北古墳群・L南古墳群では、計4基の古墳を発掘調査した。いずれも既に天井石を失い、開口していたこともあってか、L北2号墳の玄室内で金属器類が若干出土した以外には、遺物は全く出土していない。土器類の出土がみられないことから、時期については金属器と、柿原遺跡群での類例<sup>(註11)</sup>などを中心に、古墳の形體的な特徴から求めざるを得ない。

L北1号墳は、30cm前後の単位尺で、玄室の長さとの比が4:5になるが、羨道幅は23cmで3尺になる。柿原D地区11号墳の玄室を一回り小さくしたような石室である。D11号墳は7世紀後半頃に考えられている。

L北2号墳出土の銀製柄頭?金具は、石突の可能性もあり、奈良県明日香村高松塚古墳の副葬品に類例がある<sup>(註2)</sup>。高松塚の例でみると、石突の方の大きさに近い。帯状の銀製刀装金具は、細かな用途と類例を知らないが、おそらくこの柄頭金具と原形をとどめない鉄刀片と共に関連のある遺物であろう。従って、2号墳は高松塚古墳と同様な時期まで使用されたと推定できよう。

L北2号墳は、30cmの単位尺で、玄室の長さとの比が7:7か、7:8になるが、羨道は5:2+a尺の規模である。D地区1号墳と比較した時には玄室の長さが短く、D地区の3号墳や8号墳と玄室規模は近似し、2号墳にも近い。これらの古墳は7世紀後半の時期が与えられている。玄室内部の敷石に屍床を意図したような区画を設けていることも注目されるが、敷石に川原石円礫を用いた例は、柿原古墳群のなかではE・F区5号墳に類例をみるのみである。また敷石に区画を有する例としては、D区18号墳石室の敷石に奥壁から40cmの部分と右壁に接した60cm幅の部分が敷石の区画を思わせる例があり、E区2号墳で奥壁側の70cm幅部分の敷石が僅かに高くなっている例がある。

L2号墳には外護列石があり、石室前面に石壇状区画が設けられている。外護列石は柿原古墳群中にも多くみとめられ、朝倉郡朝倉町北八坂古墳群<sup>(註3)</sup>、赤林古墳群・山後山古墳群<sup>(註4)</sup>、柞木町大谷古墳群<sup>(註5)</sup>、大野城市王城山古墳群<sup>(註6)</sup>、福岡市柿原古墳群<sup>(註7)</sup>や、朝鮮半島の慶尚南道<sup>(註8)</sup>などにもみられる。石室前面の区画は、柿原D地区1号墳・5号墳などに類例がある。L2号墳では区画部分から遺物は出土しなかったが、方形区画をもつD1号では7世紀後半以前の土師器甕・甔・高杯が出土している。

L南1号墳は、30cmの単位尺を想定すると、玄室の長さ・幅ともに2尺で余りが出るが、23cm単位では3尺であろう。奥壁に板石の並ぶD地区6号墳よりも僅かに小さく、むしろE・F地区8号墳に石室は似ている。

L南2号墳は、30cmよりも僅かに短い単位尺で、玄室の長さとの比が3:5になる。羨道は26cm単位尺であれば3:2の規模である。D地区の古墳では横長の石室の例は21・23号墳に例があり全体は扁平石で平積みされている。基底部に板石の並ぶ横長方形タイプの石室はI地区20~23号墳にみられるが、L南2号墳の例はI地区よりも更に奥行きが短い。時期を判断できる材料は豊富ではないが、形態的にはL北1号墳よりも奥行きがかなり短くなることからして、L北1号墳よりも時期的に下降した頃に構築されたものと推定され、7世紀末以降の可能性もある。

これまで柿原遺跡群の範囲内で発掘調査された、横穴式石室を主体部にする古墳を、形態面

から分類して分布状況を見ると、付図2のようになる。ここでの1類石室は玄室が長めで均整のとれた胴張りの複室石室、2類は玄室の長さが幅に近い胴張りの複室石室、3類は2類から退化した複室石室、4類は玄室平面形が半円形に近くて前室が消失したタイプの石室である。また5類は長方形あるいは羽子板形の平面形をもつ石室、6類は2類石室と同様に玄室の長さが幅に近いもので、側壁にも一部鏡石のような石が立つ。7類は方形プランの石室でなかには奥行きが若干幅よりも短い例もある。8類はいわゆる横長石室である。方形タイプの7類のみならず4類石室からの退化形態も考えられよう。9類は玄室の長さあるいは幅のいずれか長い方の寸法が1m以下の、小形石室である。

これからみると、次のような傾向が窺える。

- \* I地区谷部を中心に西寄りの向きに開口する長方形タイプの石室が構築されている。
- \* 1類石室は先端部や平地側に構築されているが、南側に開口する例が多い。
- \* 2類・3類石室はD地区やE・F地区などにも進出するが、方形タイプの5・6類石室は尾根線や斜面の上部に構築される例が多く、群の中でも端部に位置している。
- \* I地区谷部の群では2・3類石室が顕著でない。
- \* これに対し、D地区・L地区では、D1号墳やL北2号墳のような群を代表するような占地で、規模の大きな古墳が方形タイプの石室を採用しているが、D地区やE・F地区のなかでは胴張りタイプ系の石室が続いて構築されている。方形タイプにも胴張りタイプの折衷したような例をみれることからしても、方形タイプが新たな勢力として加わって支配的な立場を占めるものの、在来の勢力と拮抗していたことも想定されよう。(小池)

- 注1 福岡県教育委員会 1984 柿原古墳群Ⅰ 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-4-  
 福岡県教育委員会 1986 柿原古墳群Ⅱ 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-6-  
 福岡県教育委員会 1987 柿原遺跡群Ⅲ 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-12-  
 福岡県教育委員会 1990 柿原遺跡群Ⅳ 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-19-
- 2 奈良国立文化財研究所・飛鳥資料館 1979 飛鳥時代の古墳
- 3 新倉町教育委員会 1973 果宮宮野地区開拓パイロット事業地区遺跡調査報告書Ⅱ
- 4 新倉町教育委員会 1974 果宮宮野地区開拓パイロット事業地区遺跡調査報告書Ⅲ
- 5 本書Ⅲ章参照、柿原古墳群Ⅰでも用いられているが、「内護列石」とされている。
- 6 福岡県教育委員会 1977 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅹ
- 7 福岡市教育委員会 1974 粕原古墳群 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第28集
- 8 釜山大学校博物館 1987 陝川亭浦里B地区遺跡 釜山大学校博物館遺跡調査報告 第11輯

# 圖 版



1 大谷遺跡遠景 (西南から)

2 遺跡遠景 (南から)

3 遺跡遠景 (南から気球写真)



1



2



3

1 大谷1号墳全景（北西から） 2 1号墳全景（南から）  
3 1号墳全景（南上方から）

1



2



1 大谷1号墳石室・内護列石（南から）

2 1号墳石室・内護列石（南から）〈天井石除去後〉



1



2

1 大谷1号墳石室玄門（南から）

2 1号墳玄室内（南から）



1



2



3

1 大谷1号墳全景（北側背後から） 2 1号墳石室（玄門を望む）  
3 1号墳内護列石（西から）



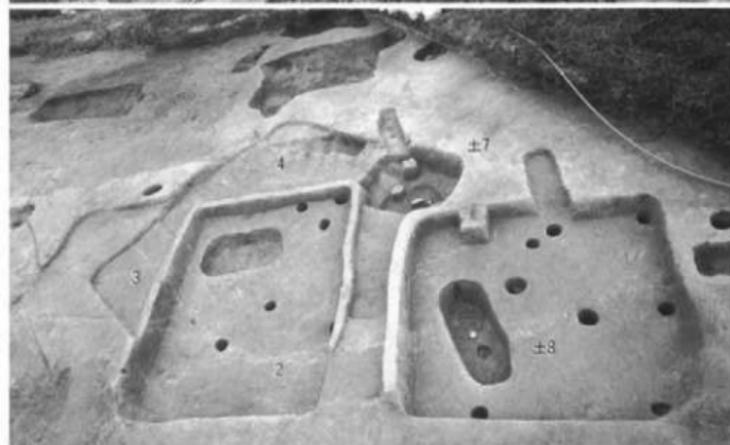
1 大谷2号墳遠景（南東から）

2 2号墳周溝東側土層（西から）

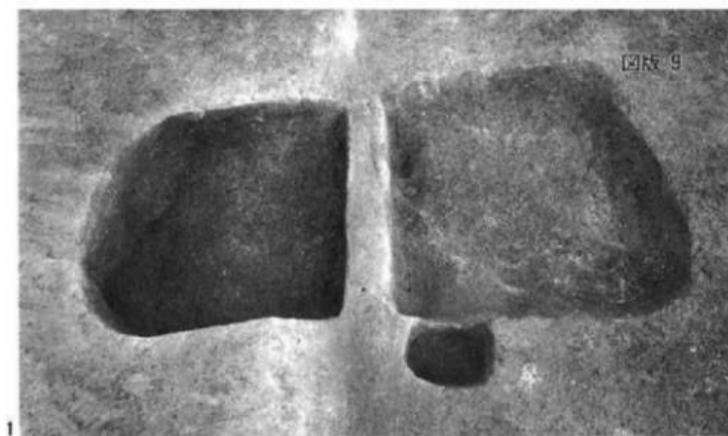
3 2号墳全景（南から）



1 大谷 2号墳石室全景 (南から)  
2 2号墳石室近景 (南から)  
3 2号墳石室東側壁と玄門 (西から)

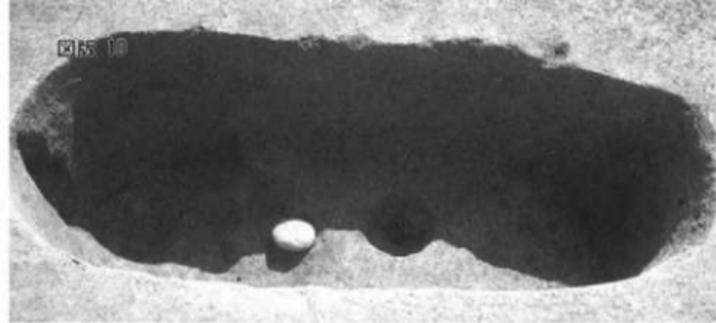


1 大谷遺跡西尾根の東斜面全景（北西から） 6  
 2 SX 1～4（北西から） 3 SX 1～4（北東から）



1 大谷5号土坑 (南から)  
3 7号土坑 (北から)

2 6号土坑 (南から)



1



2



3

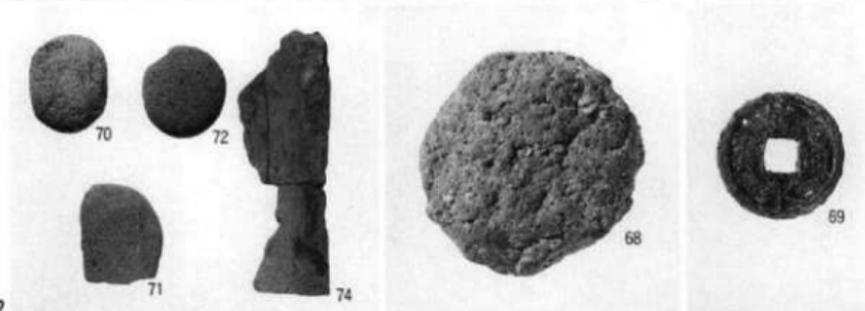
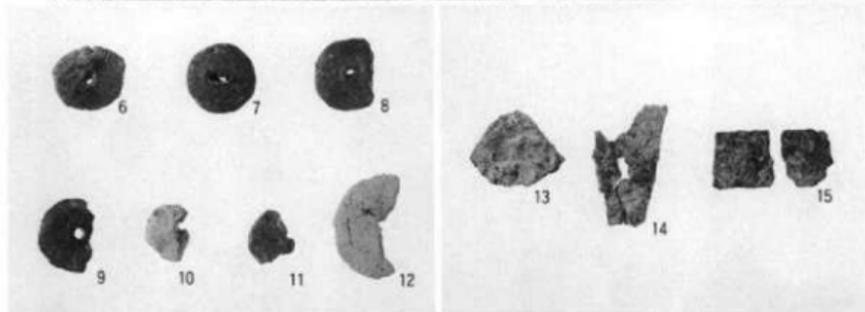
1 大谷 8 号土坑 (北から)

2 9 号土坑 (南から)

3 10 号土坑 (北東から)



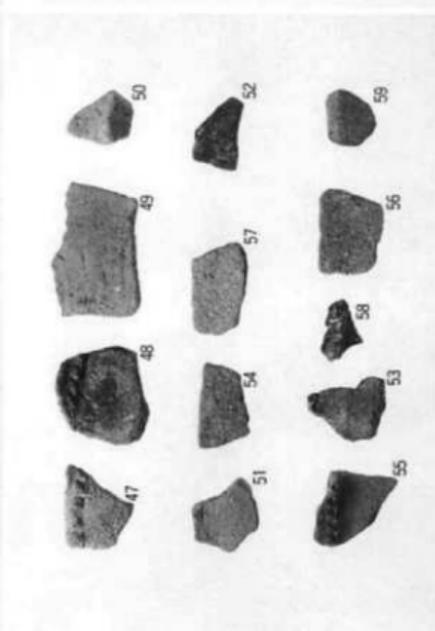
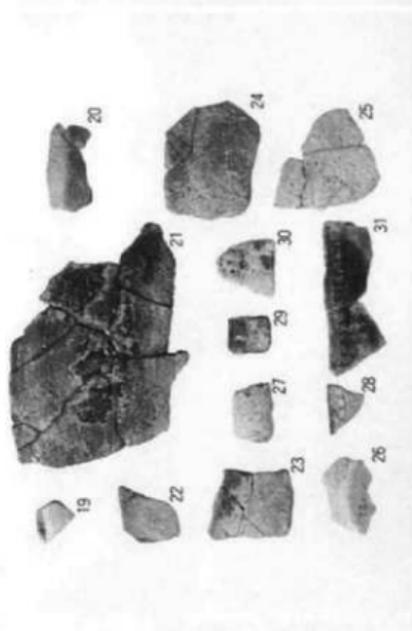
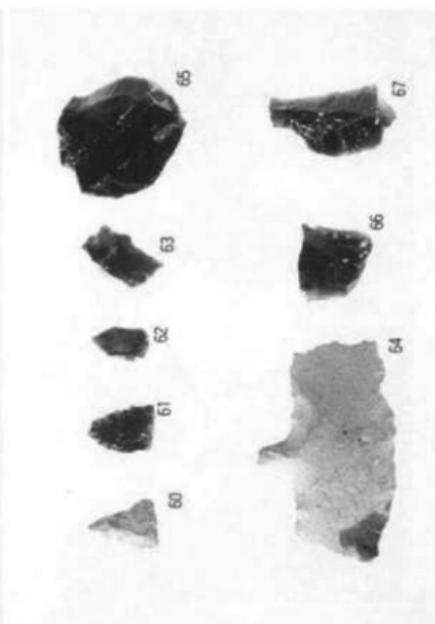
1



2

1 大谷11号土坑（北から）

2 出土土製品・鉄製品・石器・古銭



大谷遺跡出土器・石器類



1



2

1 柿原遺跡群航空写真 2 柿原遺跡群L地区航空写真

1 柿原L北1・2号墳全景(南から)



2 L北1号墳全景(南から)



3 L北1号墳石室(南から)





1 柿原L北2号墳全景（南から）

2 L北2号墳全景（西から）



1 柿原L北2号墳石室（南から）

2 L北2号墳右側前面区画（南から）



1



3



2

- 1 柿原L北2号墳玄室敷石状況8  
 2 L北2号墳羨道敷石状況  
 3 L北2号墳玄室遺物出土状況



1 柿原L 2～4 調査区全景  
(北北東から)  
2 L 3 調査区 (北北東から)  
3 L 3 調査区調査風景



1



2



3

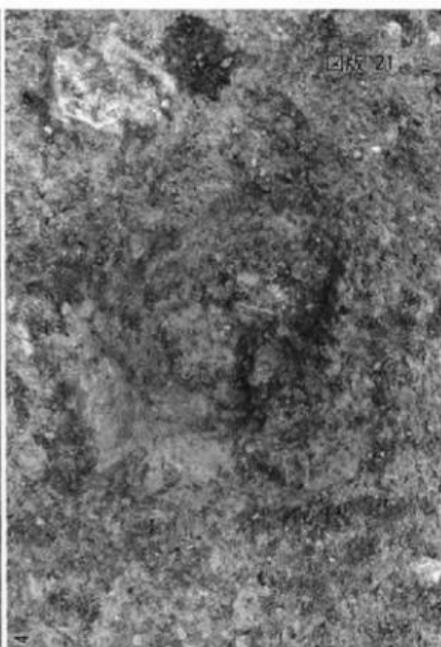
- 1 柿原L3調査区2号住居跡  
(東から)
- 2 2号住居跡カマド  
(北から)
- 3 完掘後の2号住居跡  
(東から)

1 柿原L4調査区全景(北から)

2 L4調査区住居跡(東から)

3 L4調査区住居跡(南から)





1 棚原 L4 調査区住居跡カマド (北から)  
 2 住居跡カマド (東から)  
 3 住居跡屋内土坑 (東から)  
 4 住居跡製鉄炉跡 (北から)



1



2



3

- 1 柿原L南1・2号墳（東から）
- 2 L南1号墳石室（南から）
- 3 L南1号墳石室底部と周溝（南から）



1



2

- 1 柿原I南2号墳  
(南から)
- 2 I南2号墳石室  
(南から)
- 3 I南2号墳石室  
基部 (南から)



3



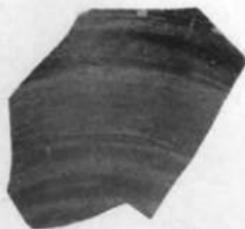
1住-2



1住-3



1住-4



1住-5



2住-2



2住-4



2住-6



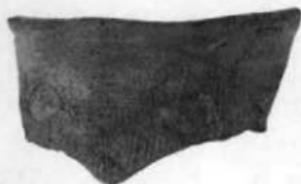
2住-7



2住-8



2住-9



2住-10



2住-11



2住-12



2住-13



1坑-2



2住-14



1坑-3



2住-15



1坑-4



2住-16



1坑-5



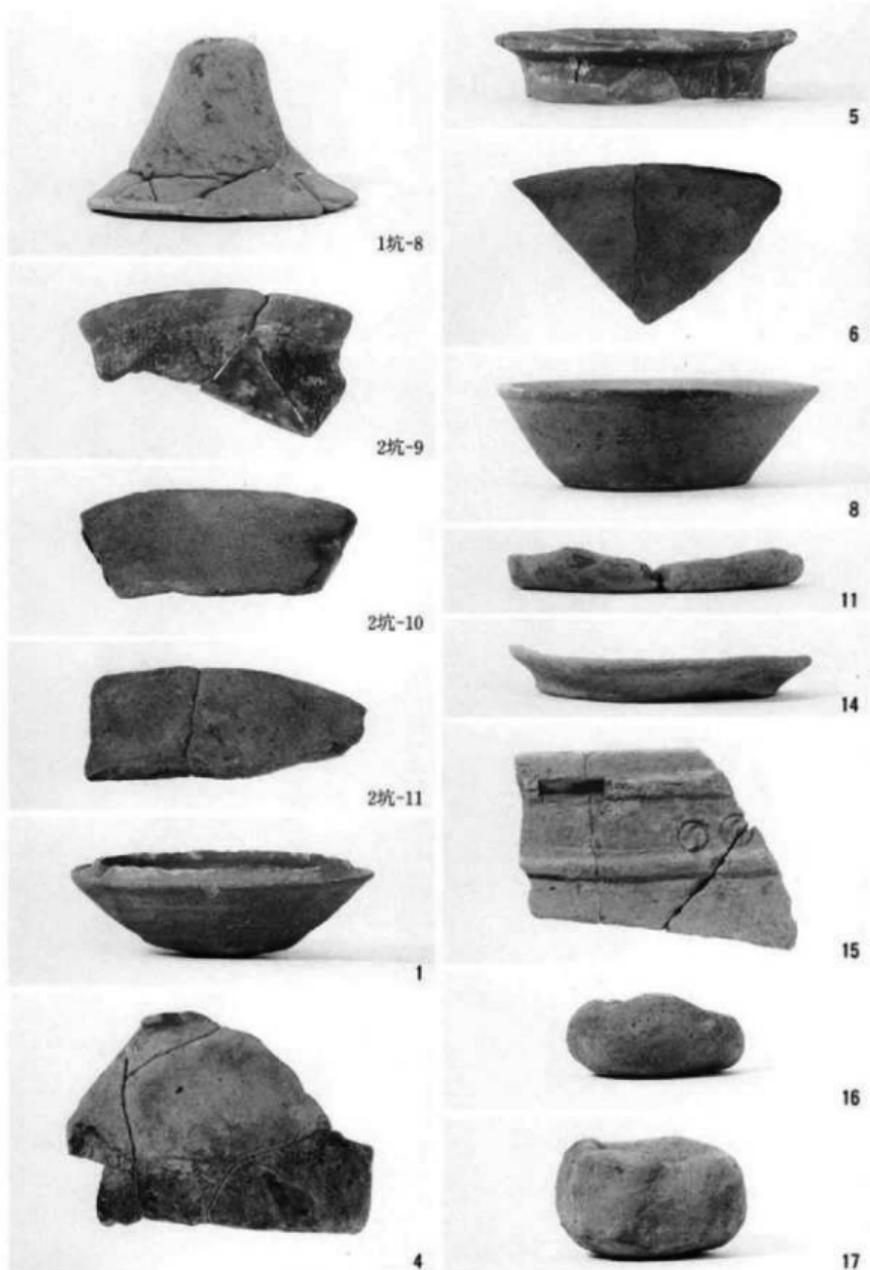
1坑-1



1坑-6



1坑-7



栲原L3調査区土坑・包含層出土土器



1



2



4



6



7



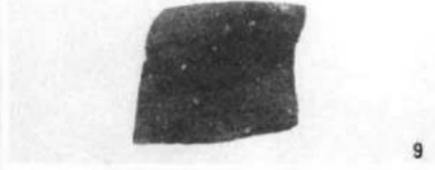
8



3



5



9



10



13



14



15

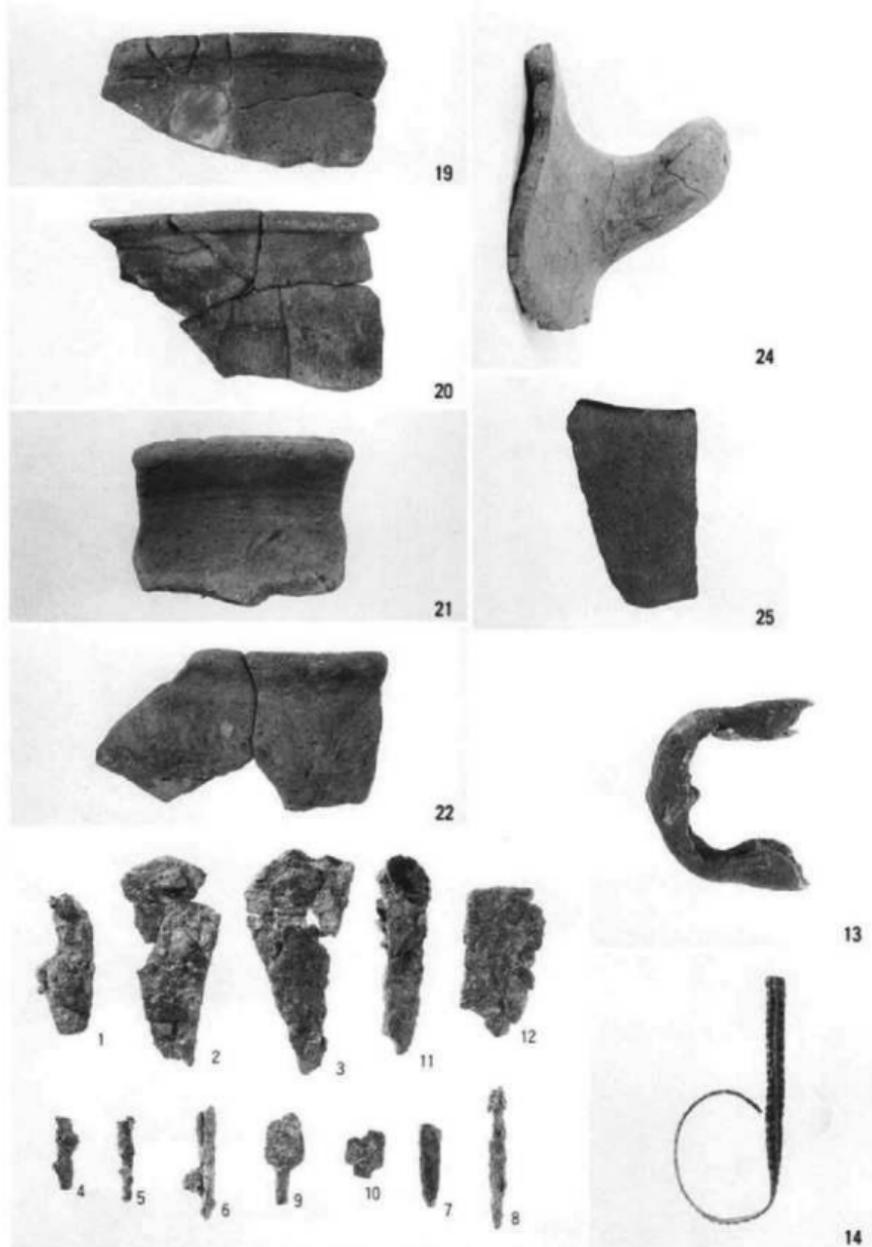


16

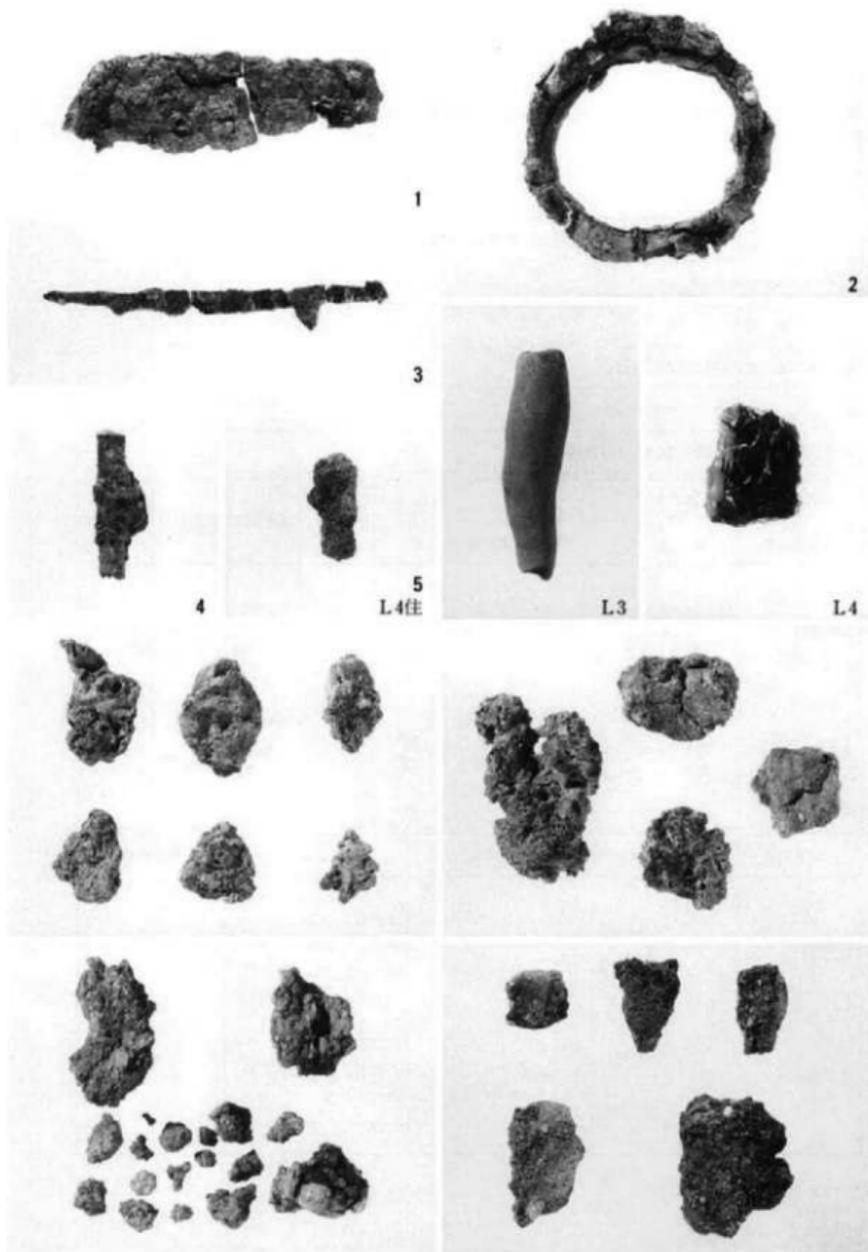


17

柿原 L. 4 調査区住居跡出土土器



柿原L4調査区住居跡等出土土器，L北2号墳出土金属器類



柿原 L 3 調査区出土製品, L 4 調査区出土石器・鉄製品・鉄滓類

# 報告書抄録

ふりがな	あさくらぐんはきまちしよがいおたにいせき・あまぎししよがいきばるいせきぐんⅣ (Lちく)
書名	朝倉郡杷木町所在大谷道跡・甘木市所在柿原道跡群Ⅳ (L地区)
副書名	
巻次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	—41—
編著者名	小池史哲
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812 福岡市博多区東公園7-7
発行年月日	西暦 1996年3月31日

ふりがな 所収道跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ・・・	東経 ・・・	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	道跡番号					
大谷道跡	朝倉郡杷木町 大字若市宇大谷	40441	580156	33° 21' 54"	130° 47' 58"	19870922	12730㎡	九州横断 自動車道 建設
						19871210		
柿原道跡群 L地区	甘木市大字柿原 字若山	40209	100439	33° 25' 7"	130° 41' 25"	19840604	9400㎡	九州横断 自動車道 建設に伴 う土取り
						19840726		
						19851022		
						19851119		

所収道跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大谷道跡		古墳時代	古墳2 土坑32	土師器 鉄器。刀装具 縄文晩期土器、石鏃	
		縄文時代	竪穴4 土坑17		
柿原道跡群 L地区		古墳時代	古墳4	須恵器、土師器 刀装具、鉄刀、鉄刀子 鉄器、鉄鏃 土鏃	
		奈良時代	住居跡3 (うち1は製鉄炉をもつ) 土坑6		

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 7	登録番号 8

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—41—

平成8年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社 チューエツ福岡工場  
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号

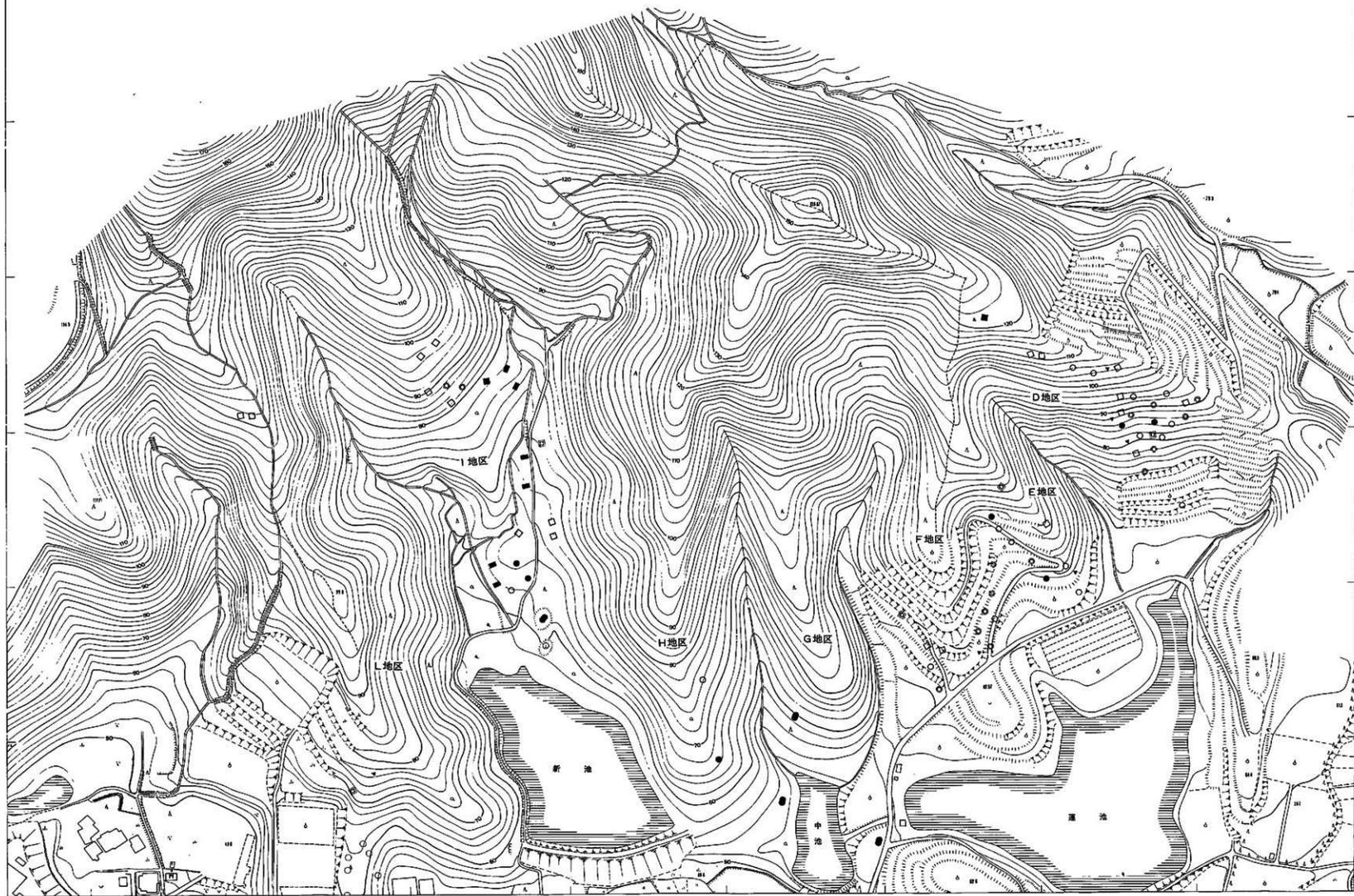
九州横断自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

— 41 —

朝倉郡杷木町所在大谷遺跡の調査  
甘木市所在柿原遺跡群の調査Ⅳ

付 図





- 1類石室
- 3類石室
- 5類石室
- 7類石室
- ▼ 9類石室
- 2類石室
- ⊙ 4類石室
- 6類石室
- ⊠ 8類石室
- 未調査古墳

付図2 柿原遺跡群地形図と石室形態別の古墳分布 (1/2000)

